

72-62

律 法

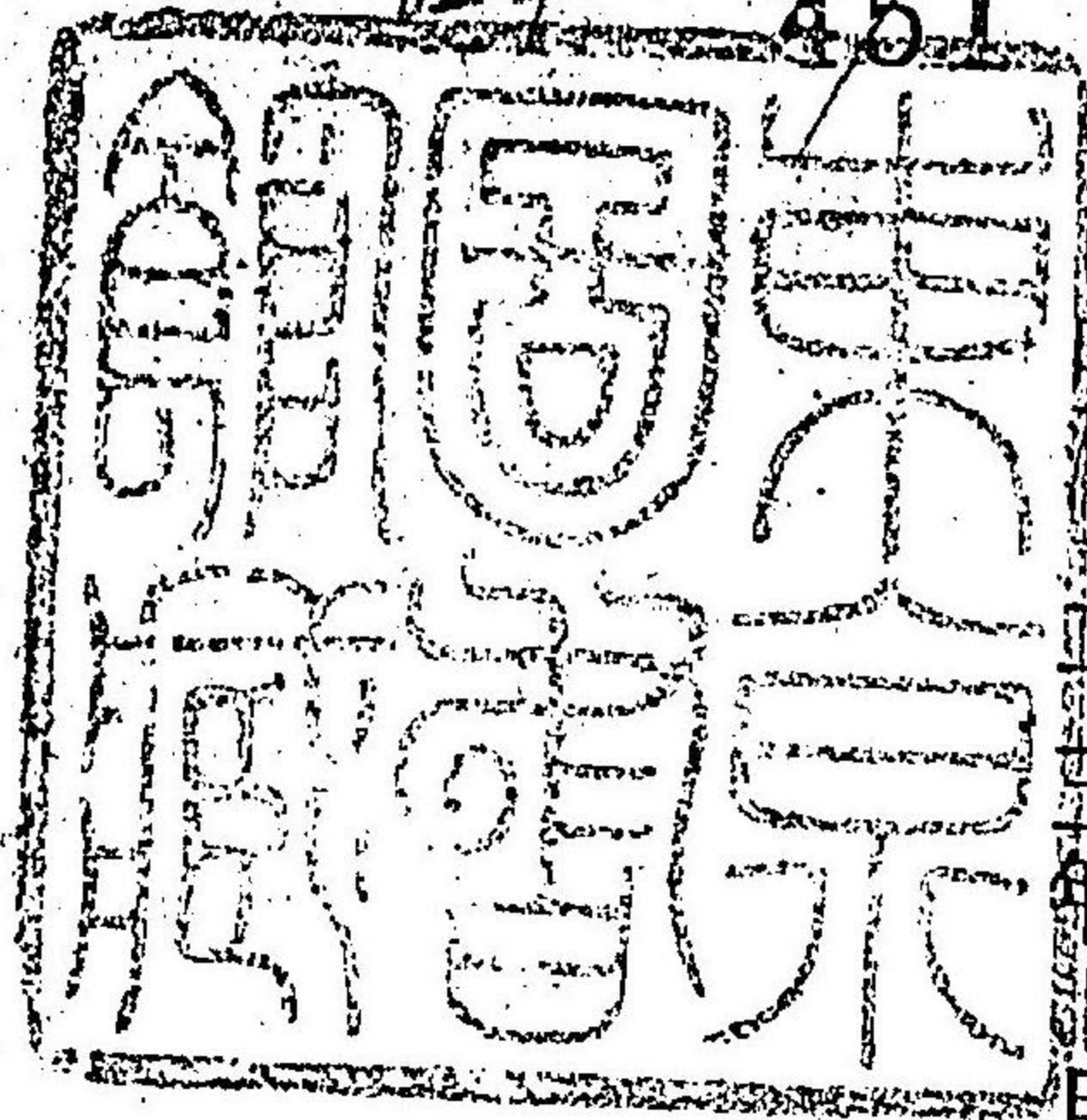
CZ
791
024

刑 事 訴 訟 法
民 法 財 產 取 得 篇 續 篇
民 法 人 事 篇

東 京 同 盟 書 肆 發 兌

3E-6Z

CZ
791
024
特46No 6349/
451
23



明治二十三年十月六日

御名 御璽

朕刑事訴訟法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

農	文	海	外	遞	陸	大	司	內	內
商	部	軍	務	信	軍	藏	法	務	閣
務	大	大	大	大	大	大	大	大	總
大	臣	臣	臣	臣	臣	臣	臣	臣	理
臣		子	子	伯	伯	伯	伯	伯	大
		爵	爵	爵	爵	爵	爵	爵	臣
陸	芳	樺	青	後	大	松	山	西	山
奧	川	山	木	藤	山	方	田	鄉	縣
宗	顯	資	周	象		正	顯	從	有
光	正	紀	藏	郎	巖	義	義	道	朋



法律第九十六號

刑事訴訟法目錄

第一編 總則

第二編 裁判所

第一章 裁判所ノ管轄

第二章 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避、回避

第三編 犯罪ノ捜査、起訴及ヒ豫審

第一章 捜査

第一節 告訴及ヒ告發

第二節 現行犯罪

第二章 起訴

第三章 豫審

第一節 令狀

第二節 密室監禁

第三節 證據

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第五節 檢證、搜索及ヒ物件差押

第六節 證人訊問

第七節 鑑定

第八節 現行犯ノ豫審

第九節 保釋

第十節 豫審終結

第四編 公判

第一章 通則

第二章 區裁判所公判

第三章 地方裁判所公判

第五編 上訴

第一章 通則

第二章 控訴

第三章 上告

第四章 抗告

第六編 再審

第七編 大審院ノ特別權限ニ屬スル訴訟手續

第八編 裁判所執行、復權及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第二章 復權

第三章 特赦

附則

刑事訴訟法

第一編 總則

第一條 公訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルコトヲ目的トスルコトヲ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢事之ヲ行フ

第二條 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償、贓物ノ返還ヲ目的トスルモノニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス

第三條 公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ルモノニ非ス又タ告訴私訴ノ拋棄ニ因テ消滅スルモノニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス

第四條 私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラズ公訴ニ付キ第二審ノ判決アルマテ何時ニテモ其公訴ニ附帶シテ之ヲ爲スコトヲ得

第三者ハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ公訴附帶ノ私訴ニ参加スルコトヲ得

第五條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリ

ト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要ムル妨礙ト爲ルコトナカル可シ

第六條 公訴ヲ爲ス權ハ左ノ事項ニ因テ消滅ス

第一 被告人ノ死去

第二 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ告訴ノ拋棄

第三 確定判決

第四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止

第五 大赦

第六 時效

第七條 私訴ヲ爲ス權ハ左ノ事項ニ因テ消滅ス

第一 拋棄又ハ和解

第二 確定判決

第三 時效

第八條 公訴ノ時效ハ左ノ期間ヲ經過スルニ因テ成就ス

第一 違警罪ハ六月

第二 輕罪ハ三年

第二 重罪ハ十年

第九條 私訴ノ時効ハ被害者無能力ナルトキ又

ハ公訴ニ附帶セシテ其訴ヲ爲シタルトキト

雖モ公訴ノ時効ト其期間ヲ同クス

公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタルトキハ民法

ニ定メタル時効ノ例ニ從フ

第十條 公訴、私訴ノ時効ハ犯罪ノ日ヨリ其期

間ヲ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨ

リ起算ス

第十一條 時効ハ起訴、豫審又ハ公判ノ手續ア

リタルニ因リ其期間ノ經過ヲ中斷ス其未タ發

覺セサル正犯、從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ

亦同シ

時効ノ經過ヲ中斷シタルトキハ起訴、豫審又

ハ公判ノ手續ヲ止メタル日ヨリ更ニ其期間ヲ

起算ス

第十二條 起訴、豫審又ハ公判ノ手續其規定ニ

第十四條 被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ

判事、檢事、裁判所書記、執達吏、司法警察官又

ハ巡查、憲兵卒ニ對シ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ

得ス但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損

害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル場

合ハ此限ニ在ラス

第十五條 此法律ニ於テ期間ヲ計算スルニ時ヲ

以テスルモノハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスル

モノハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ當

ルトキハ期間ニ算入ス可カラズ但時効ノ期間

ハ此限ニ在ラス

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱ス

ルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

第十六條 此法律ニ定メタル期間ニハ海陸路八

里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サルモノト

雖モ三里以上ナルトキ亦同シ

島嶼又ハ外國ニ付テハ裁判所ニ於テ特ニ附加

期間ヲ定ムルコトヲ得

背キタルニ因リ無効ニ屬スルトキハ時効ノ經

過ヲ中斷スル效ナカル可シ但裁判所ノ管轄違

ナルニ因リ其手續ノ無効ニ屬スルトキハ此限

ニ在ラス

第十三條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタ

ル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人、告發人又

ハ民事原告人ノ惡意若クハ重過失ニ出テタル

トキハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルコト

ヲ得

被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人、告

發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重過失ニ

因リ其犯罪ニ付キ過貫ノ申立ヲ爲シタルトキ

亦同シ

民事原告人上訴ヲ爲シ敗訴シタルトキハ被告

人其上訴ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ要ムルコ

トヲ得

要償ノ訴ハ本案ノ判決アルマテ何時ニテモ其

裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第十七條 此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メ

タル期間ヲ經過シタルトキハ特別ノ場合ヲ除

ク外其訴訟ヲ爲ス權ヲ失フ可シ

第十八條 訴訟關係人ハ裁判所所在ノ地ニ住セ

サルトキハ其地ニ假住所ヲ定メ裁判所ニ届出

ツ可シ否ラサルトキハ書類ノ送達ナシト雖モ

異議ヲ申立ルコトヲ得ス

第十九條 書類ノ送達ハ此法律ニ於テ別ニ規定

アラサルトキハ民事訴訟法ノ規定ヲ準用ス

第二十條 官吏、公吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬

官署、公署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載

シテ署名捺印シ毎葉ニ契印ス可シ若シ官署、

公署ノ印ヲ用ユルコト能ハサル場合ニ於テハ

其事由ヲ記載ス可シ此規定ニ背キタルトキハ

其書類ノ效ナカル可シ

官吏、公吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本

人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト

能ハサルトキハ官吏、公吏ノ面前ニ於テ作リ

タル場合ヲ除ク外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ

第二十一條 官吏其他何人ニ限ラズ訴訟ニ關スル書類ノ原本、正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラズ若シ挿入、削除及ヒ欄外ノ記入アルトキハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スルトキハ之ヲ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規定ニ背キタルトキハ其變更増減ノ效ナカル可シ

第二十二條 此法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサルトキハ其效アリトス

第二十三條 此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルコトヲ得ス

第二十四條 此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ規定ニ從フ

第二編 裁判所

族ノ犯罪ニ付テハ其正犯、從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハズ大審院ニ於テ之ヲ管轄ス

第二十九條 外國ニ在テ犯シタル罪本邦ノ法律ニ依リ處斷ス可キモノニシテ内地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタルトキハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタルトキハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第三十條 海般内ノ犯罪ニ付テハ定繫港又ハ犯罪後最初ニ著船シタル地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第三十一條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判所ハ裁判所構成法第十條ノ規定ニ從フ

第三十二條 管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スコトヲ得大審院ニ於テ管轄裁判所ヲ指定ス可キ場合ニ

第一章 裁判所ノ管轄

第二十五條 犯罪ノ種類ニ關スル裁判所ノ管轄ハ裁判所構成法ノ規定ニ從フ

管轄ヲ異ニスル數箇ノ犯罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタルトキハ上級ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

第二十六條 同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地又ハ被告人所在ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトス

第二十七條 數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第二十八條 從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アルトキハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

裁判所構成法第五十條第二號ニ記載シタル皇

於テハ檢事總長ハ司法大臣ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其申請ヲ爲スコトヲ得

第三十三條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲サントスル者ハ申請ニ付管轄權ヲ有スル裁判所ニ其趣意書ヲ差出ス可シ

第三十四條 犯罪ノ性質、被告人ノ身分、員數、地方ノ民心其他重大ナル事情ニ由リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スル恐アルトキハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

第三十五條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ハ司法大臣ノ命ニ因リ大審院檢事總長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

大審院ニ於テハ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クコトナク其申請ヲ決定スヘシ

第三十六條 被告人ノ身分、地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルコト能

ハサル恐アルトキハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

第三十七條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ハ管轄裁判所ノ檢察其他訴訟關係人ヨリ上級裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタルトキハ前項ノ申請ヲ爲スコトヲ得

第三十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ヲ爲スニハ其趣意書ニ通テ原裁判所ニ差出ス可シ裁判所書記ハ速ニ一通テ相手方ニ送達シ相手方ハ其送達アリタルヨリ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

裁判所ニ於テ前項ノ申請ヲ受ケタルトキハ其訴訟手續ヲ停止ス可シ

第三十九條 前條ノ申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ於テハ書類ニ依リ其申請ヲ決定ス可

其他訴訟關係人ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得

第四十二條 忌避ノ申請及ヒ其裁判ニ付テハ民事訴訟法第三十四條乃至第三十八條ノ規定ニ從フ

第四十三條 忌避ノ申請アリタルトキハ公判ニ付テハ其辯論ヲ中止ス可シ豫審ニ付テハ仍ホ其處分ヲ繼續ス可シ但急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審手續ヲ中止スルコトヲ得

第四十四條 判事自ラ第四十條ニ定メタル理由アルコトヲ認メ又ハ回避ス可キモノト思料シタルトキハ忌避申請ノ管轄裁判所ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ

其裁判所ニ於テハ回避ノ申立ヲ裁判ス可シ
第四十五條 本章ノ規程ハ裁判所書記ニモ之ヲ準用ス但其裁判ハ書記所屬裁判所之ヲ爲ス可シ

第三編 犯罪ノ捜査、起訴及ヒ豫審

第一章 捜査

第二章 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避、回避
第四十條 判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除斥セラル可シ

第一 判事被害者ナルトキ

第二 判事又ハ其配偶者ト被告人、被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三 判事其事件ニ付キ證人、鑑定人ト爲リタルトキ又ハ被告人若クハ被害者ノ法律上代理人ナルトキ

第四 判事其事件ノ豫審終結ニ干與シ又ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ前審ニ干與シタルトキ

第四十一條 判事法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラルル場合及ヒ偏頗ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ情況アル場合ニ於テハ檢察

第四十六條 檢察ハ後ニ記載シタル告訴、告發、現行犯其他ノ理由ニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ其證據及ヒ犯人ヲ捜査ス可シ

第四十七條 警視總監及ヒ地方長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査スルニ付キ地方裁判所檢察ト同一ノ權ヲ有ス但東京府知事ハ此限ニ在ラス

左ニ記載シタル官吏、公吏ハ檢察ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査ス可シ

第一 警視警部長、警部、警部補

第二 憲兵將校、下士

第三 嶋司

第四 郡長

第五 林務官

第六 市町村長

第四十八條 海船内ノ犯罪ニ付テハ船長ニ於テ

司法警察ノ職務ヲ行フ可シ

第一節 告訴及ヒ告發

第四十九條 何人ニ限ラス犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若シハ被告人所在ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得
司法警察官告訴ヲ受ケタルトキハ違警罪ニ付キ即決ヲ爲ス場合ヲ除ク外速ニ其書類ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致ス可シ

第五十條 告訴人ハ成ル可ク其證據及ヒ事實參考ト爲ル可キコトヲ申立ツ可シ

第五十一條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作り告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ
第五十二條 官吏、公吏其職務ヲ行フニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタ

ルトキハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シ

告發ハ官吏、公吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ

第五十三條 何人ニ限ラス犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ第五十條第五十一條ノ規定ニ從ヒ其所在ノ地若シハ犯罪ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ告發スルコトヲ得

告發ヲ受ケタル司法警察官ハ第四十九條ノ規定ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

第五十四條 告訴、告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スコトヲ得但第五十二條ノ場合ハ此限ニ在ラス

無能力者ノ告訴ハ法律上代理人之ヲ爲スモ其効アリトス

第五十五條 告訴、告發ハ其取下ヲ爲シ又ハ其

申立ヲ變更スルコトヲ得此場合ト雖モ第十三條ノ規定ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受クルコトアル可シ

第二節 現行犯罪

第五十六條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第五十七條 重罪、輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

第一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラ

ルルトキ
第二 兇器、贓物其他ノ物件ヲ携帶シ又ハ身體、被服ニ顯著ナル犯罪ノ痕跡アリテ犯人ト思料ス可キトキ

第三 家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタルトキ

第五十八條 司法警察官及ヒ巡查、憲兵卒其職

務ニ行フニ當リ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ令狀ヲ待タズシテ被告人ヲ逮捕ス可シ

罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪又ハ違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ輕罪ニ付テハ檢事、違警罪ニ付テハ即決ヲ爲ス可キ官署ニ告發ス可シ其氏名、住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ檢事若シハ官署ニ引致スルコトヲ得

第五十九條 巡查、憲兵卒被告人ヲ逮捕シタルトキハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ其被告人ヲ受取りタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第六十條 何人ニ限ラス重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得

第六十一條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引

致スルコトヲ得サルトキハ自己ノ氏名、職業住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡查憲兵卒ニ引渡スコトヲ得

被告人ヲ巡查、憲兵卒ニ引渡シタルトキハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ

被告人又ハ巡查憲兵卒ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルコトヲ求ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムコトヲ得ス

第二章 起訴

第六十二條 地方裁判所檢察犯罪ノ搜查ヲ終リタルトキハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

第一 重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ム可シ

第二 輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ其裁判所ニ訴ヲ爲ス可シ

第三 裁判所構成法第十六條第二號第三號ニ

キ場所逮捕ス可キ人名及ヒ証人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

第三章 豫審

第六十七條 現行ノ重罪、輕罪ヲ除ク外豫審判事ハ檢察ノ請求アルニ非サレハ豫審ニ取掛ルコトヲ得ス此規定ニ背キタルトキハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效ナカル可シ

第六十八條 檢察ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟記録ヲ檢閱スルコトヲ得但二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ又必用ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スコトヲ得

第一節 令狀

第六十九條 豫審判事ハ檢事ノ記訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタルトキハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出頭トノ間少クモ二十四時ノ猶豫アル可シ

記載シタル輕罪又ハ違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ區裁判所檢察ニ送致ス可シ

第六十三條 區裁判所檢察犯罪ノ搜查ヲ終リタル上裁判所構成法第十六條第一號第二號ニ記載シタル事件ト思料シタルトキハ其裁判所ニ訴ヲ爲ス可シ

第六十四條 檢察ハ被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬セサル者ト思料シタルトキハ之ヲ管轄裁判所ノ檢察ニ送致ス可シ

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサルモノト思料シタルトキハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第六十五條 前數條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ルトキハ檢察ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス可シ

第六十六條 檢察豫審ヲ求ムルトキハ證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢ス可シ

召喚狀ニ因リ出頭シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遲クモ出頭ノ日ヲ過クルコトヲ得ス

第七十條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住セサルトキハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事又ハ區裁判所判事ニ其處分ヲ囑託スルヲ得

第七十一條 豫審判事又ハ受託判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出頭セサルトキハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

七十二條 豫審判事又ハ受託判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

第一 被告人定リタル住所アラサルトキ
第二 被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スル恐アルトキ

第三 被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスル恐アルトキ
第七十三條 勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其

令狀ヲ發シタル判事ニ被告人ヲ引致ス可シ
勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内
ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スルトキ
ハ勾留狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス
可シ

第七十四條 豫審判事又ハ受託判事ハ召喚狀又
ハ勾引狀ヲ受タル被告人疾病其他正當ノ事由
アリテ令狀ニ應スル能ハサルヲ疎明シタル
キハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルヲ得
第七十五條 勾留狀ハ被告人ヲ訊問シタル後禁
錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スルニ非レハ
之ヲ發スルヲ得ス但被告人逃亡シタル場合
ニ於テハ其訊問ヲ爲サズノ之ヲ發スルヲ得
第七十六條 總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人
ノ氏名、職業、住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除
ク外其氏名分明ナラサルトキハ容貌、體格等
ヲ明示ス可シ
又令狀ニハ之ヲ發スル年月日時ヲ記載シ判事

及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ
召喚狀ハ執達吏ヲシテ被告人ニ送達セシメ勾
引狀、勾留狀ハ巡查、憲兵卒ヲシテ之ヲ執行
セシム

第七十七條 勾引狀、勾留狀ハ時宜ニ因リ正本
數通ヲ作り巡查、憲兵卒數人ニ分付スルコト
アル可シ
前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示
シ其謄本ヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ其正本
、謄本ニ執行ノ場所、日時ヲ記載シ被告人ヲシ
テ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハ
サルトキハ其旨ヲ附記ス可シ
第七十八條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查、憲
兵卒ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛匿
シタルト思料シタルトキハ其他ノ市町村長又
其差支アルトキハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ
之ヲ搜索ス可シ
前項ノ場合ニ於テハ被告人ヲ發見シタルト否

トニ拘ハラズ搜索調書ヲ作り立會人ト共ニ署
名捺印ス可シ

家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スコトヲ得ス
但旅店、割烹店、其他夜間ト雖モ衆人ノ出入ス
ル場所ニ付テハ其公開時間内ニ限り何時ニテ
モ搜索ヲ爲スコトヲ得

第七十九條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ
潛匿シタルコトヲ知り又ハ潛匿シタルト思料
シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スルトキ
ハ巡查、憲兵卒ニ令狀ヲ帶行セシムルコトヲ
得

巡查、憲兵卒ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事、
檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示シテ即時ニ執
行ヲ求ム可シ

第八十條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知ス
ルコト能ハサルトキハ各檢事長ニ被告人ノ人
相書ヲ送致シ搜索及ヒ逮捕ヲ爲スコトヲ
請求スルヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲ
シテ搜索及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ此場
合ニ於テ檢事ノ發シタル逮捕狀ハ勾留狀ト同
一ノ效ヲ有ス

第八十一條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル下士
以下ノ軍人、軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタルトキ
ハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ令狀ヲ示ス可シ其
長官又ハ隊長ハ已ムコトヲ得サル差支アルニ
非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシム可シ
第八十二條 勾留狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其
令狀ニ記載シタル監獄署ニ引致ス可シ若シ其
監獄署ニ引致スルコト能ハサルトキハ假ニ最
近ノ監獄署ニ引致スルコトヲ得

何レノ場合ニ於テモ監獄署長ハ令狀ヲ檢閱シ
テ被告人ヲ受取り其證書ヲ渡ス可シ
第八十三條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查、憲
兵卒ハ之ヲ執行シタルコト又執行スルコト能
ハサルトキハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可

シ
巡查、憲兵卒ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ檢事ニ差出ス可シ

第八十四條 勾留狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監獄署ニ在ルトキハ執達吏ヲシテ之ヲ本人ニ送達セシム可シ

第八十五條 密室監禁ノ場合ヲ除ク外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬、故舊又ハ辯護士ニ接見スルコトヲ得

書翰、書籍其他ノ書類ハ豫審判事又ハ檢事ノ檢閱ヲ經タル後ニ非サレハ被告人ト外人ト之ヲ授受スルコトヲ許サス但豫審判事又ハ檢事ハ其書類ヲ留置クコトヲ得

第八十六條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キモノニ非スト思料シタルトキハ豫審中何時ニテモ勾留狀ヲ取消ス可シ

第二節 密室監禁
第八十七條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ

求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據徴憑ヲ集取ス可シ

第九十二條 豫審判事臨檢、搜索、物件差押又ハ被告人、證人ノ訊問ヲ爲スニハ裁判所書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルコト能ハサルトキハ立會人二名アルヲ要ス但監獄署ニ就テ被告人ヲ訊問スルトキハ其監獄署ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ
前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ
書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其效ヲカル可シ

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質
第九十三條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要スルトキハ此限ニ在ラズ

必要ナリト思料シタルトキハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スル言渡ヲ爲スコトヲ得

第八十八條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類其他ノ物品ヲ授受スルコトヲ許サス

第八十九條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラズ但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルコトヲ得
言渡ヲ更改スルトキハ其事ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問ス可シ

第三節 證據

第九十條 被告人ノ自白、官吏ノ檢證調書、證據物件、證人及ヒ鑑定人ノ供述其他諸般ノ徴憑ハ判事ノ判斷ニ任ズ

第九十一條 豫審判事ハ檢事若クハ被告人ノ請

第九十四條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ自白セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用ユ可カラズ

第九十五條 裁判所書記ハ訊問及ヒ供述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ

豫審判事ハ被告人ニ其供述ノ相違ナキヤ否ヤヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第九十六條 被告人其供述ニ付キ變更増減スルキコトヲ申立タルトキハ更ニ訊問ヲ爲シ其可問及ヒ供述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

第九十七條 被告人ハ供述書ノ謄本ヲ求ムルコトヲ得

第九十八條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルコトハ違ナキコト其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模樣ヲ證スル爲メ必要ナリトスルトキハ被告人ノ他ノ被告人、證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルコトヲ得

第九十九條 書記ハ對質人ノ供述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ

第九十五條第九十六條ノ規定ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第一百條 被告人又ハ對質人聾ナルトキハ書面ヲ以テ問ヒ哑ナルキハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聾者、哑者文字ヲ知ラサルトキハ通事ヲ命ス可シ

被告人又ハ對質人國語ニ通セサルトキ亦同シ
第一百一條 通事ハ正實ニ通譯ス可キ宣誓ヲ爲ス可シ

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第三百三十六條第三百三十七條第四百一一條ノ規定ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第五節 檢證、搜索及ヒ物件差押

第一百二條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリ

第一百六條 豫審判事ハ臨檢、搜索ニ因リ發見シタル物件其事實ヲ證明スルニ足ル可シト思料シタルトキハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ裁判所書記之ヲ擔任ス可シ

第一百七條 豫審判事ハ臨檢、搜索、物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサルトキハ塲所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クコトヲ得

第一百八條 被告人ハ臨檢、搜索、物件差押ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルコトヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタルトキハ自ラ立會フコトヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスルトキハ此限ニ在ラス

第九十九條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ供述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

トスルトキハ犯所又ハ其他ノ塲所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ

第一百三條 豫審判事ハ犯罪ノ性質、方法、日時、塲所及ヒ被告人ノ人違ナキコトヲ證明ス可キ模樣ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ模樣ヲモ記載ス可シ

第一百四條 豫審判事ハ被告人ノ住居又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スル疑アル者ノ住居ニ臨檢シ搜索ヲ爲スコトヲ得

被告人ハ又ハ物件ヲ藏匿スル者其住居ニ在ラサルトキハ同居ノ親屬若シ其在ラサルトキハ市町村長ノ立會アルヲ要ス

第七十八條第三項ノ規定ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第一百五條 豫審判事ハ被告人又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スル疑アル者ノ身體及ヒ之ニ屬スル物件ニ就キ搜索ヲ爲スコトヲ得

第一百十條 豫審判事ハ臨檢、搜索ノ塲所ニ於テ証人ノ供述ヲ聽クコトヲ必要ナリトスルトキハ第一百十五條以下ノ規定ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ

第一百十一條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其塲所ニ出入スルコトヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アルトキハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルコトヲ得

第一百十二條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢、搜索、物件差押ノ事ヲ區裁判所判事ニ囑託スルコトヲ得

第一百十三條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ驛遞、電信、鐵道ノ官署、諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審事件ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ此等ノ者ニ對シ發シタル書類、電報又ハ物件ヲ受取開披スルコトヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ

十九

第二百十四條 證言ヲ拒ムコトヲ得ル者ノ所持スル物件ニシテ其黙秘ス可キ義務アル事情ニ關スルモノハ其承諾アルニ非サレハ之ヲ差押ヘ及ヒ開披スルコトヲ得ス

第六節 證人訊問

第二百十五條 證人ノ呼出狀ニハ其氏名、住所及テ職業ヲ記載ス可シ

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサルトキハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルコトアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第二百十六條 證人疾病其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ疏明シタルトキハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第二百十七條 證人ト爲ル可キ者豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ナルトキハ其所屬ノ長官又ハ隊長ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長

官又ハ隊長ハ即時ニ出頭セシム可キコトヲ認可シ又ハ職務上已ムコトヲ得サル差支アルトキハ其事由ヲ付シテ出頭ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第二百十八條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除ク外證人呼出ニ應セサルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

若シ證人再度ノ呼出ニ應セサルトキハ費用賠償ノ外二倍ノ罰金ヲ言渡ス可シ又勾引狀ヲ發スルコトヲ得

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬

ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス可シ其勾引狀ニ付テモ亦同シ

第二百十九條 豫審判事ハ證人罰金言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其出頭セサリシコトヲ正當ノ理由ヲ以テ辯解シタルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ

第二百二十條 證人呼出狀ニ因リ出頭シタルトキハ其呼出狀ヲ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタルトキハ其人違ナキコトヲ疏明ス可シ

第二百二十一條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名、年齢、職業、住所及ヒ第二百二十三條ニ記載シタル者ナリヤ否ヤヲ問フ可シ

第二百二十二條 豫審判事ハ證人ヲシテ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ黙秘セス又何事ヲモ附加セサル旨ヲ宣誓セシム可シ

裁判所書記ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル

トキハ其旨ヲ附記ス可シ

第二百二十三條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルコトヲ許サス但宣誓ヲ爲サシメスシテ事實參考ノ爲メ其供述ヲ聽クコトヲ得

第一 民事原告人

第二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ此等ノ者ノ後見ヲ受クル者

第四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人又ハ同居人

第二百二十四條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

第一 十六歳未滿ノ幼者

第二 知覺精神ノ不十分ナル者

第三 瘡啞者

第四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

第五 重罪事件又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ
輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者
第六 現ニ供述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ
訴テ受ケ其證憑十分ナラサルニ因リ免訴
ノ言渡ヲ受ケタル者

第二百二十五條 左ニ記載シタル場合ニ於テハ證
言ヲ拒ムコトヲ得

第一 官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者其
職務上黙秘ス可キ義務アル事情ニ關スル
トキ

第二 醫師、藥商、穩婆、辯護士、辯護人、公
證人、神職、僧侶其身分職業ノ爲メ委託ヲ
受ケタルニ因テ知リタル事實ニシテ黙秘
ス可キモノニ關スルトキ

證言ヲ拒ム者ハ拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ
且之ヲ説明ス可シ

第二百二十六條 證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ
供述ヲ肯セサルトキハ豫審判事檢事ノ意見ヲ

在ニ就キ訊問ヲ爲ス可シ
各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊
問ス若シ其所在地外ニ滞在スルトキハ其現在
地ニ於テ之ヲ訊問ス可シ

帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所
在地ニ滞在中ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問ス可
シ

第三百一十一條 豫審判事ハ證人ニ其供述ノ相違
ナキヤ否ヤヲ知ラシムル爲メ裁判所書記ヲシ
テ調書ヲ讀聞カセシム可シ

證人ハ其供述ヲ變更増減センコトヲ請求スル
ヲ得書記ハ其請求アリタルコト及ヒ變更増減
ノ條件ヲ調書ニ記載ス可シ

調書ニハ豫審判事、書記及ヒ證人共ニ署名捺
印ス可シ若シ證人署名捺印スルコト能ハサル
トキハ其旨ヲ附記ス可シ

第三百二十二條 豫審判事ハ證人裁判所所在地
ニ住セサルトキハ其住居ノ地ノ區裁判所判事

聽キ刑法第八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ
但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗
告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス
豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ニ對ス
ル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑託シ
テ之ヲ爲ス可シ

第二百二十七條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各
別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナ
リトスルトキハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト
對質セシムルコトヲ得

第二百二十八條 豫審判事ハ證人ノ供述ヲ確實ナ
ラシムル爲メ必要ナリトスルトキハ犯所又ハ
其他ノ場所ニ同行スルコトヲ得

若シ證人同行スルコトヲ肯セサルトキハ第百
十八條ノ規定ニ從フ

第二百二十九條 第百條第百一條ノ規定ハ證人ニ
付テモ亦之ヲ適用ス

第三百三十條 皇族證人ナルトキハ豫審判事其所

ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得
若シ證人管轄地外ニ在ルトキハ其所在地ノ地ノ
豫審判事又ハ區裁判所判事ニ訊問ノ事ヲ囑託
スルコトヲ得

第三百三十三條 第百十八條第百十九條及ヒ第百
二十六條ニ掲ケタル證人ニ對スル豫審判事ノ
權ハ受託判事ニモ屬ス

第三百三十四條 證人ハ出頭ニ付テノ旅費日當ヲ
要ムルコトヲ得

第七節 鑑定

第三百三十五條 豫審判事ハ犯罪ノ性質、方法及
ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定ヲ必要ナリ
トスルトキハ學術、職業ニ因リ鑑定スルコト
ヲ得ヘキ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシ
ム可シ

鑑定ノ爲メ必要ナリトスルトキハ死體ノ解剖
ヲ命シ又既ニ埋葬シタル死體ヲ解剖シ若クハ
檢視スル爲メ墳墓ノ發掘ヲ命スルコトヲ得

第三百三十六條 鑑定ニ付テハ、第一百十五條、第一百八條乃至第二百一十一條、第二百二十三條乃至第二百二十五條及ヒ第二百二十八條ノ規定ヲ準用ス但鑑定人ニ對シテハ、勾引狀ヲ發スルコトヲ得ス

第三百二十七條 鑑定人ハ公平且正實ニ鑑定ス可キ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ハ、第二百二十二條ノ式ニ從フ

第三百二十八條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサルトキハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其決定ニ對シテハ、抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

第三百二十九條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルコトヲ得

第三百四十條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續、結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ若シ結果ヲ得サルトキハ其推測スル所ヲ記載

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キモノニ非サル意見アリト雖モ通常ノ規定ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第三百四十四條 地方裁判所檢事及ヒ區裁判所檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ豫審判事ヲ待ツコトナシ其旨ヲ通知シ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得但罰金及ヒ費用賠償ノ言渡ヲ爲スコトヲ得シ證人及ヒ鑑定人ノ供述ハ宣誓ヲ用ユルコトナク之ヲ聽ク可シ

第三百四十五條 前條ノ場合ニ於テ地方裁判所檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致シ區裁判所檢事ハ之ヲ地方裁判所檢事ニ送致ス可シ

第三百四十六條 區裁判所檢事其裁判所ノ管轄ニ

大可シ
鑑定人意見ヲ異ニスルトキハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第三百四十一條 鑑定人ハ旅費、日當及ヒ立替金ノ辨濟ヲ要ムルヲ得

第八節 現行犯ノ豫審

第三百四十二條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ檢事ノ請求ヲ待タズ直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ノ規定ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第三百四十三條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ヲシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタルモノトス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルコトヲ記載ス可シ

屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ、第四百四十四條ニ規定シタル處分ヲ爲スコトヲ得若シ被告人ニ對シ勾留狀ヲ發シタルトキハ三日内ニ起訴ノ手續ヲ爲ス可シ

第四百四十七條 第四百四十四條、第四百四十六條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フコトヲ得但勾留狀ヲ發スルコトヲ得ス

司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致シ且被告人ヲ逮捕シタルトキハ共ニ之ヲ送致ス可シ

第四百四十八條 地方裁判所檢事ハ區裁判所檢事又ハ司法警察官ヨリ事件ノ送致ヲ受ケタルトキハ一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ同時ニ被告人ヲ受取リタルトキハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ勾留狀ヲ發シ又ハ發セズシ

テ前項ノ手續ヲ爲ス可シ

第四百十九條 地方裁判所檢察ハ何レノ場合ニ於テモ輕罪ノ現行犯ニ係リ豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタルトキハ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラス直チニ其裁判所ニ訴ヲ爲スコトヲ得

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサルモノト思料シタルトキハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第九節 保釋

第五十條 豫審判事ハ豫審中勾留狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出頭ス可キ證書ヲ差出シ且保證ヲ立テシメ保釋ヲ許スコトヲ得
被告人無能力ナルトキハ法律上代理人ヨリ保釋ヲ求ムルコトヲ得

第五十一條 保證ノ金額ハ豫審判事之ヲ定メ保釋ヲ許ス言渡書ニ記載ス可シ

第五十七條 豫審判事保證金ヲ沒收シタル後免訴ノ言渡、違警罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪

ニ付キ公判ニ付スル言渡ヲ爲シタルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ沒收シタル金額ヲ還付ス可シ

第五十八條 豫審判事免訴ノ言渡、違警罪又

ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ公判ニ付スル言渡ヲ爲シ若シハ保釋ノ言渡ヲ取消シタルトキハ保證金ヲ還付ス可シ

第五十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルコトヲ得

責付ヲ爲スニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ被告人ヲ出頭セシムヘキ證書ヲ差出サシムヘシ

第六十條 責付中被告人ヲ呼出ストキハ出頭ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲スヘシ
被告人正當ノ事由ナシテ出頭セサルトキハ

第五十二條 保證ヲ爲ズニハ被告人又ハ法律上代理人ヨリ金錢若シハ有價證券ヲ差出ス可シ
又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且十分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スコトヲ得

第五十三條 保釋人被告人ヲ呼出ストキハ出頭ヨリ二十四時前ニ其報告ヲ爲ス可シ

第五十四條 保釋中被告人呼出テ受ケ正當ノ事由ナシテ出頭セサルトキハ保證金ノ全部又ハ一分ヲ沒收ス可シ

第五十五條 保證金ヲ沒收スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

第五十六條 豫審判事保證金ヲ沒收シタルトキハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スコトヲ必要ナリトスルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

檢事ノ意見ヲ聽キ責付ノ言渡ヲ取消スヘシ

第十節 豫審終結

第六十一條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタルトキハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ訴訟記録ヲ送致ス可シ

檢事ハ訴訟記録ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ還付ス可シ

第六十二條 檢事ハ豫審十分ナラスト思料シタルトキハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルコトヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサルトキハ檢事ハ訴訟記録ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

第六十三條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後數條ニ記載シタル決定ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第六十四條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルコトヲ認メタルトキハ其旨ヲ言渡ス可シ

若シ勾留ヲ要スルモノト認めタルトキハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事
件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第六十五條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴

ノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタルトキハ
放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第一 犯罪ノ證據十分ナラサルトキ

第二 被告事件罪ト爲ラサルトキ

第三 公訴ノ時効ニ罹リタルトキ

第四 確定判決ヲ經タルトキ

第五 大赦アリタルトキ

第六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スルトキ

第六十六條 被告事件違警罪ナリト思料シタ

ルトキハ區裁判所ニ移ス言渡ヲ爲シ且被告人

勾留ヲ受ケタルトキハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第六十七條 被告事件裁判所構成法第十六條

第二號ニ記載シタル輕罪ナリト思料シタルト

キハ區裁判所ニ移ス言渡ヲ爲シ其他ノ輕罪ナ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサル

コト公訴受理ス可カラサルコト及ヒ其理由又

犯罪ノ證據十分ナラサルトキハ其旨ヲ明示ス

可シ

區裁判所ニ移ス言渡又ハ公判ニ付スル言渡ヲ

爲スニハ犯罪ノ性質、模樣、證據ノ十分ナルコ

ト及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可

シ

第七十條 前條ノ決定ニハ第七十六條ノ規定

ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

第七十一條 豫審終結ノ決定ノ正本ハ速ニ檢

事及ヒ被告人ニ送達ス可シ

第七十二條 檢事ハ重罪公判ニ付スル決定又

ハ免訴若シハ管轄違ノ決定ニ對シ抗告ヲ爲ス

コトヲ得

被告人ハ重罪公判ニ付スル決定ニ對シ抗告ヲ

爲スコトヲ得

爲スコトヲ得

リト思料シタルトキハ其裁判所ノ輕罪公判ニ
付スル言渡ヲ爲ス可シ

被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ

該ルモノト思料シタルトキハ釋放ノ言渡ヲ爲

ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ル可キモノト思料シタルトキハ

保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スコトヲ得

若シ被告人未タ勾留ヲ受ケサルトキハ令狀ヲ

發スルコトヲ得

第六十八條 被告事件重罪ナリト思料シタル

トキハ其裁判所ノ重罪公判ニ付スル言渡ヲ爲

ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタルト

キハ其言渡ヲ取消シ被告人未タ勾留ヲ受ケサ

ルトキハ令狀ヲ發ス可シ

第六十九條 豫審終結ノ決定ニハ事實及ヒ法

律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ

管轄違ノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ

被告人ヲ勾留ス可キトキハ其理由ヲ明示ス可

第七十三條 重罪公判ニ付スル場合ニ於テ被

告人ニ送達ス可キ決定ニハ其決定ニ對シ抗告

ヲ爲スコトヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ記載ス可シ

其記載ナキトキハ更ニ通常ノ規定ニ從ヒ決定

ノ送達アルマテ抗告期間ノ經過ヲ停止ス

第七十四條 豫審終結ノ決定ハ抗告ノ期間内

又抗告アリタルトキハ其決定アルマテ執行ヲ

停止ス但保釋責付ノ言渡ヲ取消ス決定ハ其執

行ヲ停止セス

第七十五條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ

受ケ其決定確定シタルトキハ罪名ノ變更アル

モ同一ノ事件ニ付キ再ヒ訴ヲ受ルコトナカル

可シ但新ニ證據アルトキハ此限ニ在ラス

新ナル證據アルトキハ檢事ヨリ之ヲ其裁判所

ニ差出シ裁判所ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ

否ヤチ決定ス可シ

第四編 公判

第一章 通則

第七十六條 公判ハ判事、檢事、裁判所書記出
廷シテ之ヲ爲スモノトス

第七十七條 被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束
ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置クコトアル可シ

第七十八條 裁判所ニ於テハ何時ニテモ禁錮
以上ノ刑ニ該ル可キ被告人ニ對シ勾引狀又ハ
勾留狀ヲ發スルコトヲ得

第七十九條 被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用
ユルコトヲ得

辯護人ハ裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任
ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得ルトキハ辯護士ニ
非サル者ト雖モ辯護人ト爲スコトヲ得

第八十條 辯護人ハ裁判所ニ於テ訴訟記録ヲ
閱讀シ且之ヲ抄寫スルコトヲ得

第八十一條 被告人ノ法律上代理人ハ其補佐
人ト爲リ辯論ニ與カルコトヲ得

第八十二條 被告人出頭シテ辯論スルコトヲ
肯セサルトキハ對席トシテ裁判ヲ爲スコトヲ

第八十四條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事
件ニ付キ裁判ヲ爲スコカラズ但辯論ニ因リ發
見シタル附帶ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス

若シ附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル
トキハ本案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得

第八十五條 左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ヲ
リトス

第一 同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數
人ニテ數罪ヲ犯シタルトキ

第二 數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ
數罪ヲ犯シタルトキ

第三 自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲
メ又ハ其罪ヲ免カルル爲メ他ノ罪ヲ犯シ
タルトキ

第八十六條 檢事及ヒ被告人ハ第一審第二審
ヲ問ハス本案ノ判決アルマテ何時ニテモ管轄
違又ハ公訴受理ス可カラサル申立ヲナスコト
ヲ得

被告人審問ヲ妨ケ又ハ不當ノ行狀ヲ爲シ裁判
長ヨリ退廷又ハ勾留ヲ命セラレタルトキ亦同
シ若シ辯論二日ニ渡ルトキハ更ニ被告人ヲ出
頭セシム可シ

第八十三條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ
出頭スルコト能ハサルトキハ痊癒ニ至ルマテ
辯論ヲ停止ス但罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件
ニ付キ被告人代人ヲ差出シタルトキハ此限ニ
在ラス

辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタルト
キハ其痊癒ノ後新ニ辯論ヲ爲スコシ其他ノ疾
病ニ罹ルトキハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ
以後ノ手續ヲ爲スコシ但五日間辯論ヲ停止シ
又ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求アリタルトキ
ハ新ニ辯論ヲ爲スコシ

若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論
ヲ終リタルトキハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲ス
コトナシ裁判ヲ爲スコトヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受
理スヘカラサル言渡ヲ爲スコトヲ得

第八十七條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ却下
シタルトキハ本案ノ判決ヲ待タズ直チニ控訴
又ハ上告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ本案
ノ辯論ヲ停止ス

第八十八條 調書ヲ作りタル司法警察官ハ檢
事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ
職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出スコトヲ得

第八十九條 豫審ニ於テ訊問シタル證人又ハ
鑑定ヲ爲シタル鑑定付ハ更ニ之ヲ呼出スコト
ヲ得

豫審ニ於ケル證人ノ供述書又ハ鑑定人ノ鑑定
書ハ更ニ其證人、鑑定人ヲ呼出ササルトキ證
人、鑑定人呼出ヲ受ケ出頭セサルトキ又ハ豫
審及ヒ公判ニ於ケル供述、鑑定ヲ比較ス可キ
トキハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ
裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルコトヲ

得

第九十條 第一百五條以下ノ規定ハ公判ノ證人ニ第三百三十五條以下ノ規定ハ公判ノ鑑定人ニモ亦之ヲ準用ス

第九十一條 證人疾病其他正當ノ事故ニ因リ出頭スル能ハサルコトヲ疎明シタルトキハ裁判所ハ其部員一名ニ命シ又ハ區裁判所判事ニ囑託シ其所在ニ就テ之ヲ訊問セシムルコトヲ得

第九十二條 檢事、被告人及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出ス證人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之ヲ各相手方ニ送達ス可シ

第九十三條 證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラヌ又供述前辯論ニ立會フ可カラヌ既ニ供述ヲ爲シタル後ハ公廷ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退去ノ允許ヲ得タルトキハ此限ニ在ラス

第九十四條 證人及ヒ被告人ノ訊問ハ裁判長之ヲ爲スモノトス

第九十七條 裁判所ニ於テハ證人被告人ノ面前ニ於テ十分ナル供述ヲ爲スコトヲ得サル可シト思料シタルトキハ其證人ノ供述中被告人ヲ退廷セシムルコトヲ得但裁判所長ハ證人供述ヲ終リタル後被告人ヲ入廷セシメ其供述シタル事項ヲ告知ス可シ

本條ノ規定ハ共同被告人ニモ亦之ヲ適用ス
第九十八條 裁判長ハ各證憑ノ取調終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヤヲ問ヒ且其利益ト爲ル可キ證憑ヲ差出スヲ得ヘキコトヲ告知ス可シ

又證憑物件ハ被告人ニ示シテ辯解ヲ爲サシム可シ
第九十九條 辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタルトキハ裁判所ニ於テ檢事ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ裁判ス可シ

第二百條 裁判所ニ於テハ公訴ノ判決ト同時ニ私訴ノ判決ヲ爲ス可シ

陪席判事及ヒ檢事ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルコトヲ得

訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル事項ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問ス可キコトヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第九十五條 證人又ハ鑑定人ノ供述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタルトキハ裁判所ニ於テ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ發シ裁判所長ニ送致ス可シ

其證人又ハ鑑定人ノ供述ハ裁判所書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ
本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得

第九十六條 被告人聾者、啞者又ハ國語ニ通セサル者ナルトキハ第九十條第九十一條ノ規定ニ從フ

私訴ニ付キ取調未タ十分ナラサルトキハ公訴ノ判決アリタル後其判決ヲ爲スコトヲ得

第二百一條 被告人有罪ト爲リタルトキハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴ニ關スル訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ負擔ス可キ言渡ヲ爲ス可シ
免許又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴ニ關スル訴訟費用ハ國庫之ヲ負擔ス

私訴ニ關スル訴訟費用ノ負擔ハ民事訴訟法ノ規定ニ從フ
第二百二條 被告人有罪ト爲リタルト否トヲ問ハス沒收ニ係ラサル差押物ハ所有者ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スル言渡ヲ爲ス可シ

第二百三條 刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且犯罪ノ證憑ヲ明示ス可シ
無罪又ハ免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦其理由ヲ明示ス可シ

第二百四條 判決ノ言渡ハ辯論ヲ終リタル後即

自又ハ次ノ開廷日ニ之ヲ爲ス可シ
判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀ニ因リ之ヲ爲ス
其判決ノ理由ハ判決ノ言渡ト同時ニ之ヲ朗讀
シ又ハ口頭ニテ其要領ヲ告ク可シ

第二百五條 判決ノ原本ニハ其裁判ヲ爲シタル
裁判所、年月日、其事件ニ干與シタル檢事ノ官
氏名ヲ記載シ判事、裁判所書記共ニ署名捺印
ス可シ

第二百六條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ判決ノ
正本、謄本又ハ抄本ヲ求ムルコトヲ得但上訴
ノ爲メ其求ヲ爲シタルトキハ書記ヨリ二十四
時内ニ之ヲ下付ス可シ

第二百七條 對席判決ニ因リ刑ノ言渡アリタル
トキハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條
ノ請求及ヒ其判決ニ對シ上告ヲ爲スヲ得ヘキ
コト及ヒ其期間ヲ告知シ又闕席判決ニ因リ刑
ノ言渡アリタルトキハ其判決ニ對シ故障ヲ爲
スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ記載ス可シ

長、陪席判事、檢事及ヒ裁判所書記ノ官氏名ヲ
記載ス可シ
辯論數日ニ涉ルトキハ其旨及ヒ同一ノ判事出
席シタルコトヲ記載ス可シ
辯論中補充判事ヲシテ代ラシメタルトキハ其
旨ヲ記載ス可シ

第二百十條 公判始末書ハ判決言渡ヨリ三日内
ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印
ス可シ
裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ
檢閲シ若シ意見アルトキハ其紙尾ニ記載ス可
シ

第二百十一條 判決及ヒ公判始末書ノ原本ハ訴
訟記録ニ添付シ其裁判所ニ保存ス可シ若シ上
訴アリタルトキハ之ヲ上訴裁判所ニ送付ス可
シ

第二章 區裁判所公判
第二百十二條 區裁判所ハ左ノ場合ニ於テ其管

若シ其告知又ハ記載ナキトキハ更ニ其通知
ルマテ上訴及ヒ故障期間ノ經過ヲ停止ス

第二百八條 裁判所書記ハ公判始末書ヲ作り左
ノ事項其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

第一 公ニ辯論ヲ爲シタルコト又ハ公開ヲ
禁シタルコト及ヒ其事由
第二 被告人ノ訊問及ヒ其供述
第三 證人、鑑定人ノ供述及ヒ宣誓ヲ爲シ
タルコト若シ宣誓ヲ爲ササルトキハ其事
由

第四 證據物件
第五 辯論中異議ノ申立アリタルコト、其
申立ニ付キ檢事其他訴訟關係人ノ意見及
ヒ裁判所ノ裁判

第六 辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ
供述セシメタルコト
第二百九條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル
事項ノ外裁判ヲ爲シタル裁判所、年月日、裁判

轄ニ屬スル違警罪及ヒ輕罪ノ公訴ヲ受理ス

第一 檢事ノ起訴アリタルトキ
第二 豫審判事又ハ上級裁判所ヨリ事件ヲ
移ス裁判アリタルトキ

第二百十三條 檢事ハ何レノ場合ニ於テモ被告
人ニ對シ呼出狀ヲ發ス可キコトヲ裁判所ニ請
求ス可シ

裁判所ハ裁判所書記ヲシテ被告人ニ對シ呼出
狀ヲ發セシム可シ

第二百十四條 呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ
氏名、職業、住所、出頭ノ日時場所及ヒ被告事
件ヲ記載シ且被告事件違警罪又ハ罰金ニ該ル
可キ輕罪ナルトキハ代人ヲシテ出頭セシムル
コトヲ得ヘキ旨ヲ記載ス可シ
若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未
タ其事件ニ付キ取調ヲ受ケサリシトキハ辯護
準備ノ爲メ二日ヲ猶豫ヲ求ムルコトヲ得

第二百十五條 呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少ク

トモ二日ノ猶豫アル可シ

第二百十六條 判事ハ豫審ヲ經サル被告事件急
速ヲ要スルトキハ公判ニ取掛ル前檢證處分ヲ
爲スコトヲ得此場合ニ於テハ檢事其他訴訟關
係人ノ立會ヲ要セス

第二百十七條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出頭トノ
間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス
可シ

又呼出ヲ受ケヌシテ出頭シタル者ト雖モ異議
ノ申立ナキトキハ裁判所ニ於テ證人トシテ其
供述ヲ聽クコトヲ得

第二百十八條 判事ハ先ツ被告人ノ氏名、年齢、
身分、職業、住所、出生ノ地ヲ問フ可シ

檢事ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第二百十九條 判事ハ被告事件ニ付キ被告人ヲ
訊問ス可シ

必要ナル調書其他證人書類ハ書記ヲシテ朗讀
セシメ又證人ノ供述ヲ聞キ其他證人ノ取調ヲ

言渡ヲ爲ス可シ

本條ノ場合ニ於テ勾留ヲ要スルモノト認メタ
ルトキハ前勾留狀ヲ存シ又ハ新ニ勾留狀ヲ發
シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第二百二十三條 被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬
シ且犯罪ノ證據十分ナルトキハ判決ヲ以テ法
律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十四條 犯罪ノ證據十分ナラス又ハ被
告事件罪ト爲ラサルトキハ判決ヲ以テ無罪ノ
言渡ヲ爲シ又第六十五條第三號以下ノ場合

ニ於テハ判決ヲ以テ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ
第二百二十五條 前二條ノ場合ニ於テハ私訴ニ
付キ其請求價額ノ多寡ニ拘ハラズ判決ヲ爲ス
可シ

第二百二十六條 呼出ヲ受ケタル被告人又ハ罰
金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ其代人公判

ノ期日ニ出頭セサルトキハ檢事ノ請求スル所
ヲ聽キ闕席判決ヲ爲ス可シ

爲ス可シ

若シ被告人ノ自白アリタル場合ニ於テ檢事、
民事被告人ノ異議ナキトキハ他ノ證人ヲ取調
フルニ及ハス

第二百二十條 證人調濟ノ後檢事ハ事實及ヒ法
律適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ其辯護人ハ答辯ヲ爲スコトヲ得
檢事、被告人及ヒ辯護人ハ迭ヒニ辯論ヲ爲ス
コトヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人
ヲシテ供述セシム可シ

第二百二十一條 公訴ニ付キ辯論終リタル後民
事原告人ハ被害ノ事實ヲ證明シ且私訴ニ付キ
其請求スル所ヲ陳述ス可シ

被告人、辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲ス
コトヲ得

第二百二十二條 被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬
セサルトキハ判決ヲ以テ管轄違ノ言渡ヲ爲ス
可シ若シ被告人勾留ヲ受ケタルトキハ放免ノ

私訴關係人出頭セサルトキハ民事訴訟法ノ規
定ニ從ヒ闕席判決ヲ爲ス可シ

第二百二十七條 禁錮ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付
キ被告人出頭セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又
ハ公判ノ呼出狀ヲ本人ニ送達シタル證アルニ

非サレハ闕席判決ヲ爲ス可カラズ
豫審終結ノ言渡書又ハ公判ノ呼出狀ヲ本人ニ
送達スルコト能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニ

テ猶豫ノ期間ヲ定メ其期間ニ被告人出頭セサ
ルトキハ闕席判決ヲ爲ス可キ告知書ヲ其親屬
又ハ其本籍若クハ最後ノ住所ノ地ノ市町村長

ニ送達ス可シ若シ其本籍若クハ最後ノ住所地
分明ナラサルトキハ同上ノ告知書ヲ少クトモ
一月間裁判所ノ揭示板ニ貼付シテ公示ス可シ

第二百二十八條 闕席判決ハ檢事其他訴訟關係
人ノ請求ニ限リ闕席者ニ送達ス可シ
闕席判決ヲ受ケタル者ハ其判決ニ對シ故障ヲ
申立ルコトヲ得

第二百二十九條 故障申立ノ期限ハ三日トス此
期間ハ罰金以下ノ刑ヲ言渡シタル判決及ヒ私
訴ノ判決ニ付テハ闕席判決ノ送達ヲ以テ始マ
リ禁錮ノ刑ヲ言渡シタル判決ニ付テハ被告人
自ラ其送達ヲ受ケ又ハ判決執行ニ因リ刑ノ言
渡アリタルコトヲ知リタル日ヲ以テ始マル

第二百三十條 故障ヲ申立テントスル者ハ闕席
判決ヲ爲シタル裁判所ニ其申立書ヲ差出ス可
シ

第二百三十一條 裁判所ニ於テハ故障ノ申立ア
リタルコトヲ相手方ニ通知シ且其事件ヲ公判
ニ付ス可キ期日ヲ定メ訴訟關係人ヲ呼出ス可
シ

第二百三十二條 裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ故
障ヲ許ス可キヤ否ヤ又故障ノ期間ニ於テ申立
ヲ爲シタルヤ否ヤヲ調査シ此要件ノ一ヲ缺ク
トキハ判決ヲ以テ故障ヲ棄却ス可シ

第二百三十三條 故障ノ申立ヲ受理シタル場合

應被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタルヤ否
ヤヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサルトキハ裁判長ノ職權
ヲ以テ其裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任
ス可シ被告人及ヒ辯護士ニ異議ナキトキハ辯
護士一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシム
ルコトヲ得

書記ハ本條ノ訊問ニ付キ特ニ調書ヲ作ル可シ
第二百三十八條 裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ
必要ナリトスルトキハ檢事其他訴訟關係人ノ
請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ受命判事ヲシテ臨
檢ノ處分ヲ爲シ報告ヲ爲サシムルコトヲ得

第二百三十九條 裁判所ニ於テハ被告人其罪ヲ
自白シタルトキト雖モ仍ホ證據ヲ取調ヘサル
ヘカラス

第二百四十條 裁判所ニ於テハ被告事件區裁判
所ノ管轄ニ屬スルモノト認メタルトキト雖モ
第二審ノ判決ヲ爲ス可シ

ニ於テハ更ニ通常ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可
シ

前項ノ場合ニ於テ故障申立人闕席シタルトキ
ハ更ニ故障ヲ申立ルコトヲ得ス

第二百三十四條 第二百四十七條第二百四十八
條ノ規定ハ闕席判決ニ對スル故障ニモ亦之ヲ
採用ス

第三章 地方裁判所公判

第二百三十五條 地方裁判所ニ於テハ豫審判事
又ハ上級裁判所ヨリ事件ヲ移ス裁判ニ因リ其
管轄ニ屬スル輕罪及ヒ重罪ノ公訴ヲ受理ス
又輕罪ニ付テハ檢事ノ起訴ニ因リ其公訴ヲ受
理ス

第二百三十六條 前章ノ規定ハ此章ニ別段ノ定
メナキモノニ限り地方裁判所ノ輕罪、重罪ノ
公判ニ準用ス

第二百三十七條 重罪事件ニ付テハ開廷前裁判
長又ハ受命判事ハ裁判所書記ノ立會ニ依リ一

私訴ニ付キ其請求ノ價額通常民事上區裁判所
ノ管轄ニ屬スルトキ亦同シ

第二百四十一條 裁判所ニ於テ輕罪トシテ受理
シタル事件ヲ重罪ナリトスルトキ又ハ檢事ヨ
リ更ニ其事件ヲ重罪トシテ訴追スルコトヲ申
立タルトキハ豫審判事ニ送付スル決定ヲ爲ス
可シ但被告人勾留ヲ受ケサルトキハ勾留狀ヲ
發ス可シ

其被告人件豫審ヲ經タルトキハ公判ヲ止メ更
ニ重罪事件トシテ裁判ス可キ旨ノ決定ヲ爲シ
受命判事ヲシテ其事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲
サシム可シ

受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコト
ヲ得

第五編 上訴

第一章 通則

第二百四十二條 檢事其他訴訟關係人ハ法律ニ
許シタル上訴ヲ爲スコトヲ得

檢事ハ被告人ノ利益ノ爲メモ亦上訴ヲ爲ス
コトヲ得

第二百四十三條 辯護人ハ被告人ニ代リ上訴ヲ
爲スコトヲ得但被告人ノ明言シタル意思ニ反
スルコトヲ得ス

第二百四十四條 被告人ノ法律上代理人ハ獨立
シテ上訴ヲ爲スコトヲ得

第二百四十五條 勾留ヲ受ケタル被告人上訴ヲ
爲スニハ其申立書ヲ監獄署長ニ差出シ署長ハ
之ヲ其裁判所ニ送致ス可シ

第二百四十六條 檢事ヲ除ク外上訴ヲ爲シタル
者ハ其判決アルマテ何時ニテモ之ヲ取下クル
コトヲ得

第二百四十七條 訴訟關係人天災其他避ク可カ
ラサル事變ノ爲メ上訴期間ヲ經過シタル場合
ニ於テ其旨ヲ説明シタルトキハ期間ヲ經過シ
タルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルコトヲ得
但障礙ノ止ミタル日ヨリ通常ノ期間内ニ其疏

明方法ヲ申立書ニ記載シ上訴ヲ爲スコシ

第二百四十八條 前條ノ申立アリタルトキハ裁
判所書記速ニ其申立書ヲ相手方ニ送達ス可シ
相手方ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

上訴ヲ裁判ス可キ裁判所ニ於テハ檢事ノ意見
ヲ聽キ先ツ其申立ヲ許ス可キヤ否ヤヲ決定ス
可シ

第二百四十九條 上訴完結ノ後其訴訟記録ハ上
訴審ニ於テ爲シタル裁判ノ謄本ト共ニ第一審
裁判所ニ之ヲ返還ス可シ

第二章 控訴
第二百五十條 控訴ハ區裁判所又ハ地方裁判所
ノ第一審ニ於テ爲シタル本案ノ判決及ヒ第百
八十七條ニ規定シタル本案前ノ判決ニ對シ之
ヲ爲スコトヲ得

第二百五十一條 控訴ハ判決ノ一分ニ限り之ヲ
爲スコトヲ得若シ之ヲ限ラサルトキハ判決ノ
全部ニ對シ控訴ヲ爲シタルモノト看做ス可シ

第二百五十二條 控訴ノ期間ハ判決言渡アリタ
ル日ヨリ五日トス

關席判決ヲ受ケタル者ハ故障ノ期間内故障ヲ
爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スコトヲ得

第二百五十三條 本案ノ判決ニ對スル控訴ノ期
間内及ヒ控訴アリタルトキハ判決ノ執行ヲ停
止ス

第二百五十四條 控訴ヲ爲スニハ其申立書ヲ原
裁判所ニ差出スコシ

裁判所ハ控訴ノ申立アリタルコトヲ速ニ相手
方ニ通知ス可シ

第二百五十五條 原裁判所ニ於テ期間ヲ經過シ
タル控訴ノ申立ハ決定ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ
此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百五十六條 訴訟記録ハ檢事ヨリ控訴裁判
所ノ檢事ニ送致シ其檢事ハ之ヲ裁判所ニ差出
ス可シ

公訴ノ判決ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被

告人勾留ヲ受ケタルトキハ檢事ヨリ之ヲ控訴
裁判所ノ監獄ニ移スコシ

第二百五十七條 控訴裁判所ニ於テハ訴訟關係
人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル
可シ

呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二日ノ猶
豫アル可シ

第二百五十八條 控訴ノ裁判ニ付テハ地方裁判
所ノ第一審ニ關スル規定ヲ適用ス

第一審ニ於テ訊問シタル證人又ハ鑑定ヲ爲シ
タル鑑定人ハ控訴裁判所ニ於テ其再度ノ訊問
鑑定ヲ必要ナリトセサルトキハ之ヲ呼出ササ
ルコトヲ得

第二百五十九條 控訴ノ相手方ハ其判決アルマ
テ附帶控訴ヲ爲スコトヲ得

控訴裁判所ノ檢事モ亦附帶控訴ヲ爲スコトヲ
得

第二百六十條 控訴裁判所ニ於テハ控訴ノ期間

内ニ於テ申立ヲ爲シタルヤ否ヤヲ調査シ期間ノ經過後ニ係ルモノト認ムルトキハ判決ヲ以テ控訴ヲ棄却ス可シ

第二百六十一條 控訴裁判所ニ於テハ控訴ヲ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ控訴ヲ棄却ス可シ

控訴ヲ理由アリトスルトキハ原判決ヲ取消シ更ニ判決ヲ爲ス可シ

第二百六十二條 控訴裁判所ニ於テハ原裁判所ノ管轄違ナルコトヲ認メタルトキハ原判決ヲ取消ス可シ此場合ニ於テ勾留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前勾留狀ヲ存シ又ハ新ニ勾留狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

原裁判所ニ於テ不當ニ管轄違ヲ言渡シタルトキハ其判決ヲ取消シ事件ヲ其裁判所ニ差戻ス可シ

第二百六十三條 前條第一項ノ場合ニ於テ控訴ヲ受ケタル地方裁判所自ラ其事件ニ付キ第一被告人ノ利益ノ爲メ檢事ヨリ控訴ヲ爲シタルトキ亦同シ

第二百六十六條 控訴申立人出頭セサルトキハ闕席判決ヲ以テ控訴ヲ棄却シ相手方出頭セサルトキハ申立人ノ意見ヲ聽キ闕席判決ヲ爲ス可シ

第三章 上告

第二百六十七條 上告ハ地方裁判所又ハ控訴院ノ第二審ニ於テ爲シタル本案ノ判決及ヒ第八十七條ニ規定シタル本案前ノ判決ニ對シ之ヲ爲スコトヲ得

第二百六十八條 上告ハ法律ニ違背シタル裁判ナルコトヲ理由トスルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルトキハ法律ニ違背シタルモノトス

第二百六十九條 裁判ハ左ノ場合ニ於テ常ニ法律ニ違背シタルモノトス

審トシテ裁判權ヲ有スルトキハ更ニ其事件ニ付キ判決ヲ爲ス可シ但事件重罪ナルトキハ第二百四十一條ノ規定ニ從ヒ處分ス可シ

第二百六十四條 控訴院ニ於テ地方裁判所カ輕罪ナリト判決シタル事件ヲ重罪ナリトスルトキ又ハ其事件ヲ重罪ナリトシテ主タル控訴又ハ附帶控訴アリタルトキハ其公判ヲ止メ更ニ重罪事件トシテ裁判ス可キ旨ノ判決ヲ爲シ受命判事ヲシテ其事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシム可シ

受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

本條ノ場合ニ於テ被告人辯護人ヲ選任セサルトキハ第二百三十七條第二項ノ規定ニ從ヒ裁判長ノ職權ヲ以テ辯護人ヲ選任ス可シ

第二百六十五條 被告人辯護人又ハ法律上代理人ノミ控訴ヲ爲シタルトキハ原判決ヲ變更シテ被告人ノ不利益ト爲スコトヲ許サス

第一 規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリシトキ

第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタル判事裁判ニ參與シタルトキ但忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除斥ノ理由ヲ主張シタルモ其效ナカリシトキハ之ヲ以テ上告ノ理由ト爲スコトヲ得ス

第三 判事忌避セラレ其忌避ノ申請ヲ理由アリト認メタルニ拘ハラズ裁判ニ參與シタルトキ

第四 裁判所ニ於テ其管轄又ハ管轄違ヲ不當ニ認メタルトキ

第五 法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルトキ

第六 法律ニ定メタル場合ニ於テ檢事ノ意見ヲ聽カサルトキ

第七 裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決ス

ルコトヲ得ヘキ場合ヲ除ク外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタルトキ

第八 判決ヲ公行セス又ハ公開ヲ禁スル言渡ナクシテ辯論ヲ公ニセサルトキ

第九 裁判ニ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アルトキ

第十 擬律ノ錯誤アルトキ

第二百七十條 免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ設ケタル規定ニ背キタルコト又ハ土地ノ管轄違アリト雖モ

上告ノ理由ト爲スコトヲ得ス

第二百七十一條 上告申立ノ期間ハ判決言渡アリタル日ヨリ三日トス

第二百七十二條 本案ノ判決ニ對スル上告ノ期間内及ヒ上告ノ申立アリタルトキハ勾留及ヒ放免ノ言渡ヲ除ク外判決ノ執行ヲ停止ス

第二百七十三條 上告ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判所ニ差出シ且其申立ヲ爲シタル日ヨリ五日

日内ニ趣意書ヲ差出ス可シ

裁判所ハ上告申立書及ヒ趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時間内ニ之ヲ相手方ニ送達ス可シ

第二百七十四條 相手方ハ上告申立書及ヒ趣意書ヲ受取リタル日ヨリ五日內ニ答辯書ヲ原裁判所ニ差出スコトヲ得

裁判所ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時間内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第二百七十五條 檢事ヨリ差出ス可キ上告申立書及ヒ趣意書又ハ答辯書ハ二通ヲ作り一通ヲ上告裁判所ニ差出シ一通ヲ相手方ニ送達ス可シ

私訴ノ判決ニ對シ其訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告申立書及ヒ趣意書又ハ答辯書ニ付テモ亦同シ

第二百七十六條 原裁判所ニ於テハ期間ヲ經過シタル上告ハ決定ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百七十七條 訴訟記録ハ檢事ヨリ上告裁判所ノ檢事ニ送致シ其檢事ハ之ヲ裁判所ニ差出ス可シ

第二百七十八條 上告ノ相手方ハ其判決アルトテ附帶上告ヲ爲スコトヲ得

上告裁判所ノ檢事モ亦附帶上告ヲ爲スコトヲ得

第二百七十九條 上告申立及ヒ相手方ハ辯護士ヲ差出スコトヲ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢事ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キモノトシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者

自ラ辯護士ヲ選任セサルトキハ上告裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第二百八十條 裁判長ハ受命判事ヲ定ム可シ受命判事ハ訴訟記録ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラズ

第二百八十一條 上告申立人及ヒ相手方ハ受命判事ノ報告書ヲ差出スマテハ其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ上告裁判所ニ差出スコトヲ得

受命判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタルトキハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ

第二百八十二條 裁判所書記ハ開庭ヨリ三日前ニ開庭ノ期日ヲ上告申立人及ヒ相手方ノ辯護士ニ報知ス可シ

第二百八十三條 開庭ノ日ニハ受命判事先ツ其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢事及ヒ辯護士ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ私訴ノ上告ニ付テハ檢事最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第二百八十四條 上告申立人又ハ相手方ヨリ辯護士ヲ差出ササルトキハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ

第二百八十五條 上告裁判所ニ於テハ上告ノ理由ヲキトキ又ハ法律上ノ方式及ヒ期間内ニ於

テ起ササルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ
第二百八十六條 上告ヲ理由アリトスルトキハ

其上告ニ係ル判決ノ部分ヲ破毀シ其事件ヲ他
ノ裁判所ニ移ス言渡ヲ爲ス可シ但後二條ニ記
載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第二百八十七條 擬律ノ錯誤又ハ法律ニ背キ公
訴ヲ受理シタルニ因リ判決ヲ破毀シタルトキ
ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク上告裁
判所ニ於テ直チニ判決ヲ爲ス可シ

第二百八十八條 公判ノ手續規定ニ背キタルコ
トアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ホササル
トキハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク止
マ其手續ヲ破毀ス可シ

第二百八十九條 判決ノ一分ニ對シ上告アリタ
ル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アルトキハ其部
分ヲ破毀ス可シ
擬律ノ錯誤又ハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シタル
ニ因リ被告人ノ利益ノ爲メニ判決ヲ破毀シタ

毀シ直チニ其事件ニ付キ判決ヲ爲ス可シ

第四章 抗告

第二百九十三條 抗告ハ法律ニ於テ特ニ許シタ
ル場合ニ限り之ヲ爲スコトヲ得

第二百九十四條 抗告ニ付テハ直近ノ上級裁判
所其裁判ヲ爲ス可シ

抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ抗告申立人ヨリ
更ニ抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百九十五條 抗告ノ期間ハ裁判ノ送達アリ
タル日ヨリ三日トス

第二百九十六條 抗告ヲ爲スニハ其申立書ヲ原
裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ豫審判事ニ差出ス
可シ

其裁判所又ハ豫審判事ニ於テ抗告ヲ理由アリ
トスルトキハ不服ノ點ヲ更正シ又理由ナシト
スルトキハ意見ヲ付シテ三日内ニ抗告申立書
ヲ抗告裁判所ニ送致シ且豫審終結ノ決定ニ對
スル抗告ニ付テハ訴訟記録ヲモ送致ス可シ

ルトキハ其利益ハ上告ヲ爲ササル共同被告人
ニモ及ホス可シ

第二百九十條 上告裁判所ニ於テ破毀シタル事
件ヲ他ノ裁判所ニ移ス言渡ヲ爲スコトキハ
原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ指定ス
可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ其裁判所ノ
民事部ニ移スコシ

第二百九十一條 第二百六十五條ノ規定ハ上告
ニモ亦之ヲ準用ス

第二百九十二條 第一審裁判所ト第二審裁判所
トヲ問ハス法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑
ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタ
ル場合ニ於テ期間内ニ上訴スル者ナクシテ其
判決確定シタルトキハ其事件ニ付キ上告ヲ受
クル權アル裁判所ノ檢事ハ司法大臣ノ命ニ因
リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ其裁判所ニ非常
上告ヲ爲スコトヲ得

非常上告ヲ理由アリトスルトキハ原判決ヲ破

第二百九十七條 抗告裁判所ニ於テハ檢事ノ意
見ヲ聽キ書類ニ依リ抗告ノ裁判ヲ爲スコシ

第二百九十八條 豫審終結ノ決定ニ對スル抗告
ニ付キ抗告裁判所ニ於テ必要ナリトスルトキ
ハ受命判事ヲシテ事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲
サシムルコトヲ得
受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコト
ヲ得

第二百九十九條 抗告裁判所ニ於テハ抗告ヲ許
ス可キヤ否ヤ又抗告ノ期間内ニ於テ申立ヲ爲
シタルヤ否ヤヲ調査シ此要件ノ一ヲ闕クトキ
ハ其抗告ヲ棄却ス可シ

第三百條 抗告裁判所ニ於テ抗告ヲ理由アリト
スルトキハ原裁判ヲ取消シ自ラ更ニ裁判ヲ爲
シ又抗告ヲ理由ナシトスルトキハ之ヲ棄却ス
可シ

第六編 再審

第三百一一條 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪、

輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スコトヲ得但判決確定ニ後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第一 人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタルモ其殺サレタリト認メラレシ者犯罪後生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタル確證アリタルトキ

第二 同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別

ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタルトキ

第三 犯罪アル以前ニ作リタル公正證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルコトヲ證明シタルトキ

第四 被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタルトキ

第五 公正證書ヲ以テ訴訟記録ニ偽造又ハ錯誤アルコトヲ證明シタルトキ

第六 判決ノ憑據ト爲リタル民事上ノ判決他ノ確定ト爲リタル判決ヲ以テ廢棄若ク

ハ破毀セラレタルトキ
第三百二條 再審ノ訴ヲ爲スコトヲ得ヘキ者左ノ如シ

第一 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事

第二 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢事

第三 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル上告裁判所ノ檢事

但司法大臣ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ

第四 刑ノ言渡ヲ受ケタル者

第五 刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタルトキハ其親屬

第三百三條 再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラズ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

第三百四條 再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原判決ノ謄本及ヒ證憑書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢事ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ上告裁判所ノ檢事ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢事及ヒ控訴裁判所ノ檢事自ラ再審ノ訴ヲ爲サントスルトキハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

第三百五條 上告裁判所ニ於テハ檢事ノ請求ニ因リ速ニ受命判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシム可シ

第三百六條 上告裁判所ニ於テハ受命判事ノ報告及ヒ檢事ノ意見ヲ聞キ判決ヲ爲ス可シ

第三百七條 上告裁判所ニ於テ再審ノ原由アルコトヲ認メタルトキハ原判決ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲スコトヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ

其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第三百八條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタ

ル場合ニ於テ上告裁判所ニテ再審ノ原由アルコトヲ認メタルトキハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク原判決ヲ破毀ス可シ

第三百九條 再審ノ判決ニ因リ無罪ノ言渡アリタルトキ又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタルトキハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其判決ヲ揭示ス可シ

第七編 大審院ノ特別權限ニ屬スル訴訟手續
第三百十條 裁判所構成法第五十條第二號ニ記載シタル大審院ノ特別權限ニ屬スル犯罪ニ付テハ檢事總長其捜査ヲ爲ス可シ

地方裁判所區裁判所ノ檢事及ヒ司法警察官モ亦其犯罪ニ付キ捜査ヲ爲シ檢事總長ニ報告ス可シ

第三百十一條 前條ニ記載シタル犯罪ノ現行犯アル場合ニ於テ急速ヲ要スルトキハ地方裁判所區、裁判所ノ檢事及ヒ司法警察官ハ第四百十四條及ヒ第四百十七條第一項ノ規定ニ從ヒ

豫審處分ヲ爲スコトヲ得但豫審判事ニ通知スルコトヲ要セス

第三百十二條 前條ノ場合ニ於テハ地方裁判所檢事ヨリ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ檢事總長ニ送致ス可シ

第三百十三條 檢事總長ハ何レノ場合ニ於テモ其事件大審院ノ特別權限ニ屬シ且起訴ス可キモノト認メタルトキハ豫審判事ヲ命ス可キコトヲ大審院長ニ請求ス可シ

第三百十四條 大審院長ヨリ命ヲ受ケタル豫審判事ハ豫審ヲ爲シタル上ニテ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタルトキハ訴訟記録ニ意見ヲ付シ大審院ニ差出ス可シ

第三百十五條 大審院ニ於テハ檢事總長ノ意見ヲ聽キ先ツ其事件ヲ公判ニ付ス可キヤ否ヤヲ決定ス可シ

其事件地方裁判所又ハ區裁判所ノ權限ニ屬スルモノト決定シタルトキハ管轄裁判所ヲ指定

體刑ノ言渡ヲ受ケ其執行ヲ遁レタル者ニ對シ檢事ノ發シタル逮捕狀ハ勾留狀ト同一ノ效ヲ有ス其關席判決ニ係ル場合ニ於テ發シタル者亦同シ

第三百二十條 刑ノ執行ハ其刑ヲ言渡シタル裁判所ノ檢事又ハ上告裁判所ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢事ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ
罰金、料料、訴訟費用及ヒ沒收物品、追徴金ハ檢事ノ命令ニ依リ之ヲ徵收ス可シ
破壊又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢事之ヲ處分ス可シ

第三百二十一條 死刑ノ執行ニ付テハ裁判所書記其始末書ヲ作り刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

第三百二十二條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタルトキハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ決定ス可シ此決定ニ對シテハ抗

シ其事件ヲ送致ス可シ若シ特別裁判所ノ權限ニ屬スルモノト認メタルトキハ決定ヲ以テ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第百六十五條ニ記載シタル場合ニ於テハ決定ヲ以テ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百十六條 前數條ニ於テ特ニ規定シタルモノヲ除ク外豫審、公判ノ手續ハ第三編第四編ノ規定ヲ準用ス

第八編 裁判執行、復權及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第三百十七條 刑ノ執行ハ判決確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第三百十八條 死刑ノ言渡確定シタルトキハ檢事ヨリ速ニ訴訟記録ヲ司法大臣ニ差出ス可シ司法大臣ヨリ死刑ヲ執行ス可キ命令アリタルトキハ三日以内ニ其執行ヲ爲ス可シ

第三百十九條 死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタルトキハ直チニ之ヲ執行ス可シ

告ヲ爲スコトヲ得

第三百二十三條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ辨濟ス可キ訴訟費用ニ付キ其判決ノ執行ハ民事訴訟法ノ規定ニ從フ

第二章 復權

第三百二十四條 復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期間經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法大臣ニ之ヲ爲ス可シ
復權ノ願書ハ現ニ任スル地ノ地方裁判所檢事ニ之ヲ差出ス可シ

第三百二十五條 復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

第一 判決ノ正本

第二 主刑ノ滿期、特赦ト爲リ又ハ時効ノ成就シタルコトヲ證明スル書類

第三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタル證書

第四 賠償及ヒ訴訟費用ヲ辨濟シ又ハ其義

務ヲ免カレタル證書

第五 過去、現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第三百二十六條 検事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ検事長ニ差出ス可シ

第三百二十七條 検事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復権ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

第三百二十八條 司法大臣ハ復権ノ願ニ關スル書類ヲ檢閲シ之ニ意見書ヲ添ヘ速ニ上奏ス可シ

第三百二十九條 勅裁ニ因リ復権ノ願ヲ却下シタルトキハ司法大臣ヨリ其旨ヲ検事長ニ通知シ検事長ヨリ願書ヲ差出シタル地方裁判所檢事ニ通知ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期間ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ

爲スコトヲ得ス
更ニ復権ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規定ニ從フ

第三百三十條 復権ノ裁可アリタルトキハ司法大臣ヨリ其裁可狀ヲ検事長ニ送致シ検事長ヨリ願書ヲ差出シタル地方裁判所檢事ニ送致ス可シ

檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ
又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ判決ノ原本ニ記入ス可シ

第三章 特赦

第三百三十一條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事又ハ監獄署長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法大臣ニ申立ルコトヲ得

監獄署長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ストキハ檢事ヲ經由ス可シ但檢事ハ意見書ヲ添フ可シ

特赦ノ申立アリタルトキハ司法大臣ヨリ其書類ニ意見書ヲ添ヘ上奏ス可シ

第三百三十二條 司法大臣ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲スコトヲ得死刑ヲ除ク外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セズ

第三百三十三條 特赦ノ申立却下アリタルトキハ司法大臣ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事ニ其旨ヲ通知ス可シ

第三百三十四條 特赦ノ裁可アリタルトキハ司法大臣ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第三百三十條ノ規定ニ從フ

附則

第一條 此法律施行前ニ受理シタル豫審ノ故障及ヒ其故障ノ判決ニ對スル上告ハ之ヲ受理シタル地方裁判所又ハ大審院ニ於テ抗告トシテ之ヲ裁判ス可シ

第二條 大審院ニ於テ既ニ受理シタル哀訴、裁判管轄ヲ定ムルノ訴及ヒ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ治罪法ノ手續ニ依リ大審院之ヲ裁判ス可シ

第三條 既ニ發シタル勾留狀收監狀ハ此法律ニ定メタル勾留狀ノ效ヲ有ス

第四條 此法律ノ規定ニ依リ市町村長ノ爲ス可キ職務ハ市町村長ヲ置カサル地ニ在テハ其職務ヲ行フ吏員ニ屬ス

第五條 此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行シ其日ヨリ治罪法ヲ廢ス

朕法例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治二十三年十月六日

農	文	海	外	遞	陸	大	司	內	內閣總理大臣
商	部	軍	務	信	軍	藏	法	務	大臣
務	大	大	大	大	大	大	大	大	大臣
大	臣	臣	臣	臣	臣	臣	臣	臣	大臣
臣									伯爵
		子爵	子爵	伯爵	伯爵	伯爵	伯爵	伯爵	伯爵
		陸	芳	樺	青	後	大	松	山
		奧	川	山	木	藤	山	方	山
		宗	顯	資	周	象	山	正	山
		光	正	紀	藏	二	山	義	山
						郎	巖	義	山

法律第九十七號

法例

第一條 法律ハ公布アリタル日ヨリ滿二十日ノ後ハ之ヲ遵守ス可キモノトス但法律ニ特別ノ規定アルモノハ此限ニ在ラス

第二條 法律ハ既往ニ遡ル效力ヲ有セス

第三條 人ノ身分及ヒ能力ハ其本國法ニ從フ親屬ノ關係及ヒ其關係ヨリ生スル權利義務ニ付テモ亦同シ

第四條 動産、不動産ハ其所在地ノ法律ニ從フ

然レトモ相續及ヒ遺贈ニ付テハ被相續人及ヒ遺贈者ノ本國法ニ從フ

第五條 外國ニ於テ爲シタル合意ニ付テハ當事者ノ明示又ハ默示ノ意思ニ從ヒテ何レノ國ノ法律ヲ適用ス可キヤヲ定ム

當事者ノ意思分明ナラサル場合ニ於テハ同國人ナルトキハ其本國法ヲ適用シ又同國人ニ非

ノ作ル私署證書ニ付テハ其本國法ニ從フコトヲ得

第十條 要式ノ合意又ハ行爲ト雖モ之ヲ爲ス國ノ方式ニ從フトキハ方式上有效トス但故意ヲ以テ日本法律ヲ脱シタルトキハ此限ニ在ラス

第十一條 外國ニ於テ其國ノ方式ニ依リテ作りタル證書ハ不動産物權ヲ移轉スル行爲ニ係ルトキハ其不動産所在地ノ地方裁判所長又他ノ行爲ニ係ルトキハ當事者ノ住所又ハ居所ノ地方裁判所長其證書ノ適法ナルコトヲ檢認シタル上ニ非サレハ日本ニ於テ其效用ヲ致サシムルコトヲ得ス

第十二條 第三者ノ利益ノ爲メニ設定スル公示ノ方式ハ不動産ニ係ルトキハ其所在地ノ法律、他ノ場合ニ於テハ其原因ノ生シタル國ノ法律ニ從フ

第十三條 訴訟手續ハ其訴訟ヲ爲ス國ノ法律ニ從フ裁判及ヒ合意ノ執行方法ハ其執行ヲ爲ス

サルトキハ事實上合意ニ最大ノ關係ヲ有スル地ノ法律ヲ適用ス

第六條 外國人カ日本ニ於テ日本人ト合意ヲ爲ストキハ外國人ノ能力ニ付テハ其本國法ト日本法トノ中ニテ合意ノ成立ニ最モ有益ナル法律ヲ適用ス

第七條 不當ノ利得不正ノ損害及ヒ法律上ノ管理ハ其原因ノ生シタル地ノ法律ニ從フ

第八條 本國法ヲ適用ス可キ諸般ノ場合ニ於テ何レノ國民分限ヲモ有セサル者又ハ地方ニ依リ法律ヲ異ニスル國ノ人民ハ其住所ノ法律ニ從フ若シ住所知レサルトキハ其居所ノ法律ニ從フ

第九條 公正證書及ヒ私署證書ノ方式ハ之ヲ作ル國ノ法律ニ從フ但一人又ハ同國人ナル數人

國ノ法律ニ從フ

第十四條 刑法其他公法ノ事項ニ關シ及ヒ公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ關スルトキハ行爲ノ地、當事者ノ國民分限及ヒ財産ノ性質ノ如何ヲ問ハズ日本法律ヲ適用ス

第十五條 公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ關スル法律ニ牴觸シ又ハ其適用ヲ免カレントスル合意又ハ行爲ハ不成立トス

第十六條 身分又ハ能力ヲ規定スル法律ヲ免カサル合意又ハ行爲ハ無効トス

第十七條 判事ハ法律ニ不明不備又ハ欠缺アルチ口實トシテ裁判ヲ爲スチ拒絕スルコトヲ得ス

朕民法中財産取得編人事編ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治二十三年十月六日

農商務大臣	文部大臣	海軍大臣	外務大臣	遞信大臣	陸軍大臣	大藏大臣	司法大臣	內務大臣	內閣總理大臣
		子爵	子爵	伯爵	伯爵	伯爵	伯爵	伯爵	伯爵
陸奥宗光	芳川顯正	樺山資紀	青木周藏	後藤象二郎	大山巖	松方正義	山田顯義	西郷從道	山縣有朋

法律第九十八號
民法財產取得編目錄

第十三章 相續

總則

第一節 家督相續

第一款 家督相續ノ通則

第二款 家督相續人ノ順位

第三款 隱居家督相續ノ特別規則

第二節 遺產相續

第三節 國ニ屬スル相續

第四節 相續ノ受諾及ヒ拋棄

第一款 單純ノ受諾

第二款 限定ノ受諾

第三款 拋棄

第四款 相續人ノ曠缺セル相續財產ノ處分

第十四章 贈與及ヒ遺贈

總則

第一節 贈與又ハ遺贈ヲ爲シ又ハ收受スル能力

第二節 贈與

第一款 贈與ノ方法

第二款 贈與ノ廢罷

第三節 夫婦間ノ贈與ノ特例

第四節 遺贈

第一款 遺言ノ方式

第二款 遺言ノ特別方式

第三款 遺贈ヲ爲スコトヲ得ル財產ノ部分

第四款 遺言ノ效力及ヒ執行

第五款 遺言ノ廢罷及ヒ失效

第五節 包括ノ贈與又ハ遺贈ニ基ク不

分財產ノ分割

第一款 分割

第二款 分割ノ効力及ヒ擔保

第三款 分割ノ銷除

第十五條 夫婦財產契約

第一節 總則

第二節 法定ノ制

民法

財產取得編

第十三章 相續

總則

第二百八十六條 相續ニ二種アリ家督相續及ヒ遺產相續是ナリ

第一節 家督相續

第二百八十七條 家督相續トハ戶主ノ死亡又ハ隱居ニ因ル相續ヲ謂フ

第一款 家督相續ノ通則

第二百八十八條 家督相續ヲ爲スハ一家一人ニ限ル

何人ト雖モ二家以上ノ家督相續ヲ爲スコトヲ得ス

第二百八十九條 婚姻又ハ養字縁組ニ因リ他家

ニ入りテ其家ニ在ル者ハ實家其他ノ家ノ家督相續ヲ爲スコトヲ得ス

第二百九十條 一人ニシテ數家ノ家督相續人ニ指定セラレ又ハ選定セラレタル者ハ其中ノ一ヲ選擇スルコトヲ得

第二百九十一條 推定家督相續人ハ他家ノ家督相續人ニ指定セラレ又ハ選定セラレタルモ其指定又ハ選定ハ無効トス

第二百九十二條 被相續人ヲ死ニ致シ又ハ死ニ致サントシタル者ノ刑ニ處セラレタル者ハ相續ヨリ除斥セラレ但過失ニ因ルモノハ此限ニ在ラス

第二百九十三條 相續除斥ノ訴權ハ被相續人ノ明示ノ宥免ニ因リテ消滅ス

第二百九十四條 家督相續人ハ、姓氏、系統貴號及ヒ一切ノ財產ヲ相續シテ戶主ト爲ル

系譜、世襲財產、祭具、墓地、商號及ヒ商標ハ家督相續ノ特權ヲ組成ス

三

第二款 家督相續人の順位

第二百九十五條 法律ニ於テ家督相續人ト爲ル可キ者ノ順位ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一 被相續人ノ家族タル卑屬親中親等ノ最モ近キ者

第二 卑屬親中同親等ノ男子ト女子ト有ルトキハ男子

第三 男子數人アルトキハ其先ニ生マレタル者但嫡出子ト庶子又ハ私生子ト有ルトキハ嫡出子

第四 女子ノミ數人アルトキハ其先ニ生マレタル者但嫡出子ト庶子又ハ私生子ト有ルトキハ嫡出子

然レトモ右ノ規定ニ從ヒテ家督相續人タル可キ者カ被相續人ニ先ヲチテ死亡シ又ハ第二百九十七條ニ掲ケタル原因ニ由リテ廢除セラレタル場合ニ於テ其者ニ卑屬親アルトキハ其卑屬親ハ法定ニ順位ニ依リテ家督相續人ト爲ル

被相續人ハ家督相續人ヲ指定スルコトヲ得ス但此規定ニ違ヒタル指定ト雖モ被相續人ノ死亡ノ日ニ法定ノ家督相續人アラサルトキハ有効トス

第三百條 家督相續人ノ指定ハ遺言書ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

第三百一條 法定又ハ指定ノ家督相續人アラサル場合ニ於テ其家ニ死亡者ノ父アルトキハ父、父アラサルトキハ母ハ左ノ順序ニ從ヒ家族中ヨリ家督相續人ヲ選定ス

第一 兄弟

第二 姉妹

第三 兄弟姉妹ノ卑屬親中親等ノ最モ近キ男子若シ男子アラス又ハ拋棄シタルトキハ女子

第三百二條 前條ノ場合ニ於テ父母アラサルトキハ家督相續人選定ノ權利ハ親族會ニ屬ス但親族會ハ前條ニ定メタル選定ノ順序ヲ變更ス

四

第二百九十六條 被相續人ハ正當ノ原因アルニ非サレハ法定ノ推定家督相續人ヲ廢除スルコトヲ得ス

第二百九十七條 法定ノ推定家督相續人ヲ廢除スルコトヲ得ヘキ正當ノ原因ハ左ノ如シ

第一 失踪ノ宣言

第二 民事上禁治産及ヒ准禁治産

第三 重禁錮一年以上ノ處刑

第四 家政ヲ執ルニ堪ヘサル不治ノ疾病

第五 祖父母、父母ニ對スル罪ノ處刑

第六 重罪ニ因レル處刑

第二百九十八條 推定家督相續人ノ廢除ハ遺言書ヲ以テ之ヲ爲シ又ハ身分取扱吏ニ申述シテ之ヲ爲スコトヲ得

廢除ノ取消ハ身分取扱吏ニ申述シテ之ヲ爲ス

第二百九十九條 法定ノ家督相續人アルトキハ

ルコトヲ得ス

第三百三條 第三百一條ノ規定ニ從ヒ道定スヘキ家督相續人アラサルトキ又ハ皆拋棄シタルトキハ其家ニ在ル尊屬親中親等ノ最モ近キ者任意ニ家督相續ヲ爲スコトヲ得

第三百四條 前條ノ家督相續人アラサルトキハ配偶者家督相續ヲ爲スコトヲ得

第三百五條 親族會ハ前數條ニ記載シタル相續人アラサルトキ又ハ皆拋棄シタルトキニ非サレハ他人ヲ選定スルコトヲ得ス

第三款 隱居家督相續ノ特別規則

第三百六條 隱居ヲ爲スニハ左ノ條件ノ具備スルコトヲ要ス

第一 滿六十年以上ナルコト

第二 故意ニ出タルコト

第三 成年ニシテ且實際家政ヲ執ルノ能力アル家督相續人カ單純ノ承諾ヲ爲シタルコト

第四 配偶者ノ承諾シタルコト

第三百七條 隱居者カ重病其他ノ原因ノ爲メニ實際家政ヲ執ル能ハサルトキ又ハ分家ノ戶主カ本家ヲ承繼スルノ必要アルトキハ本人ノ申立ニ因リ區裁判所ハ年齢ノ條件ヲ宥恕スルコトヲ得

第三百八條 隱居者ノ配偶者、親族及ヒ檢事ハ左ノ原因ノ一ニ基キ隱居届出ノ日ヨリ六十日内ニ故障ヲ申立ツルコトヲ得

第一 第三百六條第一號乃至第三號ノ條件ニ違ヒタル事實

第二 家督相續ヲ爲ス者カ推定家督相續人ニ非サル事實

又隱居カ任意ニ出テサリシ場合ニ於テハ隱居者モ亦故障ヲ申立ツルコトヲ得

第三百九條 隱居カ第三百六條第四號ノ條件ニ違ヒタル事實アルトキハ隱居者ノ配偶者ニ限リ故障ヲ申立ツルコトヲ得

ス

第三百十四條 卑屬親カ遺產ヲ相續スル場合ニ於テハ第二百九十五條ノ親定ヲ適用ス

第三節 國ニ屬スル相續

第三百十五條 相續人アラサル財産ハ當然國ニ屬ス

國ハ限定ノ受諾ヲ以テ相續ス

第三百十六條 國ニ屬ス可キ相續財産ハ其領収ヲ爲スニ至ルマテ相續人曠缺ノ財産ヲ管理スル如ク之ヲ管理ス

第四節 相續ノ受諾及ヒ拋棄

第三百十七條 相續人ハ相續ニ付キ單純若クハ限定ノ受諾ヲ爲シ又ハ拋棄ヲ爲スコトヲ得但法定家督相續人ハ拋棄ヲ爲スコトヲ得ス又隱居家督相續人ハ限定ノ受諾ヲ爲スコトヲ得ス第三百十八條 隱居家督相續ヲ除ク外相續人ハ相續財産ヲ調査スル爲メ相續ノ日ヨリ三個月ノ期間ヲ有ス但裁判所ハ情況ニ因リ更ニ三個月

六

又隱居者カ債權者ヲ詐害スルノ意思ヲ以テ隱居ヲ爲サントスルトキハ債權者ハ故障ヲ申立ツルコトヲ得

前條ノ期間ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百十條 隱居ヲ爲ストキハ當事者ヨリ其旨ヲ身分取扱吏ニ届出ツ可シ

第三百十一條 隱居家督相續ハ届出前ノ利害關係人ニ對シテハ第三百八條ニ定メタル期間滿限ノ日ヨリ又故障アリタルトキハ其故障ノ棄却確定シタル日ヨリ死亡ニ因ル相續ト同一ノ效力ヲ生ス但隱居者ノ終身ヲ限度トスル權利及ヒ義務ヲ消滅セシメス

第二節 遺產相續

第三百十二條 遺產相續トハ家族ノ死亡ニ因ル相續ヲ謂フ

第三百十三條 家族ノ遺產ハ其家族ト家ヲ同フスル卑屬親之ヲ相續シ卑屬親ナキトキハ配偶者之ヲ相續シ配偶者ナキトキハ戶主之ヲ相續

月間ノ延期ヲ許スコトヲ得

受諾又ハ拋棄ヲ決定スル爲メ一個月ノ期間ヲ有ス此期間ハ調査期間滿限ノ日又ハ其前ニ實際ノ調査ヲ終了シタル日ヨリ之ヲ算ス

第三百十九條 相續人ハ調査又ハ決定ノ期間内相續財産ニ關スル一切ノ訴訟手續ヲ停止セシムルコトヲ得

第三百二十條 相續財産ニ關スル訴訟ニ要セシ費用ハ法律上ノ期間内ニ係ルモノト裁判所ノ許シタル延期内ニ係ルモノトハ總テ相續財産ノ負擔トス但相續人ノ所爲又ハ過失ニ因リテ要セシ費用ハ此限ニ在ラス

第三百二十一條 相續財産中ニ損敗シ易ク又ハ保存スルニ著シキ費用ヲ要スル物品アルトキハ調査又ハ決定ノ期間内ト雖モ區裁判所ノ認可ヲ得テ其物品ヲ競賣ニ付スルコトヲ得但日用品ハ裁判所ノ認可ヲ經シテ之ヲ處分スルコトヲ得

七

第一款 單純ノ受諾

第三百二十二條 相續人カ被相續人ノ財産ニ關シ明示又ハ默示ニテ其代表者ト爲ルノ意思ヲ顯ハストキハ單純ノ受諾トス

第三百二十三條 左ノ如キ場合ニ於テハ默示ノ受諾アリトス

第一 相續財産ノ一箇又ハ數箇ニ付キ他人ノ爲メニ所有權ヲ讓渡シ又ハ其他ノ物權ヲ設定シタルトキ但財産編第百十九條以下ノ制限ニ從ヒタル貸借權ノ設定ハ此限ニ在ラス

第二 相續人カ第三百十八條ノ期間内ニ限定受諾又ハ拋棄ヲ爲サルトキ

右ノ外尙ホ第三百二十七條第二號ノ場合ハ單純ノ受諾ヲ成ス

第三百二十四條 受諾ハ左ノ原因ノ一アルニ非サレハ之ヲ鎖除スルコトヲ得ス

第一 身體又ハ財産ニ強暴ヲ加ヘラレタル

第三百二十七條 左ノ場合ニ於テハ相續人ハ限定受諾ヲ爲スノ權利ヲ失フ

第一 單純ノ受諾ヲ爲シタルトキ

第二 相續財産ヲ私取シ若クハ隱匿シ又ハ

惡意ヲ以テ財産調査目錄中ニ相續財産ノ

後分ヲ記載セサリシトキ

第三百二十八條 限定受諾者ハ其特有財産ニ於ケルト同一ノ注意ヲ以テ相續財産ヲ管理シ債

權者及ヒ受遺者ニ其計算ヲ爲ス可シ但此計算ハ債務及ヒ遺贈ノ辨濟ノ爲メ相續財産ヲ拂盡

シタル後一个月内ニ之ヲ完了スルコトヲ要ス

第三百二十九條 限定受諾者ハ動産ト不動産ト

ヲ間ハス總テ相續財産ノ賣却ヲ要スルトキハ

區裁判所ノ許可ヲ得テ之ヲ競賣ニ付ス可シ

第三百三十條 限定受諾者ハ適法ニ賣却シタル

財産ノ各箇ニ付テ得タル代價ヲ混同セス其各

箇ニ付テ優先權ヲ有スル債權者ニ順次ニ辨濟

ス可シ

ニ因リテ受諾シタルトキ

第二 詐欺ノ爲メニ受諾シタルトキ

第三 無能力者又ハ後見人カ方式ニ違ヒテ

受諾シタルトキ

第四 受諾ノ時成立セルコトヲ知ラサル債

務ノ爲メ破産又ハ無資力ト爲ルニ至ル可

キトキ此銷除訴權ハ財産編第五百四十四

條以下ニ規定シタル銷除訴權ノ期間及ヒ

條件ニ從フ

第二款 限定ノ受諾

第三百二十五條 相續人カ相續財産ノ限度マテ

ニ非サレハ債務ノ辨償ノ責ニ任セサルトキハ

限定ノ受諾トス

第三百二十六條 相續人ニシテ限定ノ受諾ヲ爲

スノ意思ヲ有スル者ハ第三百十八條ノ期間内

ニ調査シタル財産ノ目錄ヲ相續地ノ區裁判所

ニ差出タシ其申述ヲ爲シ裁判所ハ別段ニ備ヘ

タル帳簿ニ之ヲ記載ス可シ

第三百三十一條 相續ノ負擔スル債務又ハ遺贈

ノ辨濟ヲ差押ヘ又ハ其辨濟ニ付キ異議ヲ述フ

ル債權者又ハ受遺者アルトキハ限定受諾者ハ

裁判ヲ以テ定メタル順次及ヒ方法ニ從フニ非

サレハ其辨濟ヲ爲スコトヲ得ス

第三百三十二條 前條ノ差押又ハ異議アラサル

トキハ債權者又ハ受遺者ノ要求ニ從ヒテ辨濟

ヲ爲ス

辨濟ノ爲メニ相續財産ヲ拂盡シタル後ト雖モ

第三百二十八條ニ規定シタル計算ヲ完了セサ

ル前ニ要求ヲ爲ス債權者又ハ受遺者ハ左ノ區

別ニ從ヒ既ニ辨濟ヲ得タル債權者及ヒ受遺者

ニ對シテ求償權ヲ行フコトヲ得

第一 債權者ハ先ツ受遺者ニ對シテ債權者

ニ對スルコト

第二 受遺者ハ單ニ受遺者ニ對スルコト

第三百三十三條 相續人カ計算ノ完了ヲ遅延シ

タル場合ニ於テハ債權者中未タ辨濟ヲ得サル

者ヨリ既ニ辨濟ヲ得タル受遺者及ヒ債權者ニ
求償スルコトヲ得ヘキ額ヲ直チニ相續人ノ特
有財産ニ付キ求償スルコトヲ得

第三百三十四條 相續財産ヲ拂盡シ計算ヲ完了
シタル後ニ要求ヲ爲ス債權者ハ單ニ辨濟ヲ得
タル受遺者ニ對スルニ非サレバ求償權ヲ行フ
コトヲ得ス

第三百二十五條 前三條ノ求償權ハ三ヶ年之間之
ヲ行フコトヲ得但此期間ハ計算ノ完了前ニ係
ルトキハ初メ相續人ニ要求シタル日又完了後
ニ係ルトキハ其完了ノ日ヨリ之ヲ算ス

第三款 拋棄

第三百二十六條 相續ヲ拋棄セントスル相續人
ハ相續地ノ區裁判所ニ其旨ヲ申述シ裁判所ハ
別段ニ備ヘタル帳簿ニ之ヲ記載ス可シ

第三百二十七條 拋棄シタル相續ハ他ニ受諾シ
タル相續人アラサル間ハ拋棄者更ニ之ヲ受諾
スルコトヲ得然レトモ此受諾ハ第三百十八條

セラレタル者ハ拋棄ヲ爲スコトヲ得ス

第三百四十一條 相續ニ包含スル物ヲ私取シ又
ハ隱匿シタル相續人ハ其相續ヲ拋棄スル權利
ヲ失フ

第四款 相續人ノ曠缺セル相續財産
ノ處分

第三百四十二條 相續人現出セス相續人ノ有無
分明ナラズ又ハ相續人相續ヲ拋棄シタルトキ
ハ相續人ノ曠缺セルモノト看做ス

第三百四十三條 相續地ノ區裁判所ハ利害關係
人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ相續財産ノ管理人
ヲ命ズ可シ

第三百四十四條 管理人ハ利害關係人ヲ召喚シ
テ相續財産ヲ調査シ其目錄ヲ作り財産ノ形狀
ヲ檢證セシム可シ

管理人ハ此手續ヲ終了シタル後相續ニ屬スル
權利ヲ行使シ之ヲ請求シ又其相續ニ對スル訟
求ニ答辯ス可シ

ノ期間内ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス但相
續財産ニ付キ第三者ノ有效ニ得タル權利ヲ害
スルコト無シ

第三百三十八條 相續ヲ拋棄シタル者ハ他ニ受
諾シタル相續人アリト雖モ左ノ場合ニ於テハ
其拋棄ヲ銷除スルコトヲ得

- 第一 身體又ハ財産ニ強暴ヲ加ヘラレタル
ニ因リテ拋棄シタルトキ
- 第二 詐欺ノ爲メニ拋棄シタルトキ
- 第三 無能力者又ハ後見人カ方式ニ違ヒテ
拋棄シタルトキ

此銷除訴權ハ財産編第五百四十四條以下ニ規
定シタル期間及ヒ條件ニ從フ

第三百三十九條 債權者ヲ詐害スル意思ニ出テ
タル拋棄ハ財産編第三百四十一條以下ニ定メ
タル區別及ヒ期間ニ從ヒ債權者自己ノ利益ノ
爲メ之ヲ廢罷スルコトヲ得

第三百四十條 適法ニ受諾シ又ハ受諾者ト推定

金錢ハ相續財産中ニ存スルモノト其返却ヨリ
得タルモノトヲ問ハス供託所ニ之ヲ供託ス可
シ

相續ノ負擔スル債務ハ區裁判所ノ許可ヲ得ル
ニ非サレハ之ヲ辨濟スルコトヲ得ス

第三百四十五條 限定受諾者ノ義務及ヒ責任ニ
關シ第三百二十八條以下ニ定メタル規則ハ管
理人ニ之ヲ適用ス

第三百四十六條 管理人ハ計算ヲ完了シテ尙ホ
相續財産ノ存スルニ於テハ區裁判所ノ許可ヲ
得テ之ヲ競賣ニ付シ其得タル金額ヲ供託所ニ
供託ス可シ

管理人ハ其領收證ヲ區裁判所ニ差出タシ區裁
判所之ヲ保存スヘシ

第三百四十七條 相續人現出スルトキハ其相續
人ハ區裁判所ヨリ供託所ノ領收證及ヒ相續人
タル身分ノ證明書ヲ得テ之ヲ供託所ニ提出シ
供託金額ヲ領收ス可シ

第三百四十八條 相續人アヲサルコト確實ニ至
リタルトキハ國ハ特別法ニ從ヒ供託金額ヲ領
收ス可シ

第十四章 贈與及ヒ遺贈

總則

第三百四十九條 贈與トハ當事者ノ一方カ無償
ニテ他ノ一方ハ自己ノ財産ヲ移轉スル要式ノ
合意ヲ謂フ

第三百五十條 贈與ハ單純、有期又ハ條件附ナ
ルコト有リ
贈與ハ法律ノ認メタル原因アルニ非サレハ之
ヲ廢罷スルコトヲ得ス

第三百五十一條 贈與者ハ贈與物ノ妨礙及ヒ退
奪ヲ擔保セス但其贈與以後ニ係ル贈與者ノ所
爲ヨリ生シタル妨礙及ヒ退奪ハ此限ニ在ラス

第三百五十二條 遺贈トハ當事者ノ一方カ他ノ
一方ニ無償ニテ自己ノ財産ヲ遺言ニ因リ死亡
ノ時ニ移轉スル行爲ヲ謂フ

遺贈ハ遺言者隨意ニ之ヲ廢罷スルコト得

第三百五十三條 遺言書中ニ存スル不能又ハ不
法ノ條件ハ之ヲ記セサルモノト看做ス
贈與書中ニ不能又ハ不法ノ條件アルトキハ其
贈與ヲ無効ト爲ス

第一節 贈與又ハ遺贈ヲ爲シ又ハ收受
スル能力

第三百五十四條 法律上特ニ無能力者ト定メタ
ル者ヲ除ク外何人ニ限ラス贈與及ヒ遺贈ヲ爲
シ又ハ收受スル能力ヲ有ス

第三百五十五條 左ニ掲クル者ハ贈與ヲ爲ス能
力ヲ有セス

第一 贈與ヲ爲ス時ニ於テ喪心シタル者

第二 禁治產者

第三 瘋癲ノ爲メ病院又ハ監置ニ在ル者

第四 未成年者但夫婦財產契約ノ爲メ法律
ノ特ニ許ス場合ハ例外トス

第三百五十六條 准禁治產者ハ財産讓渡ノ爲メ

法律ノ要スル方式ニ從フニ非サレハ贈與ヲ爲
スコトヲ得ス

第三百五十九條 左ニ掲クル者ハ遺贈ヲ爲ス能
力ヲ有セス

第一 遺贈ヲ爲ス時ニ於テ喪心シタル者

第二 民事上ノ禁治產者

第三 瘋癲ノ爲メ病院又ハ監置ニ在ル者

第四 未成年者但自治產者ハ此限ニ在ラス

第二節 贈與

第一款 贈與ノ方式

第三百五十八條 贈與ハ分家ノ爲メニスルモノ
ト其他ノ原因ノ爲メニスルモノトヲ問ハス普
通ノ合意ノ成立ニ必要ナル條件ヲ具備スル外
尙ホ公正證書ヲ以テスルニ非サレハ成立セス
然レトモ慣習ノ贈物及ヒ單一ノ手渡ニ成ル贈
與ニ付テハ此方式ヲ要セス

第三百五十九條 贈與ハ贈與者ノ現有ノ財産ノ
ミチ包含ス若シ將來ノ財産ヲ包含シタルトキ

ハ其財産ニ付テハ贈與ハ無効トス

然レトモ數額ノ定マリタル金錢又ハ定量物ノ
贈與ハ贈與者ノ現有スルト否トヲ問ハス有效
トス

第三百六十條 贈與ノ性質又ハ諾約ニ因リテ受
贈者カ贈與者ノ債務ヲ辨濟スル義務ヲ負ヒタ
ルトキハ其義務ハ贈與ノ時既ニ存在シタル債
務ニ非サレハ包含セス

受贈者カ贈與者ノ將來ノ債務ヲ辨濟ス可キノ
諾約ヲ爲シタルトキハ其諾約ハ無効トス

第三百六十一條 贈與者ハ自己ノ利益ニ於テス
ルニ非サレハ自己ニ先ダチテ受贈者ヲ死亡ス
ルトキ其贈與ヲ解除ス可キ條件ヲ要約スルコ
トヲ得ス

若シ贈與者カ其相續人又ハ第三者ノ利益ニ於
テ此解除條件ヲ要約シタルトキハ其條件ハ無
効トス

第三百六十二條 前條第一項ノ規定ニ從ヒテ有

效ニ要約シタル解除條件ノ成就ハ受贈者ノ相續人ニ對スルト第三者ニ對スルトヲ問ハス普通ノ合意ニ於テ要約シタル解除條件ト同一ノ效力ヲ生ス

然レトモ受贈者ノ婦ハ解除ニ拘ハラズ左ノ二箇ノ條件具備スルトキハ贈與財産ニ附キ法律上ノ抵當權ヲ保有ス

第一 贈與カ夫婦財産契約ヲ以テ夫ノ爲メ爲サレタルモノナルトキ

第二 贈與財産ノ外ナル夫ノ財産ヲ以テ婦ノ特有財産ノ返還ヲ擔保スルニ足ラサルトキ

第二款 贈與ノ廢罷

第三百六十三條 贈與ハ合意ヲ無効ト爲ス普通ノ原因ノ外尙ホ贈與者ノ要約シタル條件ノ不履行ノ爲メ之ヲ廢罷スルコトヲ得

第三百六十四條 條件ノ不履行ニ基ク贈與ノ廢罷ハ贈與者又ハ其承繼人ヨリ之ヲ請求スルコトヲ得

第一款 遺言ノ方式

第三百六十八條 遺言ハ遺言者ノ自筆ノ證書公正證書又ハ秘密ノ方式ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ得

然レドモ二人以上ノ人ハ一箇ノ證書ヲ以テ遺言ヲ爲スコトヲ得ス

第三百六十九條 自筆ノ遺言書ハ遺言者カ其全文、日附及ヒ氏名ヲ自書シテ捺印シタルニ非サレハ其效ヲ有セス

第三百七十條 公正證書ニ依ルハ公證人一人及ヒ證人二人ノ前ニ於テ遺言者カ遺言ノ旨趣ヲ口授シ公證人之ヲ筆記シ朗讀シタル後遺言者及ヒ證人各其氏名ヲ自書シテ捺印シタルニ非サレハ其效ヲ有セス

然レトモ氏名ヲ自書スル能ハサル者アルトキハ其事由ヲ證書ニ記載スルヲ以テ足ル

第三百七十一條 秘密ノ方式ニ依ル遺言書ハ遺言者ノ自書シタルト他人ノ之ヲ書シタルトチ

トチ得

第三百六十五條 條件ノ不履行ニ基キ贈與ヲ廢罷シタル場合ニ於テハ受贈者ニ對スルト第三者ニ對スルトヲ問ハス未必條件ノ成就ニ因リテ合意ヲ解除シタルトキト同一ノ效力ヲ生ス

第三節 夫婦間ノ贈與ノ特例

第三百六十六條 未成年ノ夫又ハ婦ハ婚姻ノ許諾ヲ與フ可キ者ノ許諾及ヒ立會ヲ得且財産契約ヲ以テスルニ非サレハ贈與ヲ爲スコトヲ得ス

第三百六十七條 夫婦間ノ贈與ハ何等ノ約款アルニ拘ハラズ婚姻中贈與者隨意ニ之ヲ廢罷スルコトヲ得

贈與ノ廢罷ハ第三者ニ對シテ效力ヲ有セス但贈與ノ登記ニ廢罷ノ訴狀ヲ附記シタル後ニ受贈者ノ遺産所持者ヨリ贈與財産ニ付キ物權ヲ取得シタル第三者ニ對シテハ此限ニ在ラズ

第四節 遺贈

問ハス左ノ諸件ヲ具備スルニ非サレハ其效ノ有セス

第一 遺言者カ氏名ヲ自書シテ捺印シタルコト

第二 遺言書ヲ封シテ遺言者カ之ニ封印シタルコト

第三 遺言者カ公證人一人及ヒ證人二人ノ前ニ封書ヲ提出シテ自己ノ遺言書タル旨ヲ陳述シタルコト

第四 公證人カ遺言者ノ陳述ト之ヲ聽キタル日附ト封紙ニ記シテ遺言者及ヒ證人ト共ニ各其氏名ヲ自書シテ捺印シタルコト但此場合ニ於テ氏名ヲ自書スル能ハサル證人アルトキハ公證人其事由ヲ封紙ニ記スルヲ以テ足ル

公證人ハ遺言者ノ死亡ノ後其相續人ノ立會ノ上ニ非サレハ開封セサル旨ヲ記シタル領收書ヲ遺言者又ハ其指定シタル證人中ノ一人ニ授

付ス可シ

第三百七十二條 秘密ノ方式ニ依ル遺言トシテ
有效ナル爲メ前條ニ定メタル條件ニ缺クルモ
ノ有リト雖モ其全文日附及ヒ氏名共ニ遺言者
ノ自書ニ係ルトキハ自筆ノ遺言書トシテ有效
トス

第三百七十三條 受遺者遺言ニ立會フ公證人ノ
筆生其他普通ノ無能力者ハ證人ト爲ルコトヲ
得ス

第二款 遺言ノ特別方式

第三百七十四條 軍人及ヒ軍屬ニシテ遠征中ニ
在ル者又ハ内地ト雖モ交戰中若クハ合圍中ニ
在ル者ハ將校一人證人二人ノ補助ヲ以テ遺言
書ヲ作ルコトヲ得

第三百七十五條 遠征中、交戰中又ハ合圍中ニ
在ル軍人及ヒ軍屬ニシテ疾病又ハ傷痍ノ爲メ
病院ニ在ル者ハ其院ノ醫官及ヒ事務官ノ補助
ヲ以テ遺言書ヲ作ルコトヲ得

得

第三百八十一條 外國ニ於テ作リタル遺言書ハ
遺言者ノ日本國內ニ有スル住所ノ區裁判所ノ
簿冊ニ之ヲ登錄シ若シ住所ノ知レサルトキハ
最終居所ノ區裁判所ノ簿冊ニ之ヲ登錄シタル
後ニ非サレハ日本國內ニ在ル財産ニ付キ其遺
言ヲ執行スルコトヲ得ス

又其遺言書ニ日本國內ニ在ル不動産ノ處分ヲ
包含スルトキハ其不動産所在地ノ區裁判所ニ
登記ヲ求メタル後ニ非サレハ第三者ニ對抗ス
ルコトヲ得ス

第三百八十二條 日本ニ在ル外國人ハ日本ノ法
律ニ從ヒ又ハ其本國ノ法律ニ從ヒテ遺贈ヲ爲
スコトヲ得

第三款 遺贈ヲ爲スコトヲ得ル財産
ノ部分

第三百八十三條 遺贈ヲ爲スコトヲ得ル財産ト
相續人ニ貯存ス可キ財産トノ部分ヲ定ムルニ

十六

第三百七十六條 傳染病ノ爲メ行政處分ヲ以テ
交通ヲ遮斷シタル地方ニ在ル者ハ其疾病中ナ
ルト否トナ問ハス警察官一人及ヒ證人一人ノ
補助ヲ以テ遺言書ヲ作ルコトヲ得

第三百七十七條 航海中ニ在ル者ハ軍艦ニ在テ
ハ將校一人其他ノ船舶ニ在テハ事務員一人及
ヒ證人二人ノ補助ヲ以テ遺言書ヲ作ルコトヲ
得

第三百七十八條 海上ニテ遺言書ヲ作リタルト
キハ其旨ヲ航海日誌ニ記載ス可シ

第三百七十九條 本款ノ規定ニ從ヒテ作リタル
遺言書ニハ遺言者代書者及ヒ立會人各其氏名
ヲ自書シテ捺印ス可シ

氏名ヲ自書シ又ハ捺印スル能ハサル者アルト
キハ其事由ヲ遺言書ニ記載スルヲ以テ足ル
第三百八十條 外國ニ在ル日本人ハ第三百六十
九條ニ定メタル自筆ノ方式ニ依リ又ハ其地ニ
用ユル公正ノ方式ニ從ヒテ遺言ヲナスコトヲ

ハ家督相續ノ特權ヲ組成スルモノヲ控除ス

第三百八十四條 法定家督相續人アルトキハ被
相續人ハ相續財産ノ半額マテニ非サレハ他人
ノ爲メ遺贈ヲ爲スコトヲ得ス

家族ノ遺産ヲ相續スル卑屬親アルトキモ亦同
シ

第三百八十五條 用益權ノ如キ其存立時間ノ不
確實ナル權利ハ相續ノ時於ニケル價額ヲ査定
シテ遺贈ヲ爲スコトヲ得ル部分ヲ定ム

其權利ノ價額カ遺贈ヲ爲スコトヲ得ル部分ヲ
超過スルトキハ相續人ハ或ハ被相續人ノ遺贈
ヲ履行シ或ハ遺贈ヲ爲スコトヲ得ル部分ノ完
全ナル所有權ヲ與ヘテ其權利ヲ受戻スコトヲ
得

第三百八十六條 遺贈ヲ爲スコトヲ得ル部分ヲ
超過スル遺贈ハ之ヲ其部分マテニ減殺ス

第三百八十七條 減殺ス可キ分量ハ相續ノ時ニ
現存スル總テノ財産ノ評價額ヨリ被相續人ノ

十七

債務額ヲ控除シタル剩餘額ニ付キ之ヲ算定ス
第三百八十八條 遺贈ノ幾分ヲ減殺シテ貯存ス
可キ財産ノ分量ヲ組成ス可キトキハ包括ノ遺
贈ト特定ノ遺贈トヲ問ハス其價額ノ割合ヲ以
テ總テノ遺贈ヲ減殺ス可シ

第三百八十九條 總テ贈與ニシテ贈與者ノ死亡
ノ後執行ス可キモノハ遺贈ト其效力ヲ同フス
第四款 遺贈ノ效力及ヒ執行

第三百九十條 單純又ハ有期ノ遺贈ハ遺贈者ノ
死亡ノ時ヨリ受遺者ノ知ルト否トヲ問ハス包
括ノ遺贈ニ付テハ其包含スル財産及ヒ債務ヲ
受遺者ニ移轉シ特定ノ遺贈ニ付テハ其遺贈物
ノ權利ヲ受遺者ニ移轉ス然レトモ有期ノ遺贈
ハ滿期ニ至ルマテ其執行ヲ止ム
停止又ハ解除ノ條件附ニ於ケル遺贈ノ效力ハ
合意ノ事項ニ關シテ規定シタル如ク其條件ノ
成就如何ニ從フ

遺贈ノ目的物カ代替物ナルトキハ其所有權ハ

財產編第三百三十二條ノ規定ニ從ヒテ移轉シ
如何ナル場合ニ於テモ受贈者ハ遺贈ヲ拋棄ス
ルコトヲ得

第三百九十一條 遺贈者カ不分ノ權利ヲ有スル
物ヲ遺贈シタルトキハ受贈者ハ遺贈者ト同一
ナル權利ヲ取得ス

第三百九十二條 受遺者ハ遺贈物ノ引渡ヲ要求
シタル時ヨリ後ニ非サレハ遺贈物ノ果實ヲ收
受スル權利ヲ有セス但期限ノ到來シ又ハ未必
條件ノ成就シタルコトヲ要ス

然レトモ左ノ三箇ノ場合ニ於テハ受遺者ハ遺
贈者ノ死亡滿期又ハ條件成就ノ時ヨリ要求ヲ
待タズシテ直チニ果實ヲ收受スル權利ヲ有ス
第一 遺贈者カ果實ヲ收受スル權利ヲ明示
シタルトキ
第二 遺贈カ養料ノ性質ヲ有スルトキ
第三 相續人カ惡意ヲ以テ遺贈ヲ隱蔽シタ
ルトキ

第三百九十五條 遺言書ハ公正證書ヲ除ク外相
續地ノ區裁判所ノ檢認ヲ得タル後ニ非レハ之
ヲ執行スルコトヲ得ス
封印アル遺言書ハ區裁判所ニ於テスルニ非レ
ハ開封スルコトヲ得ス
前二項ノ規定ニ違フ者ハ百圓以下ノ過料ニ處
ス

第三百九十三條 遺贈物ハ其遺言ノ單純ナルト
キハ當然ノ附從物ト共ニ遺言者ノ死亡ノ時ニ
於ケル現狀ニテ之ヲ引渡ス可シ其遺言ノ有期
又ハ未必條件附ナルトキハ引渡ヲ請求スチコ
トヲ得ヘキ時ニ於ケル現狀ニテ之ヲ引渡ス可
シ

相續人カ遺贈物ニ加ヘタル改良又ハ毀損ハ相
續人ト受遺者トノ間相互ニ賠償ヲ請求スル權
利ヲ生ス
解除ノ未必條件ヲ以テ遺贈ヲ爲シタル場合ニ
於テ其條件ノ成就シタルトキハ受遺者又ハ其
相續人ヨリ遺贈物ヲ現狀ニテ返還ス可シ但人
爲ニ因ル改良又ハ毀損ニ付キ雙方ノ間ニ於ケ
ル相互ノ賠償ヲ妨ケス

第三百九十四條 遺贈者カ遺贈ノ後ニ取得シタ
ル土地又ハ建物ハ遺贈ノ不動産ニ接著シ又ハ
其不動産ノ利用ヲ改良スル爲メニ供ヘタルモ
ト雖モ其不動産ノ受遺者ヲ利セズ

第三百九十六條 遺言ノ執行及ヒ遺贈物ノ引渡
ニ關スル費用ハ相續財産ノ負擔トス但貯存財
産ニ負擔セシムルコトヲ得ス
第三百九十七條 不動産物權ノ遺贈ハ遺言者ノ
死亡ノ後受遺者カ其遺贈ヲ知リタル時ヨリ三
十日内ニ之ヲ登記シタルニ非サレハ遺言者ノ
死亡ノ日ニ遡リテ第三者ニ抗對スルコトヲ得
ス
登記ノ費用ハ受遺者ノ負擔トス

第三百九十八條 遺贈者ハ合意又ハ遺贈ヲ以テ
遺贈ノ執行ヲ一人又ハ數人ニ委託スルコトヲ
得

得

遺言執行者ハ代理人ノ普通義務ニ服ス

第五款 遺言ノ廢罷及ヒ失效

第三百九十九條 遺言ハ遺言者隨意ニ之ヲ廢罷スルコトヲ得廢罷ハ明示又ハ默示ヲ以テ之ニ爲スコトヲ得

第四百條 遺言者カ遺言ノ方式ニ從ヒ遺言ノ全部又ハ一分ヲ廢罷スル意思ヲ證書ニ記載シタルトキハ其廢罷ハ明示ノモノトス

第四百一條 後ノ遺言ヲ以テ前ノ遺言ニ包含スル特定物ヲ處分シタルトキハ其物ニ付テハ前ノ遺言ヲ默示ニテ廢罷シタルモノトス
遺言者カ生存中遺言ニ包含スル特定物ヲ有償又ハ無償ニテ處分シタルトキモ亦同シ

第四百二條 廢罷ニ歸シタル遺言ハ前條ノ處分ノ無効ト爲ルトキト雖モ有效ニ復セズ

第四百三條 遺言ハ受遺者ノ條件不履行ノ爲メ又ハ遺言者ヲ死ニ致シタル原因ノ爲メ相續人

二十

ヨリ廢罷ヲ請求スルコトヲ得

第四百四條 遺言ハ方式上完全ノモノト雖モ左ノ場合ニ於テハ其效ヲ失フ

第一 受遺者カ遺言者ヨリ先ニ死亡シタルトキ

第二 停止條件附ノ遺言ニ付キ其條件ノ成就前ニ受遺者ノ死亡シタルトキ

第四百五條 廢罷又ハ失效ニ歸シタル遺言ノ部分ニ付テハ曾テ遺言アラサリシモノト看做ス但遺言者カ明示ヲ以テ其部分ヲ利得ス可キ者ヲ指定シタルトキハ此限ニ在ラス

第五節 包括ノ贈與又ハ遺贈ニ基ク不
分財產ノ分割

第四百六條 包括ノ贈與又ハ遺贈ヲ爲シタルニ因リ贈與者又ハ相續人ト受贈者又ハ受遺者トノ間ニ不分別財產ヲ生シタルトキハ下ノ規定ニ從ヒ之ヲ分割ス受贈者又ハ受遺者數人アルトキモ亦同シ

第一款 分割

第四百七條 不分別財產ノ所有者ノ各自ハ其財產ノ分割ヲ要求スルコトヲ得但財產編第三十九條ノ規定ニ從ヒテ分割セサルコトヲ約シタルトキハ此限ニ在ラス

第四百八條 分割ハ明示ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ要ス財產ヲ區別シテ收益スル事實ハ分割トセズ

第四百九條 不分別財產ノ分割ハ所有者各自ノ合意ヲ以テ自由ニ之ヲ爲スコトヲ得然レトモ左ノ場合ニ於テハ裁判ヲ以テスルニ非サレハ其分割ヲ爲スコトヲ得ズ

第一 所有者中ニ未成年者、禁治產者又ハ瘋癲者アリテ其後見人又ハ假管理人アラサルトキ

第二 所有者中ニ不在者アリテ有效ニ分割ヲ承諾スル權限ヲ有スル合意上ノ代理人アラサルトキ

第三 所有者中ニ合意上ノ分割ヲ承諾セサル者アルトキ

第四百十條 裁判上ノ分割ヲ要スルトキハ相續地ノ區裁判所ハ相續人、債權者又ハ檢事ノ請求ニ因リ封印ヲ爲シ及ヒ目錄ヲ作ラシム可シ

第四百十一條 裁判上ノ分割ヲ要セサルトキト雖モ債權者ハ區裁判所ノ許可ヲ得テ封印及ヒ目錄調製ヲ請求スルコトヲ得但執行力アル證書ヲ有スルトキハ此許可ヲ要セズ

封印ノ除去ニ付テハ總テノ債權者異議ヲ述フルコトヲ得

第四百十二條 所有者ノ各自ハ不分別財產ノ現物ニテ其部分ノ引渡ヲ要求スルコトヲ得但債權者其引渡ヲ差押ヘタルトキ又ハ所有者ノ多數ヲ以テ其財產ノ負擔スル債務及ヒ費用ヲ豫メ辨濟スル爲メ賣却ヲ必要ト決シタルトキハ此限ニ在ラス

第四百十三條 未成年者、禁治產者、瘋癲者又ハ

二十一

不在者ノ爲メ定メタル規則ニ違ヘル分割ハ其者ノ利益ニ於テノミ假定ノモノトス

第四百十四條 分割ノ際利益ノ相反スル無能力者又ハ不在者ノ數人アルトキハ其各自ノ爲メ臨時保佐人又ハ管理人ヲ指定ス可シ

第四百十五條 分割ノ結了シタルトキハ各所有者ハ其領收シタル物ノ證書ヲ保有ス

所有者ノ總體又ハ數人ニ分割シタル一箇ノ物ノ證書ハ其最大ノ部分ヲ領收シタル者之ヲ保有ス最大ノ部分ヲ領收シタル者ヲキトキハ各所有者ノ協議ヲ以テ其保有者ヲ定ム若シ協議ハサルトキハ裁判所之ヲ指定ス

何レノ場合ニ於テモ證書ノ保有者ハ他ノ所有者ノ求メニ應シテ之ヲ使用セシム可シ

第四百十六條 所有者ハ各自ニ受クル部分ノ割合ヲ以テ債務ヲ分擔ス

第四百十七條 分割ノ效力ニ付テハ第五百五十五條ノ規定ヲ適用ス

第四百十八條 各所有者ハ分割前ノ原因ニ基ク分割物ノ妨礙及ヒ追奪ニ付キ互ニ擔保ノ責任ニ但別段ノ合意ヲ以テ擔保ヲ免除シタルトキハ此限ニ在ラス

第四百十九條 債權ニ付テハ分割ノ當時ニ於ケル債務者ノ資力ノ限度マテニ非サレハ各所有者擔保ノ責ニ任セス

第四百二十條 分割ハ財產編第三百四條以下ニ定メタル區別ニ從ヒ不成立又ハ無効タル外尙所有者ノ一人カ其領收シタル部分ニ付キ四分一以上ノ缺損ヲ被フリタルトキハ其缺損ノ爲メ之ヲ銷除スルコトヲ得

缺損ノ査定ハ分割ノ時ニ於ケル物ノ價格ニ從ヒテ之ヲ爲ス可シ

第四百二十一條 分割銷除ノ訴權ハ財產編第五百四十四條以下ニ定メタル時効及ヒ認諾ニ因

リ消滅ス

第十五章 夫婦財產契約

第一節 總則

第四百二十二條 夫婦財產契約ハ婚姻ノ儀式前ニ之ヲ爲シ及ヒ公證人ヲシテ其證書ヲ作ラシムルニ非サレハ成立セス

婚姻ノ儀式後ハ契約ヲ變更スルコトヲ得ス

第四百二十三條 婚姻ヲ爲スコトヲ得ル未成年者ハ婚姻ノ許諾ヲ與フ可キ尊屬親又ハ後見人ノ立會ニテ財產契約ヲ爲スコトヲ得

第四百二十四條 財產契約ヲ爲サスシテ婚姻ヲ爲シタルトキハ財產ノ關係ハ法定ノ制ニ從フ

第四百二十五條 日本ニ於テ財產契約ヲ爲サスシテ婚姻ヲ爲シタル外國人ハ夫タル者ノ本國ニ行ハルル普通ノ制ニ從ヒタルモノト看做ス

第二節 法定ノ制

第四百二十六條 婦又ハ入夫カ婚姻ノ儀式ノ時ニ於テ現ニ所有シ又ハ將來ニ所有ス可キ特有

條ノ規定ヲ適用ス

第四百二十七條 夫又ハ入夫ハ主タル婦カ配偶者ノ特有財產ニ付テ有スル權利ハ用益者ノ權利ニ同シ

又配偶者ノ特有財產ニ關シテ收益ヲ爲ス夫又ハ主タル婦ハ用益者ノ負擔スル修繕其他收益ヲ以テ辨濟ス可キ義務ヲ負フ

第四百二十八條 夫ハ婦ノ特有財產入夫ハ主タル婦ノ財產ヲ管理ス

第四百二十九條 夫又ハ入夫ハ婦又ハ主タル婦ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ婦ノ特有財產又ハ主タル婦ノ財產ヲ讓渡シ又ハ之ヲ擔保ニ供スルコトヲ得ス但人事編第二百二十九條及ヒ

第二百七十五條ノ場合ハ此限ニ在ラス

第四百三十條 入夫ハ主タル婦ノ承諾ヲ得ル

財產ヨリ婚姻中ニ生スル果實及ヒ自己ノ勞力ニ因リ婚姻中ニ得タル所得ハ婚姻中ノ費用分擔ノ爲メ之ヲ配偶者ニ作出シタルモノト看做ス

第四百二十七條 夫又ハ入夫ハ主タル婦カ配偶者ノ特有財產ニ付テ有スル權利ハ用益者ノ權利ニ同シ

又配偶者ノ特有財產ニ關シテ收益ヲ爲ス夫又ハ主タル婦ハ用益者ノ負擔スル修繕其他收益ヲ以テ辨濟ス可キ義務ヲ負フ

第四百二十八條 夫ハ婦ノ特有財產入夫ハ主タル婦ノ財產ヲ管理ス

第四百二十九條 夫又ハ入夫ハ婦又ハ主タル婦ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ婦ノ特有財產又ハ主タル婦ノ財產ヲ讓渡シ又ハ之ヲ擔保ニ供スルコトヲ得ス但人事編第二百二十九條及ヒ

第二百七十五條ノ場合ハ此限ニ在ラス

第四百三十條 入夫ハ主タル婦ノ承諾ヲ得ル

ニ非サレハ婚姻中ノ所得ヲ讓渡シ又ハ之ヲ擔保ニ供スルコトヲ得ス但其特有財産ヨリ生スル果實及ヒ自己ノ勞力ニ因リテ得タル所得ハ此限ニ在ラス

第四百三十一條 夫カ婦ノ特有財産ニ付キ入夫カ戸主タル婦ノ財産ニ付キ其承諾ヲ得スシテ爲ス貸借借ニ關シテハ財産編第百十九條以下ノ規定ヲ適用ス

第四百三十二條 管理ノ失當ニ因リ夫又ハ入夫カ婦ノ特有財産又ハ戸主タル婦ハ財産ヲ危險ニ置クトキハ婦又ハ戸主タル婦ハ自ラ其財産ヲ管理セント請求スルコトヲ得

第四百三十三條 婦又ハ入夫カ婚姻ノ儀式ノ時ニ於テ負ヘル債務及ヒ婚姻中ニ生スル債務ニ付テハ債權者ハ婦又ハ入夫ノ特有財産ニ對シ

テ權利ヲ行フコトヲ得

第四百三十四條 婦ノ名ヲ以テ生セシメタル債務ニ付テハ債權者ハ其債務カ家事管理ノ爲メニ生シタルコトヲ證スルトキコ限リ夫ニ對シテ其ノ辨濟ヲ請求スルコトヲ得

入夫ノ名ヲ以テ生セシメタル債務ニ付テハ債權者ハ其債務ノ財産管理ノ爲メニ生シタルコトヲ證スルトキコ限リ戸主タル婦ニ對シテ其辨濟ヲ請求スルコトヲ得

第四百三十五條 婦又ハ入夫ノ特有財産タルコトヲ證セサル財産ハ總テ夫又ハ戸主タル婦ニスルモノト看做ス

民法人事編目錄

第一章 私權ノ享有及ヒ行使

第二章 國民分限

第一節 國民分限ノ取得

第二節 國民分限ノ喪失及ヒ回復

第三節 國民分限變更ノ方式及ヒ效力

第三章 親屬及ヒ姻屬

第四章 婚姻

第一節 婚姻ヲ爲スニ必要ナル條件

第二節 婚姻ノ儀式

第三節 日本人外國ニ於テ爲シ及ヒ外國人日本ニ於テ爲ス婚姻

第四節 婚姻成立ノ證據

第五節 婚姻ノ不成立及ヒ無効

第六節 婚姻ノ效力

第七節 罰則

第五章 離婚

第一節 協議ノ離婚

第二節 特定原因ノ離婚

第一款 離婚及ヒ不受理ノ原因

第二款 假處分

第三款 離婚ノ訴

第三節 離婚ノ效力

第六章 親子

第一節 親子ノ分限ノ證據

第二節 否認訴權

第三節 庶子及ヒ私生子ノ適出子ト爲ル權

第七章 養子縁組

第一節 養子縁組ニ必要ナル條件

第二節 養子縁組ノ儀式

第三節 養子縁組ノ證據

第四節 養子縁組ノ不成立及ヒ無効

第五節 養子縁組ノ效力

第六節 罰則

第八章 養子ノ離縁

- 第一節 協議ノ離縁
- 第二節 特定原因ノ離縁
- 第三節 離縁ノ効力
- 第九章 親權
- 第一節 子ノ身上ニ對スル權
- 第二節 子ノ財産ノ管理
- 第三節 嫡母繼父及ヒ繼母ニ特別ナル規則
- 第十章 後見
- 總則
- 第一節 後見人
- 第二節 後見監督人
- 第三節 親族會
- 第四節 後見ノ免除
- 第五節 後見人及ヒ親族會員ノ缺格除斥及ヒ罷黜
- 第六節 後見人ノ管理
- 第七節 後見監督人ノ任務

- 第八節 後見ノ終了
- 第九節 後見ノ計算
- 第十一章 自治産
- 第十二章 禁治産
- 第一節 民事上禁治産
- 第二節 准禁治産
- 第三節 刑事上禁治産
- 第四節 癡癲者ノ財産ノ假管理
- 第十三章 戸主及ヒ家族
- 第十四章 住所
- 第十五章 失踪
- 第一節 失踪ノ推定
- 第二節 失踪ノ宣言
- 第三節 失踪宣言ノ効力
- 第四節 失踪ノ推定及宣言ニ關スル規則
- 第五節 不在者ニ關スル規則
- 第十六章 身分ニ關スル證書

民法

人事編

- 第一章 私權ノ享有及ヒ行使
- 第一條 凡ソ人ハ私權ヲ享有シ法律ニ定メタル無能力者ニ非サル限リハ自ラ其私權ヲ行使スルコトヲ得
- 第二條 胎内ノ子ト雖モ其利益ヲ保護スルニ付テハ既ニ生レタル者ト看做ス
- 第三條 私權ノ行使ニ關スル成年ハ滿二十年トス但法律ニ特別ノ規定アルトキハ此限ニ在ラズ
- 第四條 外國人ハ法律又ハ條約ニ禁止アルモノヲ除ク外私權ヲ享有ス
- 第五條 法人ハ公私ヲ問ハズ法律ノ認許スルニ非サレハ成立スルコトヲ得ズ
- 又法律ノ規定ニ從フニ非サレハ私權ヲ享有スルコトヲ得ズ
- 第六條 法律ハ外國法人ノ成立ヲ認許セス但條

約又ハ特許アルトキハ此限ニ在ラス
成立ノ認許ヲ得タル外國法人ハ日本ニ成立スル同種ノ者ト同一ノ私權ヲ享有ス但條約中又ハ特許中ニ其權利ヲ制限シタルトキハ此限ニ在ラス

第二章 國民分限

- 第一節 國民分限ノ取得
- 第七條 日本人ノ子ハ外國ニ於テ生マレタルトキト雖モ日本人トス
- 又母分限ヲ異ニスルトキハ父ノ分限ヲ以テ子ノ分限ヲ定ム
- 父ノ知レサルキハ子ハ母ノ分限ニ從フ
- 父母共ニ知レサルトキハ日本ニ於テ生マレタル子ハ日本人トス若シ其出生地ノ知レサルトキハ現ニ日本國內ニ在ル者ハ日本人トス
- 第八條 左ノ場合中ノ一ニ在ル子ハ日本人ノ分限ヲ選擇スルコトヲ得
- 第一 父カ外國人タルモ母ノ日本人タルト

第二 外國人ノ子タルモ日本ニ生マレタル
トキ

第三 日本人ノ分限ヲ失ヒタル者ノ子ニシ
テ其分限喪失ノ後ニ生マレタル者ナルト
キ

第四 歸化人ノ子ニシテ成年者ナルトキ

第九條 日本人分限ヲ選擇セント欲スル子ハ本
國法律ニ從ヒテ成年ニ至リシ時ヨリ一个年内
ニ其意思ヲ申述シ且其申述ヨリ一个年内ニ住
所ヲ日本ニ定ム可シ

成年ノ後ニ至リテ外國人ノ認知シタル私出子
ハ認知ヨリ又歸化人ノ子ハ歸化ヨリ一个年内
ニ右ノ申述ヲ爲スコトヲ得

第十條 日本人ト婚姻スル外國ノ女ハ日本人ノ
分限ヲ取得シ婚姻解消ノ後ト雖モ其分限ヲ保
有ス

第十一條 外國人ハ歸化ニ因リテ日本人ノ分限

ヲ取得スルコトヲ得其條件及ヒ方式ハ特別法
ヲ以テ之ヲ規定ス

歸化人ノ婦及ヒ未成年ノ子ハ日本ニ住居ヲ定
メタルトキハ日本人ノ分限ヲ取得ス

第二節 國民分限ノ喪失及ヒ回復

第十二條 日本人ハ左ノ場合ニ於テ其分限ヲ失
フ

第一 任意ニ外國人ノ分限ヲ取得シタルト
キ

第二 日本政府ノ允許ナクシテ外國政府ノ
官職ヲ受ケ又ハ外國ノ軍隊ニ入りタルト
キ

第十三條 前條ノ場合ニ於テ日本人ノ分限ヲ失
ヒタル者其分限ヲ回復セント欲スルトキハ日
本政府ノ允許ヲ得タル上歸國シテ其意思ヲ申
述シ且一个年内ニ住所ヲ日本ニ定ムルキハ其
分限ヲ回復ス

第十四條 日本人ノ分限ヲ失ヒタル者ノ婦及ヒ

未成年ノ子ハ引續キ日本ニ住居スルニ非サレ
ハ日本人ノ分限ヲ失フ但婦ハ第十五條第二項
ノ規定ニ從ヒ又未成年ノ子ハ第九條第一項ノ
規定ニ從ヒ其分限ヲ回復スルコトヲ得

第十五條 外國人ト婚姻スル日本ノ女ハ日本人
ノ分限ヲ失フ

然レトモ婚姻解消ノ後日本ニ住居シ又ハ復歸
シ且日本ニ住所ヲ定ムルコトヲ申述スルトキ
ハ其分限ヲ回復ス

第三節 國民分限變更ノ方式及ヒ効力

第十六條 國民分限ノ變更ニ關スル申述ハ日本
ニ在リテハ住居地ノ身分取扱吏ニ外國ニ在リ
テハ日本公使館又ハ日本領事館ニ之ヲ爲ス可
シ

此申述ハ部理代理人ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第十七條 國民分限ノ變更ハ將來ニ非サレハ其
効力ヲ生セス

第十八條 國民分限ハ出生ノ時ヲ以テ之ヲ定ム

然レトモ懷胎ヨリ出生マテノ間父又ハ母ノ分
限ニ變更アリタルトキハ子ハ日本ニ住居スル
場合ニ限り日本人ノ分限ヲ保有ス

第三章 親屬及ヒ姻屬

第十九條 親屬トハ血統ノ相聯結スル者ノ關係
ヲ謂フ

六親等ノ外ハ親屬ノ關係アルモ民法上ノ効力
ヲ生セス

第二十條 親屬ノ遠近ハ世數ヲ以テ之ヲ定メ一
世ヲ以テ一親等トス

親等ノ連續スルヲ親系ト爲ス後ヨリ此ニ直下
スル者ノ親系ヲ直系ト謂フ其直下セズシテ同
始祖ニ出ツル者ノ親系ヲ傍系ト謂フ

直系ニ於テ自己ノ出ツル所ノ親族ヲ尊屬親ト
謂ヒ自己ヨリ出ツル所ノ親族ヲ卑屬親ト謂フ

第二十一條 直系ニ於テハ親族ノ世數ヲ算シテ
親等ヲ定ム

傍系ニ於テハ親族ノ一人ヨリ同始祖ニ遡リ又

其始祖ヨリ他ノ一人ニ下タル其間ノ世數ヲ算シテ親等ヲ定ム

第二十二條 養子縁組ハ養子ト養父母及ヒ其親族トノ間ニ親屬ニ同シキ關係ヲ生ス但養子トハ男女ヲ總稱ス

第二十三條 嫡母、繼父又ハ繼母ト其配偶者ノ子トノ關係ハ親子ニ準ス

第二十四條 姻屬トハ婚姻ニ因リテ夫婦ノ一方ト其配偶者ノ親族トノ間ニ生スル關係ヲ謂フ然レトモ婦ノ夫家ニ於ケル又入夫ノ婦家ニ於ケル尊屬親トノ關係ハ親屬ニ準ス

第二十五條 夫婦ノ一方ノ親族ハ其親系及ヒ親等ニ於テ配偶者ノ親族トス姻屬ノ關係ハ婚姻無効ノ判決又ハ離婚ニ因リテ止ム又生存配偶者其家ヲ去ルニ因リテ止ム

第二十六條 直系ノ親族ハ相互ニ養料ヲ給スル義務ヲ負擔ス
嫡母、繼父又ハ繼母ト其配偶者ノ子トノ間及

ヒ婦又ハ入夫ト夫家又ハ婦家ノ尊屬親トノ間モ亦同シ

第二十七條 兄弟姉妹ノ間ニハ疾病其他本人ノ責ニ歸セサル事故ニ因リテ自ラ生活スル能ハサル場合ニ限り相互ニ養料ヲ給スル義務アリ

第二十八條 養料ノ義務ヲ負擔ス可キ者ノ順位ハ左ノ如シ

第一 第二十六條ニ掲ケタル者
第二 兄弟姉妹
直系ノ親族ノ間ハ其親等ノ最モ近キ者養料ノ義務ヲ負擔ス

第二十九條 養料ハ之ヲ受ク可キ者ノ必需ト之ヲ給ス可キ者ノ資産トニ應シテ其額ヲ定ム

第四章 婚姻
第一節 婚姻ヲ爲スニ必要ナル條件

第三十條 男ハ滿十七年女ハ滿十五年ニ至ラサレハ婚姻ヲ爲スコトヲ得ス

第三十一條 配偶者アル者ハ重テ婚姻ヲ爲ス

コトヲ得ス

第三十二條 夫ノ失踪ニ原因スル離婚ノ場合ヲ除ク外女ハ前婚解消ノ後六个月内ニ再婚ヲ爲スコトヲ得ス

此制禁ハ其分婉シタル日ヨリ止ム

第三十三條 姦通ノ原因ニ由リテ離婚ノ裁判ヲ言渡サレタル曲者ハ相姦者ト婚姻ヲ爲スコトヲ得ス

第三十四條 直系ニ於テハ尊屬親ト卑屬親トノ間婚姻ヲ禁ス

第三十五條 傍系ニ於テハ兄弟姉妹及ヒ伯叔父姑甥姪ノ間婚姻ヲ禁ス

第三十六條 直系ノ親族ノ間ハ其關係ノ止ミタル後ト雖モ婚姻ヲ禁ス

第三十七條 養子ト養父母又ハ其尊屬親トノ間及ヒ養父母又ハ其尊屬親ト養子ノ配偶者又ハ其卑屬親トノ間ハ離縁ノ後ト雖モ婚姻ヲ禁ス

第三十八條 子ハ父母ノ許諾ヲ受クルニ非サレ

ハ婚姻ヲ爲スコトヲ得ス

父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ノ許諾ヲ以テ足ル

繼父又ハ繼母アル場合ニ於テ其配偶者タル母又ハ父ノ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ繼父又ハ繼母ノ許諾ヲ受ク可シ其許諾ニ付テハ第九章第三節ノ規定ヲ適用ス

第三十九條 父母共ニ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ其家ノ祖父母ノ許諾ヲ受ク可シ

祖父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ノ許諾ヲ以テ足ル

第四十條 父母、祖父母悉ク死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ滿二十年ニ至ラサル者ニ限り後見人ノ許諾ヲ受ク可シ

第四十一條 父母ノ知レサル子ハ二十年未滿ニ限り後見人ノ許諾ヲ受ク可シ

第四十二條 育兒院ニ在リテ父母ノ知レサル子

ノ婚姻ハ二十年未滿ニ限り院長ノ許諾ヲ受ク可シ

第二節 婚姻ノ儀式

第四十三條 婚姻ノ儀式ハ當事者ノ一方ノ住所又ハ居所ノ地ニ於テ之ヲ行フ可シ
雙方ハ婚姻ノ儀式ヲ行フ前ニ其地ノ身分取扱吏ニ婚姻ヲ爲サントスル申出ヲ爲スコトヲ要ス但此申出ハ代理人ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
第四十四條 雙方ハ前條ノ申出ヲ爲ス時ニ於テ左ノ書類ヲ差出タス可シ

第一 出生證書

第二 前婚ノ解消ヲ證スル證書

第三 婚姻ニ必要ナル許諾書又ハ其許諾ヲ得ル能ハサル事由ヲ證スル書類

第四十五條 雙方又ハ一方カ出生證書ヲ呈示スル能ハサルトキハ出生地住所又ハ居所ノ區裁判所ノ授付シタル保證書ヲ以テ出生證書ニ代用スルコトヲ得

保證書ハ男女ヲ問ハス又親族ト否トヲ問ハス證人二人カ左ノ諸件ニ付區裁判所ニ爲シタル申述ヲ記載ス

第一 本人ノ氏名、職業、住所及ヒ居所并ニ其父母分明ナルトキハ其氏名、職業、住所及ヒ居所

第二 本人ノ出生ノ地及ヒ年月日

第三 本人ノ出生證書ヲ呈示スル能ハサル原因及ヒ證人ノ其事實ヲ聞知シタル緣由

第四十六條 身分取扱吏ハ婚姻ノ儀式ヲ行フ障礙ト爲ル可キ法律上ノ原因アルコトヲ知リタルトキハ其儀式ヲ行フコトヲ差止ム可シ
此場合ニ於テハ身分取扱吏ハ理由ヲ記シタル差止書ヲ授付ス可シ

當事者此差止ヲ不當ナリト思料スルトキハ區裁判所ニ抗告シテ其取消ヲ求ムルコトヲ得
裁判所ハ休暇事件ト同シク之ヲ取扱フ可シ

第四十七條 婚姻ハ證人二人ノ立會ヲ得テ慣習

ニ從ヒ其儀式ヲ行フニ因リテ成ル當事者ノ承諾ハ此儀式ヲ行フニ因リテ成立ス

第四十八條 婚姻ノ儀式ハ其申出ノ日ヨリ三日後三十日內ニ之ヲ行フコトヲ要ス

第四十九條 婚ノ儀式ヲ行ヒタルトキハ雙方ヨリ十日內ニ身分取扱吏ニ其届出ヲ爲スコシ但此届出ハ代理人ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第三節 日本人外國ニ於テ爲シ及ヒ外國人日本ニ於テ爲ス婚姻

第五十條 外國ニ於テ日本人ノ間又ハ日本人ト外國人トノ間ニ婚姻ヲ爲ストキハ其國ノ規則ニ從ヒテ儀式ヲ行フコトヲ得但本章第一節ニ定メタル條件ニ違背セサルコトヲ要ス

第五十一條 外國ニ於テ日本人ノ間ニ日本ノ規則ニ從ヒテ婚姻ヲ爲ストキハ其國ニ在ル日本公使館又ハ日本領事館ニ婚姻ノ申出ヲ爲スコトヲ要ス

婚姻ノ儀式ヲ行ヒタルトキハ第四十九條ノ規

定ニ從ヒテ其届出ヲ爲スコシ

第五十二條 日本ニ於テ外國人カ婚姻ヲ爲サントスルトキハ其能力ハ本國ノ法律ニ從フ但第三十一條乃至第三十七條ノ條件ニ違背セサルコトヲ要ス

外國人ハ婚姻ノ申出ヲ爲ス時ニ於テ婚姻ヲ爲スニ障礙ナキコトヲ證スル本國相當官署ノ認定書ヲ差出タス可シ

第四節 婚姻成立ノ證據

第五十三條 婚姻成立ノ證據ハ婚姻證書ヲ以テ之ヲ舉ク可シ但第二百九十一條ニ規定スルモノハ此限ニ在ラス

第五十四條 婚姻證書ヲ増減シ毀棄シ隱匿シ又ハ片紙ニ記載シタル場合ニ於テ刑事又ハ民事ノ訴訟ニ因リテ婚姻ノ成立ヲ認メタル判決ハ之ヲ婚姻證書ニ代用スルコトヲ得

第五節 婚姻ノ不成立及ヒ無效

第五十五條 人違、喪心又ハ強暴ニ因リテ雙方

又ハ一方ノ承諾ヲ全ク欠缺シタル婚姻ハ不成立トス

第三十四條乃至第三十七條ノ規定ニ違ヒテ爲シタル婚姻モ亦不成立トス

婚姻ノ不成立ハ何人ニ限ラス何時ニテモ之ヲ申立ツルコトヲ得

第五十六條 第三十條、第三十一條及ヒ第三十三條ノ規定ニ違ヒテ婚姻ヲ爲シタルトキハ雙方、尊屬親又ハ現實ノ利益ヲ有スル者ヨリ何時ニテモ其無効ヲ請求スルコトヲ得

右同一ノ場合ニ於テ檢事ハ夫婦ノ生存中ニ限リ職權ヲ以テ婚姻ノ無効ヲ請求スルコトヲ得

第五十七條 不適應ニ付キ無効ヲ請求スル權利ハ左ノ場合ニ於テ消滅ス

第一 適齡ナラザリシ者カ適齡ニ至レル後

明示ニテ婚姻ヲ認諾シ又ハ三個月ヲ過キタルトキ

第二 無効ノ請求後ト雖モ婦カ適齡ナラス

三十四

シテ婦ノ懷胎シタルトキ

第三 夫カ適齡ナラスシテ婦ノ懷胎シタルトキ但婦ノ姦通ヲ證スルトキハ格別ナリトス

第五十八條 重婚ニ原因スル婚姻無効ノ請求アリタル場合ニ於テ後婚ノ雙方カ前婚ノ不成立、無効又ハ離婚ヲ主張スルトキハ先ツ其裁判ヲ爲ス可シ

前婚ノ配偶者カ失踪シタルトキハ其失踪中ハ重婚ノ無効訴權ヲ行フコトヲ得ス

第五十九條 左ノ場合ニ於テハ婚姻ハ無効トス

第一 身分取扱吏ニ婚姻ノ申出ヲ爲サス又ハ其差止ヲ受ケタルニ拘ハラズ儀式ヲ行ヒタルトキ

第二 身分取扱吏ノ管轄違ナルトキ

第三 第四十八條ノ規定ニ違ヒテ儀式ヲ行ヒタルトキ

第四 證人二人ノ立會ナクシテ儀式ヲ行ヒ

タルトキ

此無効ハ第五十六條ニ掲ケタル者ヨリ之ヲ請求スルコトヲ得但婚姻儀式後一箇年ヲ過キタルトキハ無効訴權ヲ行フコトヲ得ス

第六十條 第三十八條乃至第四十二條ニ定メタル許諾ナクシテ婚姻ヲ爲シタルトキハ其許諾

ヲ與フヘキ者又ハ之ヲ受ク可キ者ヨリ其無効ヲ請求スルコトヲ得

許諾アリタル場合ト雖モ其許諾カ強暴ニ原因シタルトキモ亦同シ

第六十一條 前條ノ場合ニ於テ婚姻ノ許諾ヲ與フ可キ者カ婚姻ヲ認諾セズシテ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ法律ニ定メタル順位ニ從ヒテ其許諾ヲ與フ可キ者ハ無効訴權ヲ行フコトヲ得

第六十二條 第六十條ニ掲ケタル無効訴權ハ左ノ場合ニ於テ消滅ス

第一 婚姻ノ許諾ヲ與フ可キ者カ認諾ヲ爲

シ又ハ婚姻アリタルコトヲ知リシ後三個月ヲ過キタルトキ

第二 三個月内ト雖モ許諾ヲ受ク可キ者カ婚姻上ノ成年ニ至リ又ハ死亡シタルトキ

第六十三條 強暴ニ因リテ承諾ニ瑕疵アル婚姻ノ無効ハ強暴ヲ受ケタル者ニ限り之ヲ請求スルコトヲ得

第六十四條 前條ノ場合ニ於テ配偶者強暴ヲ免カレタル後明示ニテ認諾シ又ハ三個月間引續キ同居シタルトキハ婚姻ノ無効ヲ請求スルコトヲ得ス其同居セサル場合ニ於テモ無効訴權ハ一箇年ヲ以テ消滅ス

第六十五條 裁判所ハ婚姻ノ不成立又ハ無効ノ訴訟中夫婦ノ一方ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ婦又ハ夫ニ住家ヲ去ル可キヲ命スルコトヲ得

第六十六條 無効ノ言渡アリタル婚姻ハ子ニ付テハ其出生ノ婚姻前後ナルヲ問ハズ法律上ノ

效力ヲ生ス

第六節 婚姻ノ效力

第六十七條 婚姻ハ其儀式ヲ行ヒタル日ヨリ效力ヲ生ス但夫婦財産契約ニ付テハ婚姻ノ届出後ニ非サレハ第三者ニ對シテ婚姻ノ效力ヲ援用スルコトヲ得ス

第六十八條 婦ハ夫ノ許可ヲ得ルニ非サレハ贈與ヲ爲シ之ヲ受諾シ不動産ヲ讓渡シ之ヲ擔保ニ供シ借財ヲ爲シ債權ヲ讓渡シ之ヲ質入シ元本ヲ領收シ保證ヲ約シ及ヒ身體ニ羈絆ヲ受クル約束ヲ爲スコトヲ得ヌ又和解ヲ爲シ仲裁ヲ受ケ及ヒ訴訟ヲ起スコトヲ得ス

第六十九條 夫ノ許可ハ特定又ハ總括ナルコトヲ得但總括ノ許可ハ證書ヲ以テ之ヲ與フルコトヲ要ス
夫ハ夫婦財産契約ニ依リテ與ヘタル總括ノ許可ト雖モ之ヲ廢罷スルコトヲ得

第七十條 左ノ場合ニ於テハ婦ハ夫ノ許可ヲ得
除訴權ニ之ヲ適用ス

第七節 罰則

第七十四條 婚姻申出ノ時ニ必要ノ書類ヲ差出タサシメサル身分取扱吏ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ過料ニ處ス

第七十五條 婚姻ノ不成立又ハ無効タル可キ法律上ノ原因アルヲ知リテ其儀式ヲ行フコトヲ差止メサル身分取扱吏ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第七十六條 第三十二條ノ制禁ニ違背シテ再婚ヲ爲シタル婦ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス其情ヲ知リテ婚姻ヲ爲シタル夫及ヒ婚姻ノ儀式ヲ行フコトヲ差止メサル身分取扱吏モ亦同シ

第七十七條 夫婦ノ一方ニシテ婚姻ノ無効ヲ致シタル原因ヲ知り之ヲ他ノ一方ニ隱秘シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五章 離婚

ルコトヲ要セス

第一 夫カ失踪ノ推定ヲ受ケタルトキ

第二 夫カ禁治産又ハ准禁治産ヲ受ケタルトキ

第三 夫カ瘋癲ノ爲メ病院又ハ監置ニ在ルトキ

第七十一條 夫ハ婦ニ與ヘタル許可ニ因リテ義務ヲ負擔セス

七十二條 夫ノ許可ヲ得ヌシテ婦ノ爲シタル行爲ハ之ヲ銷除スルコトヲ得

此銷除ハ夫婦ノ各自及ヒ婦ノ承繼人ニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第七十三條 夫ニ屬スル銷除訴權ハ其銷除シ得ヘキ行爲ヲ知リタル日ヨリ五午年ノ時効ニ因リ又ハ婚姻ノ解消ニ因リテ消滅ス

婦及ヒ其承繼ニ屬スル銷除訴權ハ婚姻解消ノ日ヨリ五午年ノ時効ニ因リテ消滅ス
財産編第五百四十四條以下ノ規定ハ本條ノ銷

第一節 協議ノ離婚

第七十八條 夫婦ハ下ニ定メタル條件及ヒ方式ニ從ヒ協議ヲ以テ離婚ヲ爲スコトヲ得

第七十九條 離婚セントスル夫婦ハ婚姻許諾ノ爲メ第四章第一節ニ定メタル規則ニ從ヒ各其父母、祖父母又ハ後見人ノ許諾ヲ受クルコトヲ要ス

第八十條 夫婦ハ離婚協議書ニ左ノ書類ヲ添ヘテ身分取扱吏ニ届出ツ可シ

第一 婚姻證書

第二 離婚ノ許諾ヲ與フ可キ者ノ許諾書若シ其者死亡シ又ハ意思ヲ表スル能ハサルトキハ死亡證書又ハ其事由ヲ證スル書類

第二節 特定原因ノ離婚

第一款 離婚及ヒ不受理ノ原因

第八十一條 離婚ハ左ノ原因アルニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第一 姦通但夫ノ姦通ハ刑ニ處セラレタル

場合ニ限ル

第二 同居ニ堪ヘサル暴虐、脅迫及ヒ重大ノ侮辱

第三 重罪ニ因レル處刑

第四 竊盜、詐欺取財又ハ猥褻ノ罪ニ因レル重禁錮一年以上ノ處刑

第五 惡意ノ遺棄

第六 失踪ノ宣言

第七 婦又ハ入夫ヨリ其家ノ尊屬親ニ對シ又ハ尊屬親ヨリ婦又ハ入夫ニ對スル暴虐、脅迫及ヒ重大ノ侮辱

第八十二條 離婚ノ請求ヲ爲ス一方ニ對シテ離婚ノ原因存スルトキハ他ノ一方モ反訴ヲ以テ離婚ヲ請求スルコトヲ得
然レトモ前條第三號及ヒ第四號ニ記載スル重罪又ハ輕罪ノ刑ニ處セラレタル一方ハ他ノ一方ノ處刑ヲ原因トシテ離婚ヲ請求スルコトヲ得ス

第二款 假處分

第八十三條 離婚ノ訴訟中子ノ監護ハ原告又ハ被告タルヲ問ハス夫ニ屬ス但入夫及ヒ婿養子ニ付テハ婦ニ屬ス

然レトモ裁判所ハ夫、婦、親族又ハ檢事ノ請求ニ因リ子ノ利益ヲ慮リテ其監護ヲ他ノ一方又ハ第三者ニ命スルコトヲ得

第八十四條 離婚ノ訴訟中婦ハ原告又ハ被告タルヲ問ハス裁判所ノ許可ヲ得テ住家ヲ去ルコトヲ得此場合ニ於テハ自己ノ衣服其他ノ日用物品ヲ持去リ且必要アルトキハ養料ヲ請求スルコトヲ得

裁判所ハ夫ノ意見ヲ聽キテ婦ノ移居ス可キ家屋ヲ指示スルコトヲ要ス若シ婦カ正當ノ理由ナクシテ其家屋ヲ去ルトキハ夫ハ養料ヲ拒ムコトヲ得

第八十五條 入夫及ヒ婿養子ニ付テハ裁判所ハ離婚ノ訴訟中夫ヲシテ住家ヲ去ラシムルコト

ヲ得此場合ニ於テハ前條第一項ノ規定ヲ適用ス

第八十六條 裁判所ハ住家ヲ去ル婦又ハ夫ノ請求ニ因リ其財産ヲ保存スル爲メニ必要ナル處分ヲ命スルコトヲ得

第三款 離婚ノ訴

第八十七條 離婚ヲ請求スル訴權ハ夫婦ノミニ屬ス

第八十八條 離婚ノ原因ハ通常ノ證據方法ヲ以テ之ヲ證ス可シ但シ自白ノミヲ以テ之ヲ證スルコトヲ得ス又卑屬親ヲ除ク外親族、姻族又ハ雇人ニ關スル忌避ノ規定ヲ適用セス

第三節 離婚ノ效力

第八十九條 離婚ハ其届出又ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ效力ヲ生セス

第九十條 離婚ノ後子ノ監護ハ夫ニ屬ス但シ入夫及ヒ婿養子ニ付テハ婦ニ屬ス
然レモ裁判所ハ夫、婦、親族又ハ檢事ノ請求ニ

因リ子ノ利益ヲ慮リテ之ヲ他ノ一方又ハ第三者ノ監護ニ付スルコトヲ得

第六章 親子

第一節 親子ノ分限ノ證據

第九十一條 婚姻中ニ懷胎シタル子ハ夫ノ子トス

婚姻ノ儀式ヨリ百八十日後又ハ夫ノ死亡若クハ離婚ヨリ三百日內ニ生マレタル子ハ婚姻中ニ懷胎シタルモノト推定ス

第九十二條 嫡出子ハ出生證書ヲ以テ之ヲ證ス

第九十三條 出生證書ヲ呈示スル能ハサルトキハ親子ノ分限ハ嫡出子タル身分ノ占有ヲ以テ之ヲ證スルコトヲ得但第二百九十一條ノ規定ノ適用ヲ妨ケス

第九十四條 身分ノ占有トハ夫婦ト其婚姻ニ因リテ生マレタリト主張スル者トノ間其者ノ出生ノ時ヨリ親子ノ分限ヲ證スルニ足ル可キ事實ノ湊合スルヲ謂フ其實著明ナルモノ左

ノ如シ

第一 子ナリト主張スル者カ常ニ其父ナリト

スル者ハ氏ヲ稱シタルコト

第二 子ナリト主張スル者カ常ニ其父母ナリ

トスル者ヨリ嫡出子ノ如ク取扱ハレ其養育、教育ヲ受ケタルコト

第三 子ナリト主張スル者カ常ニ親族及ヒ世

上ニ於テ嫡出子ト認メラレタルコト

第九十五條 庶子ハ父ノ届出ニ基ク出生證書ヲ

以テ之ヲ證ス但身分ノ占有ニ關スル規定ヲ適用ス

第九十六條 父ノ知レサル子ハ私生子トス

第九十七條 私生子ハ出生證書ヲ以テ之ヲ證ス

但身分ノ占有ニ關スル規定ヲ適用ス

第九十八條 私生子ハ父之ヲ認知スルニ因リテ

庶子ト爲ル

第九十九條 庶子ノ出生届及ヒ認知ハ父自ラ身

分取扱更ニ之ヲ爲スコトヲ要ス未成年者ト雖

モ自ラ之ヲ爲スコトヲ得

第二節 否認訴權

第一百條 否認訴權ハ夫ノミニ屬ス但子ノ出生後

ニ非サレハ之ヲ行フコトヲ得ス

第一百一條 夫カ民事上ノ禁治産ヲ受ケタルトキ

ハ後見人又ハ後見監督人ハ親族會ノ許可ヲ得

テ否認訴權ヲ行フコトヲ得

第一百二條 夫カ子ノ出生ノ場所ニ在ルトキハ出

生ヨリ三ヶ月ノ期間内ニ限リ否認訴權ヲ行フ

コトヲ得但夫カ婦ト住家ヲ異ニシ又ハ婦カ子ノ出生ヲ夫ニ隠秘シタルトキハ此期間ハ子ノ

出生ヲ知リタル日ヨリ起算ス

若シ夫カ遠隔ノ地ニ在ルトキハ訴權ノ期間ヲ

四ヶ月トシ子ノ出生ヲ知リタル日ヨリ起算ス

第三節 庶子及ヒ私生子ノ嫡出子ト爲ル

權

第一百三條 庶子ハ父母ノ婚姻ニ因リテ嫡出子ト

爲ル

私生子ハ父母ノ婚姻ノ後父ノ認知シタルニ因

リテ嫡出子ト爲ル

第一百四條 死亡シタル子ト雖モ前條ノ規定ニ依

リ嫡出子ト爲ル此場合ニ於テハ其效力ハ子ノ生ミタル子ヲ利ス

第一百五條 父母ノ婚姻ノ時マテニ父子ノ分限確

定シタル者ハ婚姻ノ日ヨリ又婚姻ノ後ニ確定シタル者ハ確定ノ日ヨリ嫡出子ノ權利ヲ有ス

第七章 養子縁組

第一節 養子縁組ニ必要ナル條件

第一百六條 何人ト雖モ養子ト爲ル可キ者ヨリ年

長ニシテ成年ナルニ非サレハ養子ト爲スコトヲ得ス

遺言ヲ爲ス能力アル者ハ遺言養子ト爲スコトヲ得

第一百七條 家督相續ヲ爲ス可キ男子アル者ハ養

子ト爲スコトヲ得ス

第一百八條 後見人ハ管理ノ計算ヲ爲ササル前ニ

被後見人ヲ養子ト爲スコトヲ得ス但遺言養子

ト爲スハ此限ニ在ラス

第一百九條 戸主ニ非サル者ハ養子ト爲スコトヲ

得ス但推定家督相續人ニシテ戸主ノ許諾ヲ得タル者ハ此限ニ在ラス

第一百十條 配偶者アル者ハ其配偶者ノ承諾ヲ得

ルニ非サレハ養子ト爲スコトヲ得ス但配偶者カ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ此限ニ在ラス

配偶者アル者ハ其配偶者ト一致スルニ非サレ

ハ養子ト爲ルコトヲ得ス

第一百一十一條 家督相續ニ因リテ戸主ト爲リタル

者ハ他人ノ養子ト爲ルコトヲ得ス

又推定家督相續人ハ他人ノ養子ト爲ルコトヲ得ス

然レトモ分家ヨリ本家ヲ承繼スル必要アルト

キハ本條ノ規定ヲ適用セス

第一百十二條 外國人ハ日本ノ養子ト爲ルコトヲ

得ス

第二節 養子縁組ノ儀式

第百十三條 養子縁組ハ當事者ノ承諾ニ因リテ成ル

此承諾ハ證人二人ノ立會ヲ得テ慣習ニ從ヒ縁組ノ儀式ヲ行フニ因リテ成立ス

縁組ノ儀式ヲ行フニ付テハ第四十三條、第四十六條及ヒ第四十八條ノ規定ヲ適用ス

第百十四條 當事者ハ身分取扱吏ニ縁組ノ申出ヲ爲ス時ニ於テ左ノ書類ヲ差出ス可シ

第一 養子ヲナス者及ヒ養子ト爲ル者ノ出生證書又ハ之ニ代用スル保證書

第二 家督相續ヲ爲ス可キ男子ナキコトヲ證スル身分取扱吏ノ認定書又ハ推定家督相續人廢除ノ證書

第三 配偶者ノ承諾書又ハ承諾ヲ得ル能ハサル事由ヲ證スル書類

第四 後見管理ノ計算ヲ爲シタル證明書

四十二

第五 縁組ニ必要ナル許諾書又ハ許諾ヲ得ル能ハサル事由ヲ證スル書類

第百十五條 滿十五年ニ至ラサル子ノ縁組ハ父母之ヲ承諾スルコトヲ得

父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ニ於テ縁組ヲ承諾スルコトヲ得

父母共ニ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ其家ノ祖父母若シ其一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ニ於テ縁組ヲ承諾スルコトヲ得

第百十六條 滿十五年ニ至リタル者ハ父母ノ許諾ヲ受ケテ縁組ヲ承諾スルコトヲ得

父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ其家ノ祖父母ノ許諾ヲ受ク可シ若シ祖父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ノ許諾ヲ以テ足ル

第百十七條 父母、祖父母悉ク死亡シ又ハ其意

思ヲ表スル能ハサルトキハ二十年未滿ノ者ニ限リ前二條ニ定メタル年齢ノ區別ニ從ヒ後見人之ヲ承諾シ又ハ其許諾ヲ與フ

第百十八條 私生子ノ養子縁組ニ付テハ母之ヲ承諾シ又ハ其許諾ヲ與フ

父母ノ知レサル子ニ付テハ前條ノ規定ヲ適用ス

第百十九條 前數條ノ場合ニ於テ繼父又ハ繼母アルトキハ第三十八條第三項ノ規定ヲ適用ス

第百二十條 育兒院ニ在リテ父母ノ知レサル子ノ縁組ハ二十年未滿ニ限リ第百十五條及ヒ第百十六條ニ定メタル年齢ノ區別ニ從ヒテ院長之ヲ承諾シ又ハ其許諾ヲ與フルコトヲ得

第百二十一條 婿養子縁組ニ付テハ婚姻ノ申出ヲ爲ス時ニ於テ當事者ハ婿養子縁組ヲ爲スノ意思ヲ身分取扱吏ニ申出ツ可シ

此縁組ニ必要ナル條件ノ欠缺スルトキハ身分取扱吏ハ婚姻ノ儀式ヲ差止ムルコトヲ得

此縁組ハ婚姻ノ儀式ヲ行フニ因リテ成ル

第百二十二條 遺言養子縁組ハ遺言書ヲ以テ之ヲ爲ス

此遺言ハ養子ヲ爲ス者ノ死亡ノ日ニ家督相續ヲ爲ス可キ卑屬親アルトキハ其效ヲ失フ

第百二十三條 遺言養子ヲ爲ス者ノ死亡シタルトキハ第百十五條以下ノ規定ニ從ヒ縁組ノ受諾ヲ爲ス可シ

第百二十四條 縁組ノ儀式ヲ行ヒ又ハ縁組ノ受諾ヲ爲シタルトキハ當事者ヨリ十日内ニ身分取扱吏ニ届出ツ可シ但此届出ハ代理人ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第百二十五條 第五十條乃至第五十二條ノ規定ハ之ヲ縁組ニ適用ス但本章第一節ニ定メタル條件ニ違背セサルコトヲ要ス

第三節 養子縁組ノ證據

第百二十六條 縁組ハ縁組證書ヲ以テ之ヲ證ス但第百九十一條ノ規定ノ適用ヲ妨ケス

四十三

第五十四條ノ規定ハ縁組ニ之ヲ適用ス

第四節 養子縁組ノ不成立及ヒ無効

第二百二十七條 縁組ハ人違、喪心又ハ強暴ニ因

リテ承諾ノ全ク欠缺シタルトキハ不成立トス

第二百二十八條 縁組ハ本章第一節ニ定メタル條

件ノ一ニ違背シタルトキハ無効トス

此無効ハ第三百十條ノ場合ヲ除ク外當事者其

他現實ノ利益ヲ有スル者及ヒ檢事ヨリ何時ニ

テモ之ヲ請求スルコトヲ得

第二百二十九條 縁組ハ左ノ場合ニ於テ無効トス

第一 縁組ノ申出ヲ爲サス又ハ身分取扱吏

ノ差止ヲ受ケタルニ拘ハラズ儀式ヲ行ヒ

タルトキ

第二 証人二人ノ立會ナクシテ儀式ヲ行ヒ

タルトキ

第三 第四十八條ノ規定ニ違ヒテ儀式ヲ行

ヒタルトキ

第四 縁組ノ申出ヲ受ケタル身分取扱吏ノ

管轄違ナルトキ

此無効ハ儀式後一箇年内ニ限り前條ニ掲ケタ

ル者ヨリ之ヲ請求スルコトヲ得

第三百十條 第八條又ハ第九條但書ノ規定

ニ違ヒタル縁組ノ無効ハ被後見人又ハ養家ノ

戸主ニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

被後見人カ成年ニ至リ又ハ戸主カ縁組ヲ知り

タル後縁組ヲ認諾シ又ハ三ヶ月ヲ過キタルト

キハ其訴權ヲ失フ

第三百十一條 強暴ノ爲メ承諾ニ瑕疵アル縁組

ノ無効ハ強暴ヲ受ケタル者ニ限り之ヲ請求ス

ルコトヲ得但強暴ヲ免カレタル後縁組ヲ認諾

シ又ハ三ヶ月ヲ過キタルトキハ其訴權ヲ失フ

第三百十二條 第十六條乃至第二十條ニ定

メタル許諾ナクシテ爲シタル縁組ノ無効ハ許

諾ヲ與フ可キ者又ハ許諾ヲ受ク可キ者ニ非サ

レハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第六十條第二項、第六十一條及ヒ第六十二條

ノ規定ハ此無効訴權ニ之ヲ適用ス

第三百十三條 婿養子縁組ニ付テハ當事者ハ縁

組又ハ婚姻ノ無効言渡ヲ原因トシテ婚姻又ハ

縁組ノ無効ヲ請求スルコトヲ得但無効言渡ノ

後三ヶ月ヲ過キタルトキハ其訴權ヲ失フ

第五節 養子縁組ノ效力

第三百十四條 養子ハ縁組ノ日ヨリ養家ニ於テ

嫡出子ノ權利及ヒ義務ヲ有ス

第三百十五條 養子ハ特別ニ職業ヲ營ムニ因リ

テ取得シタル利益及ヒ其齎帶シ又ハ相續、贈

與若クハ遺贈ニ因リテ取得シタル財産ノ所有

權ヲ有ス但未成年中ノ財産管理ハ第九章ノ規

定ニ從ヒテ養父母ニ屬ス

第六節 罰則

第三百十六條 縁組申出ノ時ニ必要ノ書類ヲ差

出タサシメサル身分取扱吏ハ二圓以上二十圓

以下ノ過料ニ處ス

縁組ノ不成立又ハ無効タル可キ法律上ノ原因

アルコトヲ知リテ其儀式ヲ行フテ差止メサル
身分取扱吏ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處
ス

第八章 養子ノ離縁

第一節 協議ノ離縁

第三百十七條 養子ヲ爲シタル者及ヒ養子ト爲

リタル者ハ協議ヲ以テ離縁ヲ爲スコトヲ得

然レトモ十五年未滿ニテ養子ト爲リタル者ノ

離縁ハ滿十五年ニ至ラサル間ニ限り養子ヲ爲

シタル者ト縁組承諾ノ權ヲ有スル者トノ協議

ヲ以テ之ヲ爲ス

第三百十八條 離縁ヲ爲サントスル養子ハ縁組

許諾ノ爲メ定メタル規則ニ從ヒ其父母、祖父

母又ハ後見人ノ許諾ヲ受クルコトヲ要ス

第三百十九條 當事者ハ離縁協議書ニ左ノ書類

ヲ添ヘテ身分取扱吏ニ届出ツ可シ

第一 縁組證書

第二 離縁ノ爲メニ必要ナル許諾書又ハ許

諸ヲ得ル能ハサル事由ヲ證スル書類

第二節 特定原因ノ離縁

第四百十條 離縁ハ左ノ原因アルニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第一 養子ヨリ養家ノ尊屬親ニ對シ又ハ養家ノ尊屬親ヨリ養子ニ對スル暴虐脅迫遺棄又ハ重大ノ侮辱

第二 重罪ニ因レル處刑

第三 竊盜又ハ詐欺取財ノ罪ニ因レル重禁錮一年以上ノ處刑

第四 浪費

第八十二條及ヒ第八十八條ノ規定ハ離縁ニ之ヲ適用ス

第四百十一條 離縁ヲ請求スル訴權ハ養子ヲ爲シタル者及ヒ養子ト爲リタル者ノミニ屬ス
養子ヲ爲シタル者又ハ養子ト爲リタル者カ死亡シタルトキハ離縁ノ訴權ハ消滅ス但訴訟中ニ死亡シタル場合ニ於テハ現實ノ利益ヲ有ス

第四百十五條 離縁ハ養子ノ家督相後續之ヲ爲スコトヲ得ス

第三節 離縁ノ效力

第四百十六條 離縁ハ其届出又ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ效力ヲ生ゼス

第四百十七條 離縁ト爲リタル養子ハ自己ノ過失ノ有無ニ拘ハラズ其所有財産ニ限り之ヲ請求スルコトヲ得但養家ノ爲メニ消費シタルモノハ此限ニ在ラス

第四百十八條 婿養子縁組ニ付テハ當事者ハ離縁ノ原因トシテ離婚ヲ請求シ又離婚ノ原因トシテ離縁ヲ請求スルコトヲ得但離婚又ハ離縁ヨリ三ヶ月ヲ過キタルトキハ其訴權ヲ失フ

第九章 親權

第一節 子ノ身上ニ對スル權

第四百十九條 親權ハ父之ヲ行フ
父死亡シ又ハ親權ヲ行フ能ハサルトキハ母之ヲ行フ

ル者其訴訟ヲ續行スルコトヲ得

第四百十二條 養子ヲ爲シタル者カ禁治産中ニ在ルトキハ後見人又ハ後見監督人ハ親族會ノ許可ヲ得テ離縁ヲ請求スルコトヲ得
養子ト爲リタル者カ禁治産中ニ在ルトキハ實家ノ父母、祖父母又ハ戸主ヨリ離縁ヲ請求スルコトヲ得

第四百十三條 養子ノ滿十五年ニ至ラサル間ハ縁組承諾ノ權ヲ有スル者ヨリ離縁ヲ請求スルコトヲ得

第四百十四條 養子カ養父母ト同居スルトキハ裁判所ハ離縁ノ訴訟中養子ヲシテ住家ヲ去ラシムルコトヲ得
此場合ニ於テハ養子ハ衣服其他ノ日用物品ヲ持去リ且必要アルトキハ養料ヲ請求スルコトヲ得

裁判所ハ養子ノ請求ニ因リテ其財産ヲ保存スル爲メニ必要ナル處分ヲ命スルコトヲ得

父又ハ母其家ヲ去リタルトキハ親權ヲ行フコトヲ得ス

第四百十五條 未成年ノ子ハ親權ヲ行フ父又ハ母ノ許可ヲ受ケルニ非サレハ父母ノ住家又ハ其指定シタル住家ヲ去ルコトヲ得ス
子カ許可ヲ受ケスシテ其住家ヲ去リタルトキハ父又ハ母ハ區裁判所ニ申請シテ歸家セシムルコトヲ得

第四百十一條 父又ハ母ハ子ヲ懲戒スル權ヲ有ス但シ過度ノ懲戒ヲ加フルコトヲ得ス

第四百十二條 子ノ行狀ニ付キ重大ナル不滿意ノ事由アルトキハ父又ハ母ハ區裁判所ニ申請シテ其子ヲ感化場又ハ懲戒場ニ入ルルコトヲ得

入場ノ日數ハ六ヶ月ヲ超過セサル期間内ニ於テ之ヲ定ム可シ但父又ハ母ハ裁判所ニ申請シテ更ニ其日數ヲ増減スルコトヲ得
右申請ニ付テハ總テ裁判上ノ書面及ヒ手續ヲ

用ニルコトヲ得ス

裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キテ決定ヲ爲ス可シ
父、母及ヒ子ハ其決定ニ對シテ抗告ヲ爲スコ
トヲ得

第二節 子ノ財産ノ管理

第二百五十三條 父ハ未成年ナル子ノ繼承ヲ行爲
ニ付テ之ヲ代表シ自己ノ財産ニ於テ如ク其
財産ヲ管理ス

第二百五十四條 父ノ管理ニ於テハ第九十四條
ニ記載シタル行爲ハ尙ホ之ヲ管理行爲ト看做
ス

第二百五十五條 子ハ特別ニ職業ヲ營ムニ因リテ
取得シタル利益及ヒ相續贈與又ハ遺贈ニ因リ
テ取得シタル財産ノ所有權ヲ有ス

第二百五十六條 父ハ管理ノ止ミタルトキハ子ニ
其財産ヲ引渡ス可シ但收益ハ子ノ養育教育ノ
費用及ヒ管理ノ費用ニ供シタルモノト看做ス

第五百五十七條 本節ノ規定ハ母ガ子ノ財産ヲ管

理スル場合ニ於テ之ヲ適用ス

然レドモ母ハ管理ヲ辭スルコトヲ得

第三節 嫡母、繼母及ヒ繼母ニ特別ナ
ル規則

第五十八條 嫡母、繼母又ハ繼母ノ親權ヲ行
フ場合ニ於テハ相談人ヲ付スルコトヲ得

此相談人ハ配偶者證書若クハ遺言書ヲ以テ之
ヲ定メ又ハ親族會其議決ヲ以テ之ヲ定ム

第五十九條 相談人ハ後見監督人ト同一ノ權
限及ヒ義務ヲ有ス

第六十條 配偶者カ相談人ヲ定メサル場合ニ
於テ親族會ヲ招集セザルトキ又ハ配偶者若ク
ハ親族會ノ定メタル相談人ニ相談セザルトキ
ハ區裁判所ハ檢事ノ請求ニ因リ嫡母繼父又ハ
繼母ニ對シテ親權行使ノ禁止ヲ宣告スルコト
ヲ得

第十章 後見

總則

第六十一條 後見ハ未成年者ノ父又ハ母ニシ
テ生存スル者ノ死亡ニ因リテ開始ス

父母共ニ生存シ又ハ其一方ノ生存スルモ親權
ヲ行フ能ハサルトキ又ハ母ガ子ノ財産管理ヲ
辭スルトキモ亦同シ

第六十二條 一家ニ未成年者數人アルモ後見
人ハ一人タル可シ

第六十三條 後見人ハ親族會ノ免除ヲ得サル
限リハ後見ヲ承諾ス可シ若シ後見人之ヲ承諾
セス又ハ其任務ヲ怠ルトキハ利害關係人又ハ
檢事ノ請求ニ因リテ區裁判所ハ代務者ヲ命ズ
ルコトヲ得

後見人ハ代務者ノ管理ノ費用ヲ負擔シ且其管
理ニ付キ責ニ任ス

第一節 後見人

第六十四條 親權ヲ行フ父又ハ母其生前ニ於
テ親族姻族又ハ他人ノ中ヨリ後見人タル可キ
者ヲ指定スル權ヲ有ス

理スル場合ニ於テ之ヲ適用ス

然レドモ母ハ管理ヲ辭スルコトヲ得

第三節 嫡母、繼母及ヒ繼母ニ特別ナ
ル規則

第五十八條 嫡母、繼母又ハ繼母ノ親權ヲ行
フ場合ニ於テハ相談人ヲ付スルコトヲ得

此相談人ハ配偶者證書若クハ遺言書ヲ以テ之
ヲ定メ又ハ親族會其議決ヲ以テ之ヲ定ム

第五十九條 相談人ハ後見監督人ト同一ノ權
限及ヒ義務ヲ有ス

第六十條 配偶者カ相談人ヲ定メサル場合ニ
於テ親族會ヲ招集セザルトキ又ハ配偶者若ク
ハ親族會ノ定メタル相談人ニ相談セザルトキ
ハ區裁判所ハ檢事ノ請求ニ因リ嫡母繼父又ハ
繼母ニ對シテ親權行使ノ禁止ヲ宣告スルコト
ヲ得

第十章 後見

總則

第六十五條 後見人ノ指定ハ遺言書若クハ證
書ヲ以テ之ヲ爲シ又ハ區裁判所ニ口述シテ之
ヲ爲ス可シ此口述ニ付テハ調書ヲ作ルコトヲ
要ス

第六十六條 父又ハ母ガ後見人ヲ指定セザリ
シトキハ其家ノ祖父後見人ト爲ル但未成年ノ
家族ニ付テハ成年ノ戶主後見人ト爲ル

第六十七條 遺言後見人モ祖父若クハ戶主タ
ル後見人モ有ラザルトキ又ハ此等ノ後見人カ
免除セラレ除斥セラレ罷黜セラレ若クハ死亡
シタルトキハ親族會ニ於テ後見人ヲ選定ス

第六十八條 未成年者ヲ有スル父若クハ母ノ婚
姻其他ノ事故ニ因リテ他家ニ入りタルトキハ
區裁判所ハ未成年者ノ親族若クハ利害關係人
ノ請求ニ因リ後見人ヲ設定スル爲メ親族會ハ
招集ス可シ

第二節 後見監督人

第六十九條 後見ニハ一人ノ後見監督人ヲ付スルコトヲ得

後見監督人ハ後見人ヲ定ムルト同一ノ手續ニ從ヒテ之ヲ指定シ又ハ親族會ニ於テ之ヲ選定ス

本章第四節及ヒ第五節ノ規定ハ後見監督人ニ之ヲ適用ス

第七十條 後見監督人ヲ置カサル場合ニ於テ監督ヲ要スルコト有ルトキハ親族會ニ於テ會員一人ヲ選定シ臨時ニ後見監督人ノ任務ヲ訴ハシム

第三節 親族會

第七十一條 親族會ハ未成年者ノ最近親族三人以上ヲ以テ之ヲ設ク但親族三人ニ滿タサル時ハ未成年者ニ緣故アル者ヲ以テ之ヲ補足ス本家及ヒ分家ノ戶主ハ親族會ニ列スルコトヲ得

第七十二條 親族會ハ親族、後見人、後見監督

人、保佐人又ハ利害關係人ノ求メニ因リテ集會ス

第七十三條 戶主成年ナルトキハ家族ノ爲メ親族會ヲ設クルコトヲ要セス

第七十四條 養子ノ親族會ニハ實家ノ親族モ其會員タルコトヲ得

第七十五條 會員ハ自己ノ利害ニ關係アル會議ニ列スルコトヲ得

第七十六條 親族會ヲ設クル能ハサルトキハ區裁判所其事ヲ行フ

第七十七條 未成年者ノ親族會ノ外親族會ヲ組成スル必要アルトキモ亦本節ノ規定ヲ適用ス

第四節 後見ノ免除

第七十八條 左ニ掲クル者ハ當然後見人タルコトヲ免除セラル

- 第一 現役ニ服スル軍人、軍屬
- 第二 被後見人住居ノ市又ハ郡ノ外ニ於テ

公務ニ從事スル人

第七十九條 後見免除ノ求メハ親族會之ヲ決メ後見人解任ヲ求メタルトキモ亦同シ

第五節 後見人及ハ親族會員ノ缺格除斥及ヒ罷黜

第八十條 左ニ掲クル者ハ後見人タルコトヲ得ス又親族會員タルコトヲ得ス

- 第一 未成年者
- 第二 民事上禁治産者及ヒ准禁治産者
- 第三 未成年者ノ身分又ハ財産ニ對シテ訴訟ヲ爲ス人及ヒ其人ノ尊屬親、卑屬親、配偶者

第八十一條 左ニ掲クル者ハ後見及ヒ親族會ヨリ除斥セラル可シ現ニ任務ニ從事スル者ハ之ヲ罷黜ス

- 第一 甚シキ不行跡ナル人
- 第二 後見管理ニ不能又ハ不正實ヲ顯ハセル後見人

第三 任務ヲ免除セラレタル裁判上ノ保佐人

第四 公權剝奪公權停止及ヒ刑事上禁治産ヲ受ケタル人

第五 復權ヲ得サル破産者及ヒ家資分散者

第八十二條 後見人及ヒ親族會員ノ除斥又ハ罷黜ハ親族會ニ於テ之ヲ爲ス

第六節 後見人ノ管理

第八十三條 後見人後見ノ開始ヲ知ルトキハ直チニ任務ニ就クコトヲ要ス

親族會ニ於テ後見人ヲ選定シ其後見在席スルトキハ直チニ任務ニ就キ若シ在席セサルトキハ通知ヲ得タル日ヨリ任務ニ就クコトヲ要ス

第八十四條 後見人ハ未成年者ヲ監護シ其教育ヲ擔任ス

尊屬後見人及ヒ戶主後見人ヲ除ク外後見人若シ未成年者ノ在來ノ住居又ハ教育方法ヲ變更セントスルトキハ親族會ニ協議ス可シ

第五百八十五條 後見人ハ父母ノ如ク未成年者ヲ

憂戒スルコトヲ得

未成年者ノ行狀ニ付キ重大ナル不滿意ノ事由

アルトキハ後見人ハ親族會ノ許可ヲ得タル上

第五百五十二條ノ規定ニ從ヒテ未成年者ニ對ス

ル處分ヲ爲スコトヲ得

後見人カ其權ヲ濫用シ又ハ其義務ヲ怠ルトキ

ハ未成年者及ヒ其親族ハ親族會ニ之ヲ申告ス

ルコトヲ得

第五百八十六條 後見人ハ未成年者ノ總テノ行爲

ニ付テ之ヲ代表シ善良ナル管理者ノ如ク其財

産ヲ管理シ管理ノ失當又ハ過失ヨリ生スル損

害賠償ノ責ニ任ス

第五百八十七條 後見人ハ當然其任務ニ就ク可キ

日ヨリ十日内ニ後見監督人ノ立會ヲ得テ未成

年者ノ財産ヲ調査ス可シ

財産目録ノ調製ハ二个月内ニ之ヲ終了スルコ

トヲ要ス但親族會ハ狀況ニ從ヒテ延期ヲ許ス

コトヲ得

第五百八十八條 後見人カ未成年者ノ債務者又ハ

債權者ナルトキハ目録ノ調製前其旨ヲ公證人

又ハ親族會ニ明言スルコトヲ要ス

後見人カ債權ノ存立ヲ知リテ之ヲ明言セザリ

シトキハ其債權ヲ喪失ス又債務ノ存立ヲ知リ

テ之ヲ明言セザリシトキハ區裁判所ハ其後見

人ヲ罷黜スルコトヲ得但罷黜ノ場合ニ於テハ

三十圓以下ノ過料ニ處スルコトヲ得

第五百八十九條 目録調製ヲ終了セサル間ハ後見

人ハ要急關ク可カラサル管理行爲ノミヲ爲ス

コトヲ得

第五百九十條 後見人ハ任務執行ノ初ニ於テ親族

會ニ協議シ未成年者ノ養育ノ需用、教育ノ程

度ト其資産トニ從ヒ毎年費ス可キ金額及ヒ財

産管理ニ係ル費用ヲ定ム

親族會ハ相當ノ給料ヲ與フル一人又ハ數人ノ

管理者ヲ後見人ノ自己ノ責任ヲ以テ使用スル

第二 不動産及ヒ重要ナル動産ヲ讓渡シ之

ニ物權ヲ設定シ又ハ之ヲ取得スルコト

第三 動産ノ不動産ニ係ル訴訟又ハ和解、仲

裁ニ關スルコト

第四 相続、遺贈若クハ贈與ヲ受諾シ又ハ

拋棄スルコト

第五 新築、増築又ハ大修繕ヲ爲スコト

第六 財産編第百十九條ニ定メタル期間ヲ

超ユル賃貸ヲ爲スコト

第五百九十五條 後見人ハ未成年者ノ財産ノ讓受

クルコトヲ得ヌ又未成年者ニ對スル權利ヲ讓受

スルコトヲ得ヌ

第五百九十六條 後見人ハ親族會ノ許可ヲ得ルニ

非サレハ未成年者ノ不動産ヲ賃借スルコトヲ

得ヌ

第五百九十七條 後見人ノ其權内ニ於テ爲シタル

行爲ハ未成年者ヲ羈束ス

第七節 後見監督人ノ任務

許可スルコトヲ得

第五百九十一條 後見人ハ未成年者ノ元本及ヒ收

益ノ剩額ヲ毎次ニ官ノ貯金預所又ハ確實ナル

銀行ニ預ク可シ其預カサリシ金額ニ付テハ法

律上ノ利息ヲ辯濟ス可シ

後見人カ未成年者ノ財産ノ利用方法ヲ變更セ

ンスルトキハ親族會ノ許可ヲ受クルコトヲ要

ス

第五百九十二條 尊屬後見人及ヒ戶主後見人ヲ除

ク外後見人ハ一年内ノ管理ノ狀況ヲ親族會

ニ報告ス可シ

第五百九十三條 後見人ハ未成年者ノ財産ニ付テ

ハ管理ノ權ヲ有スルニ止マリ此權外ノ行爲ハ

法律ニ定メタル條件ニ依ルニ非サレハ之ヲ爲

スルコトヲ得ヌ

第五百九十四條 左ニ掲グル行爲ニ關シテ後見人

ハ親族會ノ許可ヲ得ルコトヲ要ス

第一 元本ヲ利用シ又ハ借附ヲ爲スコト

第百九十八條 後見監督人ハ後見人ノ管理ヲ監視スルコト委任ス

後見監督人ハ後見人ヲ缺クトキト雖モ後見ノ任務ヲ行フコトヲ得ス此場合ニ於テハ直チニ後任ノ後見人ヲ定ムル手續ヲ爲スコトヲ要ス

第百九十九條 未成年者ト後見人トノ間ニ利益相反スルトキハ後見監督人ハ未成年者ヲ代表ス

第二百條 必要ナル場合ニ於テハ後見監督人ハ保存行爲ヲ爲スコトヲ得

第二百一條 法律上後見監督人ノ立會フ可キ行爲ニシテ其立會ナクシテ爲シタルモノハ無効トス

第八節 後見人ノ終了

第二百二條 後見ノ任務ハ後見人ノ一身ニ止マリ其相續人ニ移轉セズ然レトモ相續人カ成年者ナルトキハ後任ノ後見人ノ任務ニ就クマテ管理ヲ繼續ス可シ

第二百三條 未成年者カ成年ニ達シ又ハ自治産ニ至ルニ因リテ後見ノ止ムトキハ後見人ハ其計算ヲ終了スルマテ管理ヲ繼續ス

第九節 後見ノ計算

第二百四條 假ニ管理ヲ爲ス者ハ必要ナル行爲ノミヲ爲スコトヲ得

第二百五條 後見人ハ管理ノ終了スルトキハ其計算ヲ爲スコトヲ得

第二百六條 後見ノ決算ハ後見監督人ノ立會ニテ未成年者ノ成年ニ達シタル者又ハ其自治産ニ至リタル者ニ對シテ之ヲ爲ス
後見カ後見人ノ身上ニ係リテ終了スルトキハ決算ハ後任ノ後見人ニ對シテ之ヲ爲シ親族會ノ許可ニ付ス但第百八條ノ場合ニ於テハ決算ハ後見監督人ニ對シテ之ヲ爲ス
後見カ未成年者ノ死亡ニ因リテ終了スルトキハ決算ハ其相續人ニ對シテ之ヲ爲ス
後見ノ決算ニ係ル費用ハ未成年者ノ負擔ニ屬ス

ス

第二百七條 後見ノ決算ハ管理終了ノ日ヨリ三個月内ニ之ヲ爲スコシ但親族會ハ當事者ノ求めニ因リテ延期ヲ許スコトヲ得

第二百八條 後見人ト未成年者ノ成年ニ達シタル者トノ合意ニシテ後見ノ決算前ニ爲シタルモノハ總テ無効トス

第二百九條 後見ノ費用ハ豫算ノ定額ヲ超ユルト雖モ後見人其有益タルコトヲ證スルトキハ未成年者ノ負擔ニ屬ス

第二百十條 後見人ヨリ未成年者ニ返済ス可キ金額ハ決算完結ノ日ヨリ當然利息ヲ生ス
未成年者ヨリ後見人ニ返済ス可キ金額ハ決算完結ノ後後見人ノ催告ニ因リテ利息ヲ生ス

第二百十一條 後見人計算ニ係ル未成年者ノ訴權ハ五個年ノ後時効ニ因リテ消滅ス後見人其他假ニ後見管理ヲ爲シタル人ノ未成年者ニ對スル訴權モ亦同シ

未成年者ト後見監督人又ハ親族會員トノ間ノ後見ニ係ル訴權ニ付テモ亦前項ノ規定ヲ適用ス

此期間ハ未成年者ノ成年ニ達シ又ハ死亡シタル日ヨリ起算シ第百八條ノ場合ニ於テ後見ノ計算ニ係ル訴權ニ付テハ合意無効ノ裁判言渡ノ日ヨリ起算ス

第二百十二條 後見監督人及ヒ假ニ後見管理ヲ爲シタル人ハ代理契約ノ原則ニ從ヒテ過失ノ責ニ任ス

第十一章 自治産

第二百十三條 未成年者ハ婚姻ヲ爲スニ因リテ當然自治産ノ權ヲ得

第二百十四條 親權ヲ行フ父又ハ母ハ滿十五年ニ達シタル未成年ノ子ニ自治産ヲ許スコトヲ得

此自治産ハ身分取扱吏ニ届出ツ可シ
第二百十五條 後見ニ服スル未成年者ノ滿十七

年ニ達シタルトキハ親族會ハ其未成年者ニ自治産ヲ許スコトヲ得

此自治産ハ後見人ヨリ身分取扱吏ニ届出ツ可シ

第二百十六條 自治産ノ未成年者ハ之ヲ保佐ニ付ス

親權ヲ行ヒタル父又ハ母ハ當然保佐人ト爲ル親權ヲ行フ父又ハ母ハ其生前ニ第六十五條ノ規定ニ從ヒテ保佐人ヲ指定スルコトヲ得若シ之ヲ指定セサリシトキハ其家ノ祖父保佐人ト爲リ家族ニ付テハ成年ノ戸主保佐人ト爲ル夫ハ當然未成年ノ婦ノ保佐人ト爲ル

此他ノ場合ニ於テハ親族會ニ於テ保佐人ヲ選定ス

第二百十七條 後見人ニ關シテ定メタル免除、缺格、除斥及ヒ罷黜ノ規則ハ之ヲ保佐人ニ適用ス

第二百十八條 自治産ノ未成年者ハ保佐人ノ立

第一節 民事上禁治産

第二百二十二條 心神喪失ノ常況ニ在ル者ハ時時本心ニ復スルコト有ルモ其治産ヲ禁スルコトヲ得

第二百二十三條 禁治産ハ配偶者、四親等内ノ族、戸主及ヒ檢事ヨリ之ヲ區裁判所ニ請求スルコトヲ得

禁治産ヲ請求スル權利ヲ有スル一人ノ申立ニ因リテ言渡シタル裁判ハ總テノ人ニ對シテ既判力ヲ有ス

第二百二十四條 禁治産者ハ之ヲ後見ニ付ス配偶者ハ當然相互ニ後見人ト爲ル若シ配偶者アラサルトキハ其家ノ父後見人ト爲リ父アラサルトキハ親權ヲ行フコトヲ得ヘキ母後見人ト爲ル
期又ハ母ハ第六十五條ニ定メタル方式ニ從ヒテ後見人ヲ指定スルコトヲ得若シ指定セザリシトキハ第六十六條ノ規定ヲ適用ス

會アルニ非サレハ元本ヲ領收スルコトヲ得ス

第二百十九條 第九十四條ニ掲ケタル行爲ニ付テハ自治産ノ未成年者ハ保佐人ノ立會アルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二百二十條 父母ヲ除ク外保佐人ハ後見人ト同シク過失ノ責ニ任ス

第二百二十一條 自治産ヲ許サレタル未成年者カ不行跡又ハ財産管理ノ失當ニ因リテ自治産者タルニ適セサルトキハ親族會ハ其自治産ヲ廢止スルコトヲ得

親權ヲ行ヒタル父又ハ母ハ自治産ヲ廢止スルコトヲ得若シ此等ノ者アラサルトキハ親族會員又ハ保佐人ハ此廢止ヲ親族會ニ請求スルコトヲ得

未成年者ハ自治産廢止ノ日ヨリ親權又ハ後見ニ服シ成年ニ達スルマテ復タ自治産者ト爲ルコトヲ得ス

第十二章 禁治産

法律上ノ後見人モ遺言後見人モ有ラス又ハ此等ノ後見人カ免除セラレ除斥セラレ若シハ罷黜セラレタルトキハ第十章ニ定メタル方式ニ從ヒ親族會ニ於テ後人ヲ選定ス

第二百二十五條 配偶者、尊屬親卑屬親及ヒ戸主ヲ除ク外何人タリトモ十個年以上禁治産者ノ後見ヲ擔任スルコトヲ要セス

第二百二十六條 未成年者ノ後見ニ係ル規定ハ禁治産者ノ後見ニ之ヲ適用ス

第二百二十七條 疾病ノ性質ト資産ノ狀況トニ從ヒテ禁治産者ヲ自宅ニ療養セシメ又ハ之ヲ病院ニ入ラシムルハ親族會ノ決議ニ依ル但瘋病院ニ入ラシメ又ハ自宅ニ監置スル手續ハ特別法ヲ以テ之ヲ定ム

第二百二十八條 法律上ノ後見人ハ第九十二條ニ定メタル管理狀況ノ報告ヲ爲スコトヲ要セス

第二百二十九條 禁治産者ノ財産ヲ以テ其子孫

養育權又ハ營業ノ資ニ供セシトスルトキハ親族會ノ許可ヲ得ルコトヲ要ス

第二百三十條 禁治産者ハ禁治産ノ裁判言渡ノ日ヨリ無能力者トス

裁判言渡後ニ爲シタル禁治産者ノ行爲ハ之ヲ銷除スルコトヲ得

禁治産ノ裁判言渡前ニ爲シタル禁治産者ノ行爲ニ對シテモ其行爲ノ當時ニ於テ喪心ノ明確ナルトキハ銷除訴權ヲ行フコトヲ得

第二百三十一條 禁治産ノ原因止ミタルトキハ本入、配偶者、親族、姻族、戸主、後見人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ其禁ヲ解ク可シ
禁治産者ハ解禁ノ裁判言渡後ニ非サレハ其權利ヲ回復スルコトヲ得ス

第二節 准禁治産

第二百三十二條 心神耗弱 聾啞者、盲者及ヒ浪費者ハ准禁治産者ト爲シテ之ヲ保佐ニ付スルコトヲ得

准禁治産ノ言渡ハ配偶者、三等親内ノ親族及ヒ戸主ノ請求ニ因リ區裁判所之ヲ爲ス

保佐人ニ付テハ第二百二十四條及ヒ第二百二十五條ノ規定ヲ適用ス

第二百三十三條 第二百十七條乃至第二百二十條ノ規定ハ之ヲ准禁治産ニ適用ス

裁判所ハ狀況ニ從ヒ保佐人ノ立會アルニ非サレハ管理行爲ヲモ爲スコトヲ得タル旨ヲ言渡スコトヲ得

第二百三十四條 准禁治産者カ保佐人ノ立會ナクシテ爲シタル行爲ニ付テハ第二百三十條ノ規定ヲ適用ス

第二百三十五條 准禁治産ノ原因止ミタルトキハ本人配偶者、親族、姻族、戸主、保佐人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ其禁ヲ解ク可シ

第三節 刑事上禁治産

第二百三十六條 刑事上禁治産ヲ受ケタル者ハ其財産ヲ管理スルコトヲ得ス

又違言ヲ以テスル外ハ其財産ヲ處分スルコトヲ得ス

第二百三十七條 刑事上禁治産者ニハ後見人ヲ付シテ其財産ヲ管理セシム此後見人ノ指定及ヒ管理ノ方法ニ付テハ民事上禁治産者ノ後見ニ係ル規定ヲ適用ス

第二百二十九條ノ場合ニ於テハ禁治産者ノ同意ヲ得ルヲ以テ足ル

第四節 瘋癲者ノ財産ノ假管理

第二百三十八條 禁治産ヲ受ケサル瘋癲者アルトキハ配偶者、親族、戸主及ヒ檢事ハ區裁判所

ノ許可ヲ得テ特別法ニ定ムル手續ニ從ヒ之ヲ瘋癲病院ニ入レ又ハ自宅ニ監置スルコトヲ得

此場合ニ於テハ裁判所ハ直チニ假管理人ヲ指定ス

第二百三十九條 瘋癲院ニ入り又ハ自宅ニ監置セラレタル者ハ入院中又ハ監置中其財産ヲ管理シ及ヒ處分スルコトヲ得ス

第二百四十條 假管理人ハ瘋癲者ノ總テノ行爲ニ付テ之ヲ代表シ禁治産者ノ後見人ト同視セラル但必要ナル行爲ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二百四十一條 瘋癲者ノ入院中又ハ監置中ニ行爲ヲ爲シタル證據アルトキハ其行爲ヲ銷除スルコトヲ得但相手方カ瘋癲者ノ本心ニテ行爲ヲ爲シタルコトヲ證スルトキハ此限ニ在ラズ

第二百四十二條 瘋癲者ノ無能力ハ區裁判所カ假管理ヲ解クニ因リテ止ム

第十三章 戸主及ヒ家族
第二百四十三條 戸主トハ一家ノ長ヲ謂ヒ家族トハ戸主ノ配偶者及ヒ其家ニ在ル親族、姻族ヲ謂フ

戸主及ヒ家族ハ其家ノ氏ヲ稱ス
第二百四十四條 戸主ハ家族ニ對シテ養育及ヒ普通教育ノ費用ヲ負擔ス但家族カ自ラ其費用

得ルコトヲ得ルコト又ハ戸主ノ許諾ヲ受
ケスシテ他所ニ在ルトキハ此限ニ在ラス

第二百四十五條 家族ハ特別ニ職業ヲ營ムニ因
リテ取得シタル利益及ヒ其齎帶シ又ハ遺産相
續贈與若クハ其贈與ニ因リテ取得シタル財産
ノ所有權ヲ有ス

然レトモ家族カ其家ノ爲メ消費シタル財産ニ
付テハ戸主ニ對シテ償還ヲ求ムルコトヲ得
ス

第二百四十六條 家族ハ婚姻又ハ養子縁組ヲ爲
サントスルトキハ年齢ニ拘ハラヌ戸主ノ許諾
ヲ受ク可シ

第二百四十七條 他家ニ入リテ夫婦又ハ養子ト
爲リタル者ハ婚姻ノ無効、養子縁組ノ無効、離
婚又ハ離縁ノ合場ニ於テハ實家ニ復歸ス

然レトモ此者カ婚姻又ハ養子縁組ニ付キ實家
戸主ノ許諾ヲ受ケサリシトキハ戸主ハ復歸ノ
事由ヲ知リタル日ヨリ一ヶ月内ニ身分取扱吏

ニ申立テ復歸ヲ拒ムコトヲ得

第二百四十八條 他家ニ入リテ夫又ハ婦ト爲リ
タル者ハ其配偶者ノ死亡シタルトキト雖モ婚
家ヨリ更ニ他家ニ入ルコトヲ得ス

然レトモ婚家及ヒ實家ノ戸主ノ許諾ヲ受ケテ
實家ニ復歸スルコトヲ得

第二百四十九條 實家ニ復歸ス可キ者又ハ復歸
セントスル者カ復歸スル能ハサルトキハ一家
ヲ新立ス

第二百五十條 推定家督相續人ニ非サル家族タ
ル男子カ戸主ノ許諾ヲ受ケスシテ婚姻ヲ爲シ
タルトキハ一家ヲ新立ス

第二百五十一條 家督相續ニ因リテ戸主ト爲リ
タル者ハ其家ヲ廢スルコトヲ得ス但分家ヨリ
本家ヲ承繼シ其他正當ノ事由アルトキハ區裁
判所ノ許可ヲ得テ廢家スルコトヲ得

第二百五十二條 戸主カ國民分限ヲ喪失シタル
トキハ廢家シタル者トシ推定家督相續人ハ一

取ルコトヲ得

第二百五十七條 戸主カ家族ニ對シテ婚姻其他
ノ事件ニ付キ許諾ヲ與フ可キ場合ニ於テ未成
年ナルトキ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキ

ハ戸主ニ對シテ親權ヲ行フ者又ハ後見人之ヲ
代表ス

第二百五十八條 入夫婚姻ノ場合ニ於テハ婚姻
或入夫ハ戸主ヲ代表シテ其權ヲ行フ

第二百五十九條 戸主失踪ノ宣言アリタル後其
家督相續ノ占有ヲ得タル者ハ其占有中戸主ノ
權ヲ行フ

第二百六十條 單身戸主失踪ノ宣言アリテ其亡
失若クハ最後音信ノ日ヨリ三十ヶ年ニ至ルモ
家督相續ノ占有者ナキトキハ絶家ス

第二百六十一條 戸主死亡シテ家督相續人ナキ
トキハ絶家シ其家族ハ一家ヲ新立ス

第十四章 住所

第二百六十二條 民法上ノ住所ハ本籍地ニ在ル

家ヲ新立シ前戸主ノ家族ハ新戸主ノ家ニ入ル

第二百五十三條 戸主カ婚姻其他ノ原因ニ由リ
テ適法ニ廢家シ他家ニ入リタルトキハ其家族
モ亦從テ其家ニ入ル

第二百五十四條 卑屬親ヲ有スル者カ婚姻若ク
ハ養子縁組ノ無効又ハ離婚若クハ離縁ニ因リ
テ婚家又ハ縁家ヲ去ルトキハ卑屬親ハ仍ホ其
家ニ屬ス

第二百五十五條 父母ノ知レサル子ハ一家ヲ新
立ス

第二百五十六條 他家ニ入リテ夫婦又ハ養子ト
爲リタル者ハ配偶者又ハ養子ヲ爲シタル者ト
協議ノ上兩家ノ戸主ノ許諾ヲ受ケテ實家ニ在
ル卑屬親ヲ自家ニ引取ルコトヲ得

婚姻若クハ養子縁組ノ無効又ハ離婚若クハ離
縁ニ因リテ婚家又ハ縁家ヲ去リタル者ハ配偶
者又ハ養子ヲ爲セシ者ト協議ノ上兩家ノ戸主

ノ許諾ヲ受ケテ其家ニ在ル卑屬親ヲ自家ニ引

モノトス

第二百六十三條 戶主ハ本籍ヲ移ス地ノ身分取
扱吏ニ申述シテ住所ヲ變更スルコト得

未成年者又ハ民事上禁治産者タル戶主ノ住所
ハ親族會ノ許可ヲ得テ後見人之ヲ變更スルコ
トヲ得

第二百六十四條 家族カ獨立シテ一家ヲ成スト
キハ本籍ヲ定ムル地ノ身分取扱吏ニ其意思ヲ
申述シテ住所ヲ設定スルコトヲ得

一家漸立ノ未成年者ニ付テハ後見人住所ヲ設
定ス可シ

第二百六十五條 外國人始メ日本ニ住所ヲ定ム
ルトキハ其意思並ニ本國ノ氏名及ヒ出生年月
日ヲ其地ノ身分取扱吏ニ申述シ家族アルトキ
ハ其氏名及ヒ出生年月日ヲモ申述ス可シ

第二百六十六條 本籍地カ生計ノ主要タル地ト
異ナルトキハ主要地ヲ以テ住所ト爲ス

第二百六十七條 左ノ場合ニ於テハ居所ヲ以テ

住所ニ代用ス

第一 住所ノ知レサルトキ
第二 日本ニ住所ヲ定メサル外國人ニ關ス
ルトキ

第二百六十八條 何人ト雖モ或ル行爲又ハ事務
ノ爲メニ假住所ヲ選定スルコトヲ得但此選定
ハ書面ヲ以テスルコトヲ要ス

第十五章 失踪

第一節 失踪ノ推定

第二百六十九條 住所及ヒ居所ヨリ亡失シ又ハ
音信絶エテ生死分明ナラサル人ハ之ヲ失踪者
ト推定ス

此推定ノ裁判ハ本人ノ住所ノ區裁判所之ヲ爲
ス

第二百七十條 失踪ノ推定ヲ受ケタル者カ總理
代理人ヲ定置キタルトキハ其代理人ハ失踪ノ
推定中本人ノ財産ヲ管理ス但必要アルトキハ
裁判所ハ現實ノ利益ヲ有スル關係人、推定相

財産ヲ以テ之ヲ支辨ス

關係人、推定相續人又ハ檢事ノ請求アルトキ
ハ本條ノ規定ヲ代理人ニ適用スルコトヲ得

第二百七十四條 代理人又ハ管理人ハ推定相續
人ヲ除ク外其請求ニ因リテ裁判所ノ定メタル
給料ヲ受ク裁判所ハ管理及ヒ財産返還ノ擔保
トシテ保證人其他相當ノ擔保ヲ立テシムルコ
トヲ得

第二百七十五條 代理人又ハ管理人ハ失踪者ノ
子孫ノ教育、婚姻又ハ營業ノ爲メ資財ヲ與フ
ルニ付テハ區裁判所ノ許可ヲ受クルコトヲ要
ス

第二節 失踪ノ宣言

第二百七十六條 失踪者カ代理人ヲ定置カカリ
シトキハ五ヶ年又代理人ヲ定メ置キタルトキ
ハ任期ノ長短ヲ問ハス七ヶ年ニ至ルモ其生死
ノ音信ヲ得サルニ於テハ失踪者ノ死亡ニ因リ
テ發生スル權利ヲ其財産上ニ有スル者ハ失踪

續人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ代理人ノ解任ヲ
言渡シ又ハ其後任ヲ指定スルコトヲ得

第二百七十一條 失踪ノ推定ヲ受ケタル者カ總
理代理人ヲ定置カカリシトキハ裁判所ハ前條
ニ掲ケタル者ノ請求ニ因リテ管理人ヲ指定ス
此管理人ニハ成ル可ク推定相續人ヲ指定スル
コトヲ要ス

第二百七十二條 代理人又ハ管理人ハ管理行爲
ヲ爲ス權限ノミヲ有ス他ノ行爲ニ付テハ必要
ノ場合ニ限り裁判所ノ許可ヲ得テ之ヲ爲スコ
トヲ得

代理人又ハ管理人ハ本人ノ利益ニ關係アル目
録調製計算及ヒ清算ニ付テ本人ヲ代表ス

第二百七十三條 管理人ハ失踪者ノ動産及ヒ證
書ノ目錄ヲ調製ス可シ又不動産ノ形狀ヲ確定
セシムル爲メ鑑定人ノ選定ヲ裁判所ニ請求ス
ルコトヲ得鑑定人ノ報告書ハ裁判所ノ認可ニ
付スルコトヲ要ス此等ノ手續ノ費用ハ本人ノ

者ノ住所ノ區裁判所ニ失踪ノ宣言ヲ請求スル
コトヲ得

第二百七十七條 右請求ノ許ス可キモノナルト
キハ裁判所ハ失踪者ノ住所及ヒ其最後ノ居所
ノ地ニ於テ證人訊問ヲ爲ス可キコトヲ命ス可
シ此證人訊問ニ付テハ民事訴訟法ニ定メタル
忌避ノ規則ヲ適用セス

第二百七十八條 證人訊問ヲ命スル決定ハ裁判
所ノ揭示板ニ揭示シ且官報又ハ公報ニ掲載シ
テ之ヲ公示ス可シ

第二百七十九條 失踪宣言ノ裁判ハ證人訊問ヲ
命シタル決定ヨリ一ヶ年ノ後ニ非サレハ之ヲ
宣告スルコトヲ得ス

此裁判ハ前條ノ手續ニ從ヒテ之ヲ公示ス可シ
第三節 失踪宣言ノ效力

第二百八十條 失踪宣言ノ裁判アリタルトキハ
失踪者ノ遺言書ハ關係人推定相續人又ハ檢事
ノ請求ニ因リテ之ヲ開封ス可シ

キハ其五分ノ一ヲ取戻スコトヲ得十ヶ年後ハ
其全部ヲ失フ

第二百八十四條 失踪者ノ相續順位ニ在ル者ハ
他ノ者カ財產占有ヲ得タル日ヨリ三十ヶ年間
其財產ノ返還ヲ請求スルコトヲ得

此場合ニ於テモ果實ハ前條ノ規定ニ從ヒテ之
ヲ取戻スコトヲ得

第四節 失踪ノ推定及ヒ宣言ニ關スル
規則

第二百八十五條 失踪シテ生存ノ確實ナラサル
人ニ歸ス可キ權利ヲ請求スル者ハ其人カ權利
ノ發生セシ日ニ生存シタルヲ證スルコトヲ要
ス此舉證ヲ爲ササル間ハ其請求ヲ受理セス

第二百八十六條 失踪シテ生存ノ確實ナラサル
人ニ歸ス可キ相續ハ次順位ノ者ニ屬ス
失踪者ニ歸ス可キ財產ヲ相續スル者ハ財產目
録ヲ調製ス可シ

第二百八十七條 前二條ノ規定ハ失踪者又ハ其

失踪者ノ亡失又ハ最後音信ノ日ニ於ケル推定
相續人其他失踪者ノ死亡ニ因リテ發生スル權
利ヲ其財產上ニ有スル者ハ直チニ其財產ヲ占
有スルコトヲ得

第二百八十一條 失踪者ニ屬スル財產ノ占有ニ
付テハ總テ相續ニ關スル規定ヲ適用ス
此占有ヲ得タル者ハ第三者ニ對シテハ財產ノ
所有者トス然レトモ占有者ハ推定相續人ヲ除
ク外財產返還ノ擔保トシテ裁判所カ相當ト認
ムル保證人其他ノ擔保ヲ立ツ可シ

其保證人ノ義務又ハ擔保十五ヶ年ノ後止ム
第二百八十二條 失踪者ノ現出シ又ハ音信アリ
タルトキハ失踪宣言ノ效力ハ即時ニ止ム

失踪者ハ其財產ヲ現狀ノ儘ニテ取回シ又占有
者ノ處分ニ因リテ不當ニ利得シタルモノヲ取
戻スコトヲ得

第二百八十三條 果實ニ付テハ失踪者カ其亡失
又ハ最後音信ノ日ヨリ十ヶ年內ニ現出スルト

相續人及ヒ承繼人ニ屬スル相續ノ請求其他ノ
權利ヲ行フヲ妨クルコト無シ此等ノ權利ハ普
通ノ時効ニ因ルニ非サレハ消滅セス

第五節 不在者ニ關スル規則

第二百八十八條 生存ノ確實ナル人カ住所若シ
ハ居所ヲ去リテ其財產ヲ管理スル者アラサル
トキ又ハ裁判所カ未タ失踪ヲ推定セサルモ本
人不在ノ爲メ其財產ノ放置セラルトキ又ハ

失踪ノ推定中若シハ宣言後ニ失踪者ノ生存ノ
確實ト爲リタルトキハ區裁判所ハ利害關係人
又ハ檢事ノ請求ニ因リテ必要ノ保存處分ノ命
スルコトヲ得

第十六章 身分ニ關スル證書

第二百八十九條 出生、婚姻、養子縁組、死亡其
他各人ノ身分ニ關スル事件ハ身分取扱吏ノ主
管スル帳簿ニ之ヲ記載ス可シ

第二百九十條 帳簿ニ記載シタル證書ハ公正證
書ノ證據力ヲ有ス但違法ノ記載ハ效力ナシ

合式ノ謄本ハ證書ト同一ノ效力ヲ有ス

第二百九十一條 帳簿ノ設備ナク若クハ中絶シタルトキ又ハ其全部若クハ一分ノ毀損シ亡滅シタルトキ又ハ其記載上甚シキ違式、錯誤若クハ脱漏アリテ信用ヲ置ク可カラサルトキ又ハ身分取扱吏ノ詐欺若クハ過失ニ因リテ證書ヲ作ラサリシトキ證人又ハ私ノ書類ヲ以テ先ツ其事實ヲ證シ且身分上ノ事件ヲ證スルコトヲ得

第二百九十二條 證書ノ訂正ハ裁判ヲ以テスルコト非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二百九十三條 帳簿ノ調製、證書ノ記載、届出ノ手續其他ノ事項ハ特別法ヲ以テ之ヲ規定ス

明治二十三年十月十九日印刷

定價七錢

明治二十三年十月廿二日出版

東京市淺草區新平右衛門町
壹番地

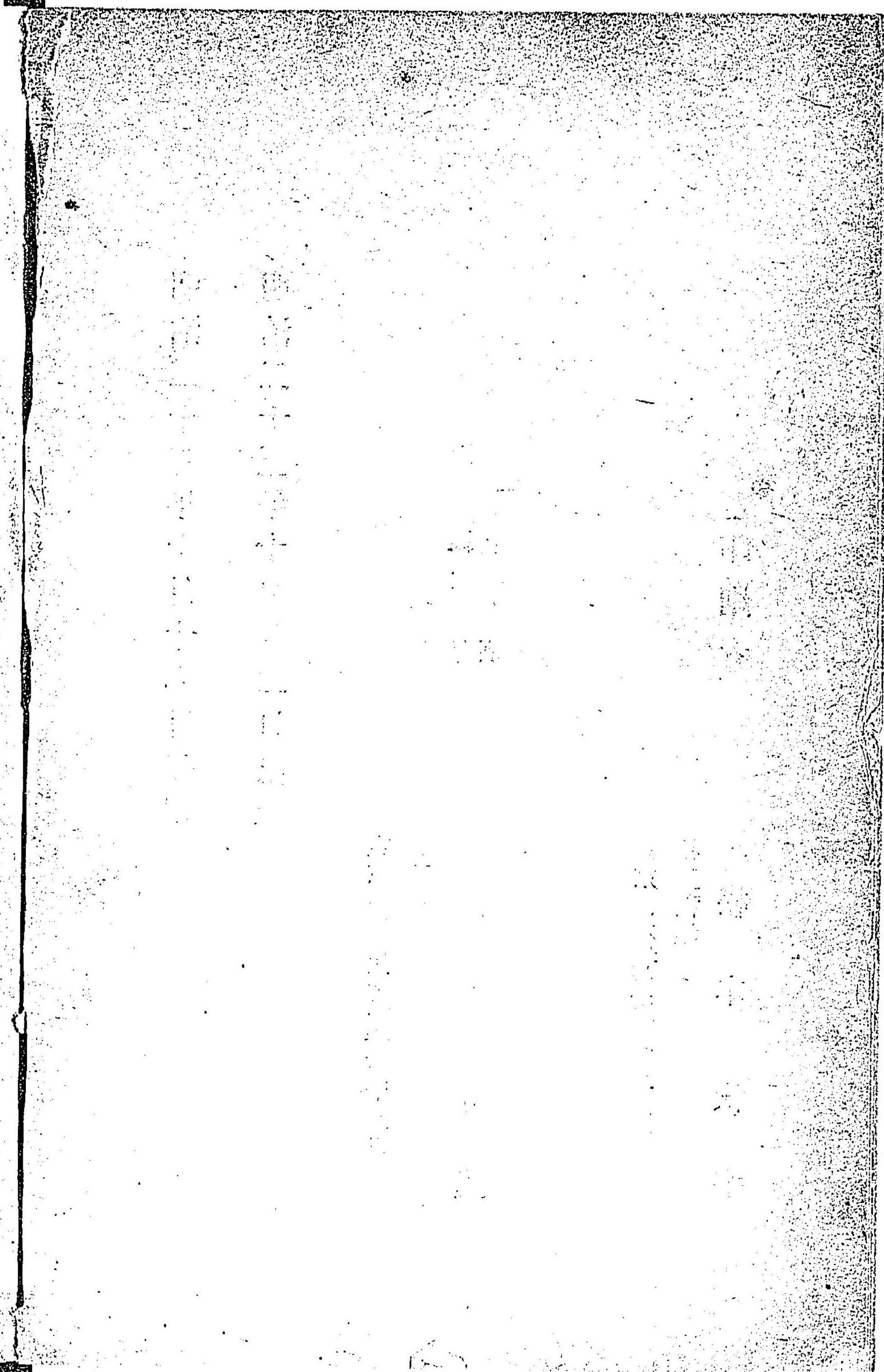
編輯兼
發行者

三好守雄

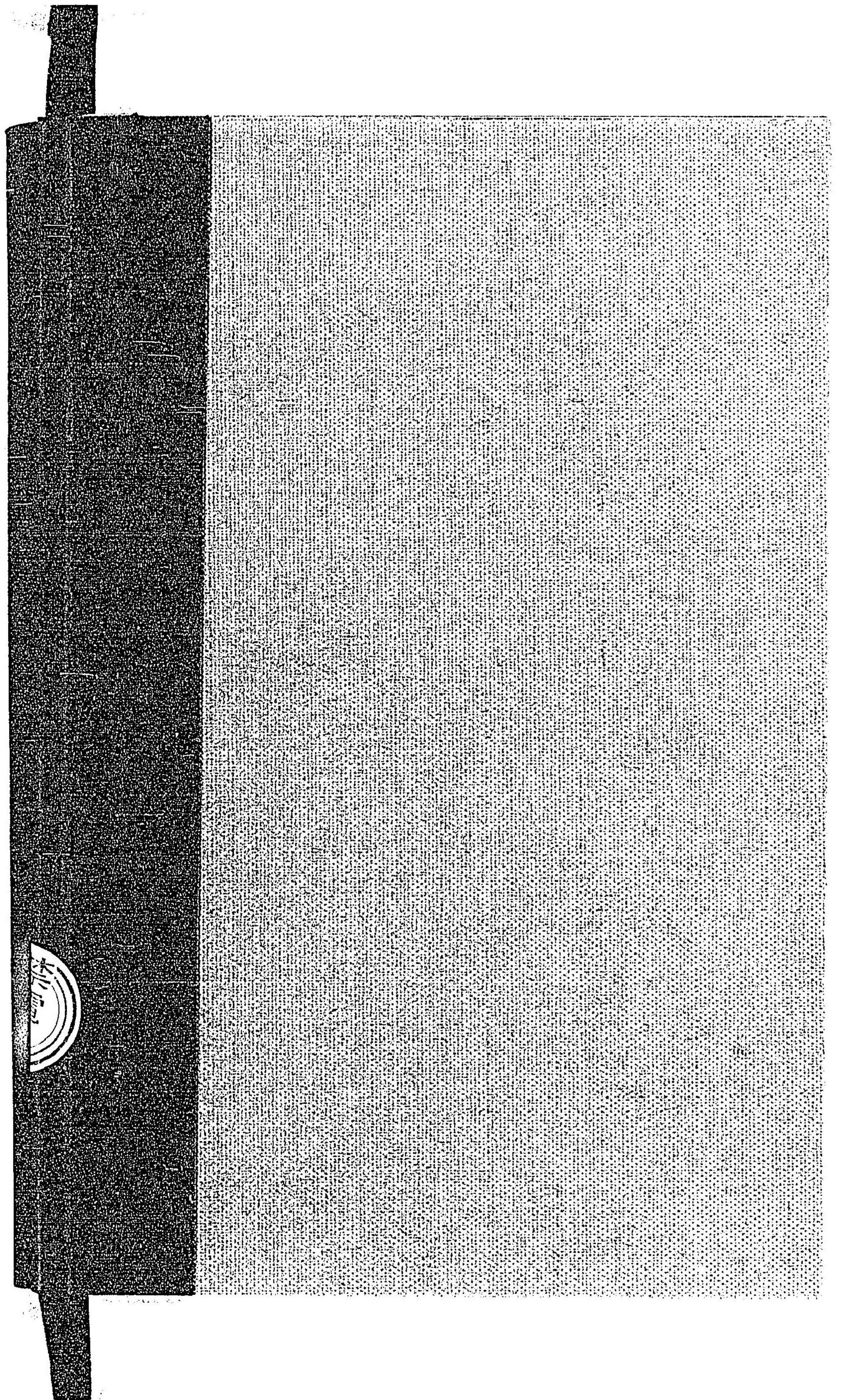
東京市本郷區湯島壹丁目
拾三番地

印刷者

松本秋齋



QY 32-62



CZ
791
024

刑事訴訟法

民法財産取得篇続篇

民法人事篇

国立国会図書館

036722-000-1

CZ-791-024

刑事訴訟法民法財産取得篇続篇民法人事篇

三好守雄

M23

BBS-0149

